
愛を教えて 輪廻

御堂志生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛を教えて 輪廻

【Nコード】

N9618N

【作者名】

御堂志生

【あらすじ】

国内最大コンツェルン藤原グループ社長・藤原卓巳の従弟・藤原太一郎。放蕩息子、馬鹿息子などなど、不名誉な呼び名を多数持つ彼は、関わる多くの人間を傷つけ、投げやりな人生を歩んできた。そんな彼に、救いの手を差し伸べてくれたのが藤原万里子。卓巳の妻だ。淡い恋心を抱くがあえなく玉砕。しかし、万里子に出逢ったことで彼の心に劇的な変化が訪れる。人生をやり直す。その胸に誓い、彼は藤原家を出た。そして伊勢崎太一郎の名前で働き始めた彼だったが……運命は彼が犯した罪を見逃してはくれなかつ

たのである。果たして、真実の愛に巡り会えるのか？「愛を教えて」番外編です。2010/12/21 完結。12/23 番外編1話。/サイトでもご覧いただけます。/第二章2011/12/22 連載開始)

(1) 冷たい手錠(前書き)

御堂です。

本編の後に連載していましたが、長くなりそうなので分けることにしました。

人物や団体・施設などの名称は、全て架空のもので、実在のものとは一切関係ございません。

(1) 冷たい手錠

小平警察署 玄関脇にある赤色灯の下を通り抜け、二人の人影が警察の駐車場に向かった。雲の切れ間から弦月が顔を出し、彼らの姿を映し出す。

前を歩く男性は三十代半ば、細身のすっきりした容姿で薄茶色のスーツに亜麻色のネクタイを締めている。かなりの長身だろう。そんなスーツ姿の男性より更に長身で横幅もある男が、後ろをとぼとぼと歩いていった。七月半ば、蒸し暑い夜に相応しいランニングシャツを着て、下は擦り切れたジーンズとスニーカー。その対照的な格好から、彼は二十歳前後の学生に見えた。

「悪かったな。大変な時なのに……迷惑かけちまって」
「いえ。休職中ですからね。毎日、暇を持て余しています」

宗は間もなく手放す予定の愛車RX-7のドアを開けながら、冗談めかして答える。

宗行臣、日本最大のコンツェルン藤原グループ社長・藤原卓巳の個人秘書を務めていた。……が、現在はわけあって休職中だ。彼を呼び出すのは気が引けたが、太一郎には他に頼れる人間がいなかった。

「ご自宅まで送りますよ。乗って下さい」

「いいよ、歩いて帰れる距離だから。それより……このこと、出来れば卓巳には報告しないでくれないか」

「……太一郎様」

「卓巳が聞いたらさ、俺ならやりかねないって言うだろうし。それに……」

卓巳は太一郎にとって血の繋がった従兄である。誰が見ても優秀で有能な上に誠実という、完璧な男だ。そう、太一郎とは比べ物にならない。考えれば考えるほど、太一郎は自分が屑くずに思えてくるのだ。

藤原太一郎ふじわらたいいちろう、現在は父の旧姓を名乗り、伊勢崎太一郎いせみきたいちろうという。

彼はこの日、初めて 手首に冷たい手錠を嵌められたのだった。

くわくわくわくわく

藤原グループ先代社長を祖父に持つ彼は、物質的に何の不自由もない少年時代を送った。生まれた時から次期後継者と言われ、多くの従業員に傅かしますかれて育つ。母は、一人息子の太一郎が何をしても怒らず、父は怒れない人であった。

祖父・高德は決して太一郎を愛していたわけではない。気に食わぬ正妻・皐月の産んだ息子に、自身が一代で築き上げた財産を譲りたくなかっただけなのだ。だからこそ『愛人の娘』である太一郎の母・尚子呼び寄せ、婿養子まで取らせた。生まれた孫を傀儡にして、いつまでも君臨したかったのだらう。

そんな祖父の思惑など知らず、太一郎は後継者となるべく努力した。だが、彼の何処を探しても、日本最大のコンツェルンを率いる能力など欠片も見つからず……。そのことに自覚の芽生えた太一郎は、暴力という単純な反抗手段に出たのである。

こういった反抗は、無意識のうちに大人の関心を惹くことが目的だという。太一郎も同じであった。だが、彼は誰の関心も惹けぬまま 暴力はより弱い者へと向かって行く。成長と共に卑怯な手段

も用いるようになり、ついには女性に対して性的暴力を犯すまで堕ちて行った。

藤原の名前を使い、多数の女性を騙しベッドに連れ込んだ。

中には『愛人の孫』である自分は、『正妻の孫』である卓巳に全てを奪われたのだ、という御託を信じた女性もいた。太一郎に同情し、婚約者には許さなかった身体を彼に投げ出し、妊娠した時にはどうしても産むと言いつつ張ったのだ。だが、女性の父親は代議士で、太一郎の本性を見抜いていた。結局、子供は中絶し、女性は婚約者の元に嫁いだという。

高校時代から昨年まで、太一郎が知るだけで女性に中絶費用を要求されたことは二桁に達する。慰謝料の名目なら、その倍はあるだろう。自堕落に、愚者を絵で描いたような生き方を続けてきた彼に、転機が訪れたのが卓巳の結婚であった。

卓巳の妻・万里子は、たおやかで儂い女性だ。見るからに弱々しく、押さえつけられれば何でも言いなりに出来ると思った。最終的には金さえ払えばどんな罪も赦される。そう思っていた太一郎に、万里子は手痛い一撃を与えたのである。

卓巳を愛している。卓巳でなければ嫌だ、と……万里子は何の躊躇もなしに喉を突こうとした。金では買えない“愛”の存在を太一郎に教えてくれたのは万里子だ。そして、太一郎の言葉を最後まで信じ、義理の祖母・臯月との橋渡しまでしてくれたのも彼女であった。

だが、どれほど恋い焦がれても、万里子を手に入れることは出来ない。

以前の彼であれば、得られぬものなら、と壊していたかも知れな

い。しかし、今の太一郎は万里子の信頼だけは失いたくなかった。たとえ家族としてでも……それは太一郎の人生におけるたった一本の『蜘蛛の糸』だ。

太一郎は藤原の名前を捨て、ゼロからのスタートを決意したが……人生は彼が思うほど、甘いものではなかったのである。

く　　く　　く　　く　　く

「結局……俺は変わらないのかも知れない」

「無実だと認められたわけですから。そう気にされなくてもよろしいのでは？」

宗の氣遣いに、太一郎はゆっくり首を振る。

「捕まった時、本気で違うって言えなかった。“今回は違う”ってだけだ。俺のやって来たことは……手錠を嵌められてもしょうがないことばかりなんだ」

「それでも“今回は”違います。太一郎様、変わろうとして変わらないのと、変わろうとしないのは同じことではありませんよ」

そこまで言くと宗は相好を崩した。

「と、いうのは受け売りですが、何方のお言葉かは、どなた言わずともお判りでしょう」

太一郎は答えなかった。だが、心に一つの名前が過る。

今でも、思い浮かべるだけで胸の奥が温かくなる笑顔が、彼の胸の中心を占めていた。

「太一郎様、私はあなたの味方です」

深夜に呼び出したにも関わらず、宗は怒る様子もなく、太一郎の釈放の手続きに尽力してくれた。最後に優しい言葉を太一郎に掛け、

新しい仕事はすぐに見つけると約束し、引き上げたのだった。

人生は愛に満ちている。

手を伸ばし、愛しさえすれば……其処そこかしこ彼処こゝに愛は溢れているのだ。

だが、今の太一郎にとって“愛”は太陽のように熱く眩しかった。手に入れるためには、心と体を焼き尽くすほどの犠牲を必要としたのである。

(1) 冷たい手錠(後書き)

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

ずっと悩んでいたのですが、背中を押して下さいの方が現れたので、

番外編を分けました(苦笑)

名緒様、ありがとうございます！

本編の後に連載中の番外編は、次の更新時に削除します。

以降はこちらのみ、更新していきます。

引き続き、よろしくお願い致しますm()m

(2) 悪魔の微笑

「おかえりなさい。伊勢崎……うっん、藤原太一郎くん」
甘ったるい、そして人を小馬鹿にしたような声が太一郎に耳に届いた。

築何十年か定かでない二階建てアパートの前に、一人の女が立つ。緩くウェーブした茶髪、水商売の女を思わせる濃い目のメイク、マキシ丈の黒のノースリーブワンピースの上に、軽くカーディガンを羽織り、腰をくねらせている。三十過ぎて若作りにも程がある、というのが太一郎が同僚から聞いた噂だ。

名村郁美、宗の紹介で勤め始めた名村産業の社長夫人である。

名村産業は小平市内にある廃棄物収集業者だ。一般廃棄物……いわゆる生ごみの収集から、資源ごみ、粗大ごみ、産業廃棄物、特定家電の収集、し尿汲み取り業務に浄化槽の清掃まで、市や都の指定業者の一つでもあった。

会社の規模は 従業員は臨時採用を合わせて二十人程度の有限会社である。社長は名村源太、還暦を迎えた二年前、半分の年齢のホステスを後妻にしたという人物だ。社長には先妻との間に子供が二人いる。二十代の息子と娘だが、どちらも太一郎に目には『相当な玉』に映った。

とくに息子の等は酷い。肩書きは『名村クリーンサービス』という主に官公庁や学校の掃除を請け負う会社の社長である。太一郎より二つ上の二十六歳 自分で起業したなら大したものだが……。父親のコネと金で作った会社だ。おまけに等自身は、給料を受け取る以外の仕事は何もしていないという。

つい先日まで、太一郎は入ったばかりの平社員に過ぎず、彼らの眼中にはなかった。

それが……六日前、太一郎がある光景を目撃したことで状況が変わってしまった。

「びっくりしたわあ。あなたがまさか、あの藤原のお坊ちゃんだなんて、ね」

「話がそれだけなら……俺はこれで」

軽くを頭を下げ、郁美の横をすり抜けようとした時、彼女は太一郎の腕を取って言った。

「あたしと等さんのこと、言わなかったんだ。ねえ、どうして？」

六日前、太一郎は社長夫人と義理の息子の情事を目撃した。だが、見なくても気付いてはいたのだ。腐った男女の関係は汚臭を放つ。それは仕事の時に嗅ぐ匂いより強烈だった。

「誰にも言わないと約束したのに……なんで、俺を嵌めたんだ？」
「だって、亭主に知れたら終わりなもの。上手くやったつもりだったのに。レイプされた、ってだけにしとけば良かったのよねえ。お金も脅し取られたなんて言っちゃったから……ボロが出ちゃった」

郁美は太一郎を罫に嵌めるため、夜の会社に呼び出した。

「あなた、独り暮らしのお年寄りの家に上がり込んだでしょう？
その家からお金が無くなったってクレームが入ったのよ！ すぐに来なさい！」

社長夫人からそんな呼び出しを受けたら、仮に〇時近くであって

も行かないわけにいかない。

汲み取り式のトイレがある家は古い家が建ち並ぶ地域だ。自然とお年寄りも多く、しかも独り暮らしである。作業中はバケツで数杯の水を流して貰う。しかし、それすら出来ないお年寄りもいた。

トイレ掃除などしたことがない。トイレの仕組みがどうなっているのかさえ知らなかった太一郎である。最初はそういった器具に触れることに躊躇いを覚えたが……。

ある家で、骨が折れてから右手の自由が利かなくなっただけというおばあさんがいた。洗面器で少しずつ水を運ぶ姿が、祖母の臯月と重なる。気付いたら、太一郎はバケツを手にしていった。

「ありがとう。本当にありがとね」

おばあさんのお礼は心からの言葉だ。こんなことで、たったこれだけのことで、自分はこのなにも幸福になれたのに。なぜ、これだけのことが出来なかったのか。苦い思いが太一郎の良心を責め立てた。

いつの間にか、時間があれば力仕事も手伝うようになり……。お礼にと渡された梅干入りのおむすびは、三ツ星レストランのフルコースより美味しかった。

(何かの誤解に決まってる)

そして、駆け付けた太一郎を待ち構えていたのは……。

「この男です！ あたしをレイプした挙げ句、夫にばらすって脅迫したのよ！ また、お金を受け取りに来たんだらうけど、残念だったわね。警察に通報しましたから！ 泣き寝入りするような女じゃないのよ！」

いきなり郁美に叫ばれ、次々に私服・制服警官が姿を見せる。

「伊勢崎太一郎さんですね。小平警察署の者ですが、少しお聞きし

たいことが」

後から思えば冷静に対処するべきだった。だが小心者の太一郎は、警察に囲まれた瞬間パニックになってしまう。なんと警察の拘束を振り解き、その場から逃げ出してしまったのだ。結果、すぐに追いつかれ……逃走の恐れありということで緊急逮捕されたのだった。

「いいじゃない。レイプの件は告訴を取り下げたし、恐喝は勘違い。公務執行妨害も罪にはならなかったんでしょ？」

裁判所は逮捕状を出さず、太一郎はすぐに釈放された。

それらは全て宗の手配だ。都庁に勤める宗の知人を通じ、名村夫妻に藤原の名前を教えたのである。名村は大急ぎで告訴を取り下げ、郁美にも証言を撤回させた。

だが、名村の本心は太一郎への疑いを消したわけではなかった。すぐに揉み消されたが、『元メイトが告白、私は太一郎にレイプされた』という藤原グループの記事スキャンダルが今年に入ってすぐ三流週刊誌を騒がせたことがある。名村はそれを覚えていて、太一郎は素行が悪く家を追い出された男だ。いよいよ真面目に働くのに飽きて、郁美に目をつけたのかも知れない。そんな風に考えたのだった。

「とにかく。俺はもう名村産業をクビになったんだ。あんたとは何の関係もない。あんたが誰を啜え込もうが、知ったこつちやない。帰ってくれ」

「あーら、いいのかしら、そんなこと言って。会社の寮を出たことあの弁護士先生はご存知なかったみたいね」

太一郎はドキツとした。

その件があつたから余計に卓巳には知られたくなかった。宗は気付きながら惚とぼけてくれたのか、と思っていたが……。

「どづいう、意味だよ」

「何か事情があるみたいだから、黙っていてあげたのよ。優しいでしょ？」

この手の女の魂胆など丸見えだ。

太一郎はアパートの二階を見上げ、苛々した様子で吐き捨てるように言った。

「あんたの誤解だ。俺はもう藤原になんの権利も持ってない。俺を取り込んで金にはなんねえよ。今の亭主を大事にするんだな」

「誤解かどうか、藤原を直接訪ねてもいいのよ。従兄の社長さんは聞いてくれるかも知れないわ。大会社とはいえ、スキャンダルが続けばどうなるか判らない世の中だもの。マスコミも興味を持つてくれるかも」

狡猾な女狐は舌なめずりをして太一郎を見ている。

年寄りの名村とこの先何十年も夫婦で過ごし手に入る遺産など、藤原にすれば端金^{はじがね}だ。太一郎を上手く利用すれば、すぐにも彼女のモノとなる。そうすれば名村と別れてもつと若い男と遊び暮せるのだ。

そんな打算を顔に浮かべながら、

「あなたも、例のメイドさんの話とか……蒸し返されたくはないんじゃない？ 部屋で待つ、可愛い奥さんの為にも……ね」

郁美は悪魔のように微笑んだのだった。

(3) 偽りのヒーロー

「……部屋を訪ねたのか？」

「あたしが社長の家内だつて言つたら家に入れてくれたわ。夜中に家を出たまま丸一日帰つて来ない。事故に遭つたんじゃないかってダメじゃない、身重の奥さんに心配掛けちゃ」

クスクス笑う郁美を、太一郎は苦々しい思いで見ている。

一体、何を何処まで話したのか……問い詰めたいが、夜中に声を荒げて、それこそ警察でも呼ばれたら堪らない。だが、一言も言い返さない太一郎を見て、御し易い相手と踏んだようだ。郁美はキツと目を細めると、頭ごなしに命令し始めた。

「亭主が煩いから会社は辞めてもいいわ。その代わりに、等さんの会社で働いてもらいますから。ああ、彼や他の社員はあなたが藤原の人間だつて知らないのよ。そのつもりでね」

「等……さんがそんなことを引き受けるとは思えない。俺なんか放り出せつて言うに決まつてる」

「密告^{チウ}られない為にも見張つて置かないと　そう言つたら息子は私の言いなりよ。浮気がバレさえしなきゃ、父親のほうもね。今は……あなたにレイプされたつて信じてるから、とつても優しいし」

思わせぶりに言いながら、郁美は背を向ける。

彼女の後姿を、刺すような視線で見送る太一郎だった。

六畳の和室と三畳のキッチン、風呂・トイレ付きで家賃三万五千

円。それが、今の太一郎に出来る精一杯であった。大家が高齢のため、いつ代替りして取り壊されるか判らない。だがそのおかげで、敷金礼金なしで借りられたのだから文句は言えない。

錆びた鉄製の階段を太一郎は重い足取りで上がる。二階の廊下は電球が切れており、薄い月明かりでどうにか足下が見える程度だ。そこをゆっくり歩きながら、太一郎は考えていた。

郁美と等の件は、宗にも話してはいない。

今回の冤罪事件を宗はどう思っただろうか？ 卓巳が太一郎の立場なら、振られた女の腹いせとも考えられる。だが、無愛想で威圧感のある太一郎だ。藤原の名前と金がなければ、およそ女にもてる男ではない。彼の言葉遣いや態度が悪くて社長夫人を怒らせたくらいに思ってくれることを願っていた。

四つ目の扉の前で彼は立ち止まる。

ドアには掠れた文字で『二〇五』と書かれたプレートが下がっていた。大家の方針か、このアパートには四号室がない。そしてナンバープレートの上に『伊勢崎』の名前が。白い紙にサインペンで書かれ、無造作に貼ってあった。

(次の仕事……か)

理由はどうあれ、次の仕事があるのはありがたい。これ以上、宗の世話にならずに済む。

太一郎はポケットから取り出した鍵でドアを開ける。

時刻は〇時近く、携帯は警察に取り上げられていた間に充電が切れていた。確認は出来ないが、おそらく何度も電話したであろう。眠っているかも知れない、と太一郎はなるべく静かに玄関に入り、ドアを閉めた。

「お帰りなさいませ、太一郎さん」

小柄な女性が両手を胸の辺りで組み、大きめの瞳を潤ませて太一郎を見上げていた。一八〇を超える太一郎とは、三十センチ近く差があるだろう。髪はようやく出逢った頃の長さ……背中の真ん中辺りまで伸びている。だが、昔に比べると艶がなく、生活の苦しさを思わせた。

そんな彼女の身体で一番変わった部分は……やはり、丸みを帯びた腹部であろう。

「起きてたのか？ 悪かったな、連絡出来なくて……人に頼むわけにもいかなかったから」

「いいえ。さつき、社長の奥様と仰る方がいらして……太一郎さんが誤解で警察に連れて行かれた、と。でも、すぐに戻って来るからと教えて下さいました。太一郎さんにお怪我がなくて本当に良かったです。社長の奥様も、親切な方ですね」

遠慮がちに彼女は微笑んだ。

郁美に対する評価は、太一郎としては言及を避けたい。

「そうか……他には？ 何も言わなかったか……奈那子」

チェーンを掛け、スニーカーを脱ぎながら、太一郎は笑顔らしきものを作った。

くくくくくくくくくく

桐生奈那子きりゆう ななし 彼女は太一郎と出逢ったことで、最も人生を狂わされた女性かも知れない。

奈那子の父親・桐生源次きりゆうげんじは代議士だ。彼は一人娘の奈那子を真綿に包み、ガラスケースに入れるほど大切に育てた。奈那子の祖父は大臣を務めたこともあり、引退後も政界の重鎮と呼ばれる存在だった。その地盤を受け継ぐためにも、桐生は何としても後継者を得る必要があつたのである。

奈那子は高校生の時に有力代議士の次男坊と婚約。大学卒業後はすぐに結婚する予定となつていた。

二人が出逢つたのは去年の二月、太一郎がW大で二度目の留年が済んだ頃である。彼女はF女学院大学音楽学部音楽学部の二回生であつた。太一郎はいつもの合コンに顔を出し、初参加の奈那子をお持ち帰りの目標ターゲットに定める。

方法は簡単だ。友人に金を掴ませ、ターゲットをトイレにでも連れ込み襲わせる。そこを助けに入り、店から連れ出すのだ。服を引き裂かれ、シヨックを受けている女性は「休んで行こう」という英雄ヒーローの言葉に素直に頷く。しかも、それが場末のラブホテルではなく、一流ホテルのスィートであるなら尚のことだろう。

太一郎はその手で奈那子をホテルに連れ込み、ほんの一口二口シヤンパンを飲ませ……。翌朝、彼女が目を覚ました時には、太一郎は望みのモノを手に入れ、欲望を満たした後であつた。

普段ならそこでお終いである。

中には、太一郎を訴えると騒ぐ女もいるが……。自らの意思でホテルまで付いて来て、服を脱ぎ、シャワーを浴びた、と言われたら反論出来ない。そのことを太一郎に恫喝され、泣く泣く諦める女性

がほとんどであった。

だが、奈那子は違った。

彼女は、「本来は自分が藤原の後継者であったのに、祖父が亡くなったばかりに、従兄に乗っ取られたんだ」そんな太一郎の言葉を信じたのだ。

彼女は罫に嵌められたことも知らず、自分の危機を救ってくれた太一郎を運命の人だと言う。更には、身体の関係が出来たことで“相思相愛”だと思い込んだ。

そして、太一郎は彼女の誤解を利用し、その身体を弄び続けたのだった。

その関係に終止符が打たれたのは半年後のこと。奈那子が妊娠し、それが親にばれたのだ。

桐生にすれば、たった一人の後継者ついでである。疵物きずものにされて、黙っているわけにはいかない。当然、桐生の交渉相手は太一郎ではなく、藤原卓巳であった。

そんな中、奈那子は親元を抜け出し、太一郎に逢いに来る。「愛している。結婚したい。子供を産みたい」と言っつて聞かない。だが、卓巳にこっつ酷く叱られた太一郎は、耳触りの良い台詞で奈那子を追い払ったのだ。

「俺のために、今回は諦めてくれ。君が大学を卒業する前に、必ず迎えに行くから」

奈那子に再会したのは四月末　　ちようと藤原本社が宗の事件で
揺れていた頃のこと。

夜の繁華街で男に手を掴まれ、ラブホテルに引き摺り込まれそう
な女性を太一郎は助けた。その、小柄でやせ細った女性は太一郎を
見るなり、泣きそうな声を上げたのだ。

「……………太一郎さま……………」

偽りの将来を約束し、子供まで墮ろさせながら……………。

目の前にいる女性の名前を、すぐには思い出せない太一郎だった。

(4) 彼女に宿る命

「嫌です、お父様。お願い……太一郎さまはわたしを迎えに来ると仰ったの。だから……」

奈那子は太一郎のことを信じていた。

いや、何があっても信じるつもりでいた。だからこそ、父・桐生に婚約者・泉沢清二との結婚を早めることにした、と告げられた時、泣いて嫌がったのだ。

だが、父も母も祖父も、誰も奈那子の味方はしてはくれない。母は特に、婚約者がいながら太一郎と関係し、妊娠した奈那子に蔑みの視線を向けたのである。

「桐生家の一人娘として、慎み深い女性になるようにと育てたのに……なんということかしら。お父様が源次のような男を婿に選ばれるから。わたくしに似ていたら、こんな恥知らずな娘にはならなかつたはずです」

母・美代子も一人娘であった。祖父が地盤を継がせるべく、有能な男だから、と自分の秘書を婿養子にした。それが源次だ。源次は有能ではあったが出世欲が強く、祖父は敬うくせに、妻は顧みない男であった。ただ、愛人を作るわけでもなく、一人娘の奈那子は大事にする。何より、政治家としての職務を一心に果たすので世間の評判は上々だ。その結果、美代子は行き場のない不満を溜め続け……それはひたすら奈那子へと向かう。

奈那子にとって、幼い頃から良い子であることが使命だった。

良い子であれば祖父も父も可愛がってくれる。良い子であれば、母は父に文句を言わず、両親の喧嘩を見なくて済む。そのためなら、

父の望む通りの男性と結婚することも黙って受け入れた。

だが、そんな彼女も夢見ることはあったのだ。いつか……親の期待や様々な柵しがらみから、自分を連れ去ってくれる男性が現れるかも知れない。圧倒的な力で、しかも“愛”という動機を持って。

そして、彼女を危機から救い出してくれたのが太一郎であった。

「あなたのような経験の少ない女子大生を罫に嵌めて、それで楽しんでるような下種な男よ。あなたは騙されてるのよ」

太一郎と付き合い始めた奈那子に、友人は口を揃えて言う。

「わたしは違うの。本当に助けて下さったのよ。時折、乱暴な口調にはなるけれど、本心ではないの。ご家庭で辛い思いをされてるから……」

心が潰れそうになるほどの過大な期待　その重圧の苦しさを奈那子は知っている。かといって、重圧から解放されても決して楽にはなれない。自分の至らなさに苛まれ続けるのだ。

奈那子の目に太一郎は孤独に映った。どれほど多くの友人に囲まれていても、いつも独りで寂しそうにしている。自分なら、太一郎を癒して本来の彼に戻して上げられるかも知れない。

太一郎を庇い続ける奈那子の姿に、友人は一人ずつ離れて行った。献身的に尽くす奈那子に、太一郎の要求は身体だけに止まらなくなる。「従兄に奪われて、小遣いすらままならない」と言い始め……。自分名義の預金まで崩すようになった奈那子を、周囲の誰もが冷たく嗤わらっていた。

それでも信じると決めたのだ。夢にまで見たヒーローが、マツチポンプを仕組んだ偽物であるはずがない。

父に逆らい、家を出て、どれほど苦しい思いをしたとしても……奈那子にとって太一郎は、この世界で唯ひとりの英雄だった。

くわくわくわくわく

六畳間の小さなテーブルに並ぶ、炊き立ての白いご飯と豆腐の味噌汁、味付け海苔、目玉焼き。

これだけの朝食が無事に用意出来るようになるまで、丸一ヶ月を要した。奈那子は家を出るまで食事の用意などしたことがなく、太一郎にしても似たようなものである。それは食事に限ったことではなく、掃除も洗濯も全てが手探りでママゴトにも似た生活だ。

奈那子のご飯の用意をして座ると、太一郎が先に食べ始めるまでジツと待っている。

「ああ、美味しいよ」

口をつけた太一郎がそう言うと、「良かった」と微笑み食べ始めるのだ。

一緒に暮し始めた当初は、「太一郎さま」と呼ばれて困った。「さん」にしてくれと何度か訂正して、最近ようやく「太一郎さん」に馴染んできたところだ。

再会したとき、彼女は様々な都合で親元を飛び出していた。

だが、太一郎を訪ねることも出来ず……。手持ちのお金が底をつき、「仕事を世話してやる」と言われ、そのままラブホテルに連れ込まれる所だった。確かに“仕事の世話”には違いない。とんでもない野郎ではあるが、それを責める資格は太一郎にはなかった。

太一郎は奈那子の事情を知り、会社の独身寮を出た。

桐生は一人娘を簡単には諦めないだろう。永遠に逃げ切れないのは判っている。だが、せめて子供が産まれるまで時間を稼げれば…

…。
ほんの数ヶ月前まで、太一郎は人間の屑だった。そんな男を、本気で愛してくれたのは奈那子ひとりかも知れない。

卓巳を想う万里子の姿はすぐに認めることが出来たのに、自らに向けられる想いに何故気付けなかったのか。太一郎の子供を産みたいと言ったのも、この奈那子だけだったのに。

「太一郎さんの子供を殺したから、罰が当たったんです。でも、もう二度と中絶は嫌です。たとえ、父親が誰であっても……」

それは奈那子の抱える様々な問題の一つであった。彼女は大きな瞳に涙を一杯溜めて、ひとり子供を産むつもりだ、と言う。

今度こそ……その願いだけは、どんなことをしてでも叶えてやりたい。

それが奈那子に対する“愛”にせよ、“贖罪”にせよ、太一郎の決意に変わりはない。

「奈那子、大したことじゃないんだけど……今日から仕事が変わると思う。多分、都心まで出るから、帰りは少し遅くなる。体に悪いから、起きて俺のこと待ってるなよ」

まず、『名村産業』に行つて荷物を整理し、挨拶を済ませる。郁美の様子を窺つて、昨夜と変わつてないようなら、等が社長を務める『名村クリーンサービス』に行けばいい。会社は、電車で二十分程度の練馬区にあつたはずだ。清掃が夜間になるならそれでも構わない。多少なりとも給料はいいはずだ。

だが、奈那子にはよく言つておかないと、一晩中でも起きて待っている女だ。

「あの……わたしも働こうと思います。この先、出産費用だって掛かりますし」

「俺が何とかする」

「でも、これ以上、太一郎さんにご迷惑ばかり」

「何でも俺の言う通りにするんだろつ。言っただはらずだ、一年前は俺も学生で……色々藤原の面倒があつて諦めたんだつて。だから……今、お前の腹にいるのは俺の子なんだよ。迷惑とか二度と言つなっ！」

「太一郎さん……ありがとうございます」

奈那子は心からの感謝を籠めて、太一郎を見つめて言う。
その言葉に胸を締め付けられる太一郎であった。

(5) 他山の石

「なんかヤベエことしたらしいぜ」

「客の金盗んだんだとさ」

「え？ 俺は、社長の奥さんに手エ出そうとしたって聞いたけど」

太一郎が従業員用のロッカールームを開けた瞬間、そんな声が聞こえた。

だが、これくらいのこと一々気にしていたら荷物も纏められない。太一郎はいつも通り、愛想のない声で朝の挨拶をし、足を踏み入れたのだった。

噂話に興じる連中に、特に親切にしてもらった記憶はない。可愛げのあるタイプならともかく、二十年以上好き放題に生きてきたのだ。尊大な態度は体に染み込んでいて、いきなり媚など売れる筈もなく……。口を開けば「うるせえ」と言ってしまうようになる。それをしないために、太一郎は無口で通すしかなかった。

「お前クビだったって？」

その中の一人が太一郎に話し掛ける。二十歳になったばかりの男は、高校中退と聞いたが読み書きは小学生程度だ。それでもこの会社に入って三年目、太一郎にとっては先輩だった。

「あんなババアに手エ出したのか？ 言ってくれりゃ女くらい紹介してやったのに」

一言も答えない太一郎を取り囲もうとするが……。彼らより太一郎のほうが、はるかに背も高く横幅もある。振り返るだけで彼らは後ずさりを余儀なくされた。

「短い間でしたがお世話になりました。失礼します」

太一郎はロッカーから手早く着替えやタオルを取り出し、せっせとスポーツバッグに詰める。そしてすぐに立ち上がり、頭を下げ……
… ロックールームを出たのだった。

ドアが閉まった途端、背後で太一郎を罵る声が聞こえた。

(「藤原」じゃなけりや、こんなもんだろつな)

そんなことを考えながら、太一郎は事務室の奥にある社長室に向かう。

社長の名村は還暦を過ぎているが、毎朝八時には出勤していた。学歴こそ中卒だが、人の嫌がる仕事を率先して引き受け、朝早くから夜遅くまで働き、一代で会社を大きくしたという。そんな名村からどうして等のような息子が出来たのか……不思議だ。

だが、無人の事務室を通り抜け、社長室のドアをノックした時、中から聞こえて来たのは予想外の声であった。

「あーオマエさ、ホントはクビにしたいんだけど……。郁美ちゃんが見張ってたほうが安心だって言うんだよねえ。しょうがないから、ウチで雇ってやるよ。俺らつて愛し合っててさ。郁美ちゃんて優しいから、オヤジのこと見放せないの。いい子だろ？ あ、郁美ちゃんに変な真似したら、オレ、マジで怒るからね」

トップにたつぷりのレイヤーを入れ、襟足は軽く外にカールさせている。ふんわりと見せてはいるが、実のところ、かなり薄いようだ。

(二十六でこれは気の毒だな……)

社長の息子・名村等の言葉を聞きながら、太一郎はそんな感想を持っていた。

この会社で等は、とりあえず専務の役職に就いていた。とくに働いてはいないが、役職手当という名目の小遣いを社長から貰っているらしい。

「オヤジはもうオマエと関わりたくないんだつてさ。だから、オレが来たんだよねえ。朝早く起こされてさ……ホント迷惑」

「どうもすみません。よろしく……お願いします」

「ああ、判った、判った」

携帯を触りながら、太一郎を追い払うように手を振った。等が腕に嵌めたロレックスは、見るからに偽物である。だが、おそらく本人も気付いてはいないだろう。

（俺も……こんなもん、か）

そう思うと、太一郎には等に対する怒りなど沸いて来ない。寧ろ、憐れみに近い感情を覚え、太一郎は切なかつた。そのまま小さな声で「失礼します」と伝え、社長室を後にしたのである。

「伊勢崎！」

会社の敷地から出たとき、不意に背後から声を掛けられた。

「伊丹さん。あの……お世話になりました。本当はもっと長く勤めたかつたんですけど」

「ああ、いい。判つてるよ。運が悪かつたな……」

伊丹清いたみきよし、四十を少し超えたばかりだと聞いている。太一郎にこの仕事を教えてくれた先輩であり、相棒だ。若い頃には悪さもした、

と言ひ、背中に入れ墨を見せてくれた。傷害の前科があり、刑務所に入ったことで目が覚めたのだという。

伊丹は一目で太一郎の背負った業の深さを察してくれた。当初、ささくれ立つ太一郎を相手に、文句も言わず付き合ってくれた唯一の人間だ。

「名村社長は、昔は立派な人だったんだ。でも、一緒に苦労した嫁さんを五年前に亡くして……水商売の女が悪いとは言わないが、性質の悪い女に引つ掛かったもんだよ」

伊丹も社長夫人・郁美と義理の息子・等の関係は気付いていたという。それどころか、郁美は大学生のアルバイトにも手を出しているそう。無論、名村は知らない。

名村自身は家が非常に貧しく、子供の頃からかなりの苦労をして来た。その為、子供たちには不自由な生活をさせてやるつもりらしい。

「それが裏目に出たんだろうなあ。息子も娘もともに働きゃない」

それでも、伊丹は太一郎の働きぶりを名村に話してくれたという。だが「郁美は嘘を吐くような女じゃない。お前も騙されているんだ」と受け入れてはくれなかった。

「等さんの会社か……。あそこは女が多いからな」

太一郎が、郁美から等の会社に入れるように口添えして貰ったことを伊丹に話すと、こんな答えが返ってきた。清掃員はパートが多く、男は勤め難いと言われ、更には……。

「お前、あの女に気に入られたんじゃないか？ 気をつけろよ。あの女の目当ては金かセックスだ」

伊丹の言葉は的を射ている。

だが、郁美が気に入ったのは“藤原”の金であろう。

「あの……今度のこと、岩井のばあちゃんに上手く伝えておいて貰えませんか？ 俺が悪いことをしてクビになったんじゃない、ってことだけでも」

「ああ、わかったよ。また家に行ってやれよ。婆さん、お前のことをホントの孫みたいに可愛がってたからな」

その言葉が妙に嬉しくて、少し悲しい太一郎であった。

荷物は駅のコインロッカーに預け、等の会社に向かおうとした太一郎だったが……。

突如、彼の横にトウルレードのロードスターが停まった。

「はあい、太一郎くん。ご機嫌いかが？」

運転席からサングラスを外しつつ、声を上げたのは。

(6) 魔女の誘惑(前書き)

*台詞の中に性的な表現があります。直接の描写はありませんが、R15でお願いします。

(6) 魔女の誘惑

二十分後、太一郎は郁美の運転するロードスターの助手席に乗っていた。

「等さんの会社まで送って行ってあげるわ。乗りなさいよ」

場所は判っているから電車で行く。そんな風に太一郎が告げても引き下がろうとしない。郁美の魂胆はともかく、駅の近くには交番がある。昨日の今日で騒動は起こしたくない。その思いから、太一郎は郁美に従ったのだった。

「ねえ、ホントのとはどうなの？」

「何がです？」

「やあだ！ 気取らなくていいわよ。あたしに興味があるんなら、正直に言いなさいな」

派手なゴールドのピアスを付け、左右の手に二個ずつ重そうな指輪を嵌め、付け爪にも全て金色のラメが入っている。朝からご苦労なことだ。しかも、サンングラス越しに太一郎に向ける視線は……午前と午後を間違えているように思えてならない。

「亭主が色々あなたのことを調べてたわ。昨夜、こつそり家に帰ったら、リビングに調査資料が置いてあったの。あなた、随分無茶して来たみたいねえ」

社長の名村は太一郎を 危険極まりない、解雇出来て良かった、顔を見るのも御免だと言い、息子を代わりに寄越したという。郁美

にも、狂犬に噛まれたと思って忘れろ、二度と近づくなと言ったぞうだ。

だが、その態度が太一郎には逆に名村を好人物に思わせた。太一郎の過去を知れば、普通はそうであろう。しかし、藤原と繋がりを持つてゐるならと、裏で唾を吐きながら、表向き擦り寄ってくる輩のほうが多い。

その中でもこの郁美のような女は、あからさま過ぎて気持ちが悪い。

「ねえ、判つてるのよ。あなたがあたしを庇つてくれた訳。アパートで待つてる子は妊娠したから仕方なく、なんでしょ？ だって、入籍してないんだもの。妊婦相手じゃ溜まつてるはずよ。あたしのこと……試してみたくない？」

太一郎が何も答ええないのをいいことに、郁美は言いたい放題だ。彼女の頭の中では、等との浮気をバラさなかつたことが、郁美を庇つたことに都合よく入れ替わっている。

「いや……俺は別に庇つた訳じゃないし……」
「亭主はもう、いい歳をしたおじいちゃんでしょ？ 三回に二回は駄目なのよねえ。等さんはプレイボーイを気取つてるけど、腰が弱くてアソコもフニャフニャ。女盛りを満たしてくれる、強^くいオトコが欲しいのよねえ」

その瞬間、郁美は急ハンドルで左折し、車を人気のない公園の横に停めた。

そのままサングラスを外し……舌舐めずりしながら太一郎の体を見ている。特に、郁美の視線がジーンズのファスナー辺りを彷徨つた時、太一郎の背中に悪寒が走つた。

その目は、太一郎を散々躍らせてくれたメイドの永瀬あずさを思い出させた。

あずさは卓巳にふられた腹いせで、太一郎と寝るようになったのだ。そのくせ、太一郎の母・尚子には「太一郎様にレイプされた」と泣きつき、ちゃっかり金をせびっていた。この郁美よりだいぶ若い^{セックス}が、離婚経験があり、男なしでは一週間と過^{セックス}ごせない身体だった。本人が言ったわけではないが、おそらく風俗で働いた経験のある女だろう。

同じ匂いを、この郁美からも感じる。

男を喰い物にして生きる女　反吐が出そうな所が、処女を喰い物にする自分に似合いだ、そんな風に自嘲していた昔を思い出す。

郁美の魔女のような指が、太一郎にジーンズに触れた。

ゆっくり、種火に息を吹きかけるように、そうつと……女の指が足の付け根を往復する。やたら身体を密着させ、吐息混じりに耳元で囁き、太一郎の目を自分に向けさせようとする。直接刺激に弱い男の急所を突いた見事な攻撃だった。

「いい子にしててちょうだいね。そうしたら、あたしがオクチで抜いてあげるわ。その代わり、続きは今夜……たっぷり楽しませてくれるわよね？」

「あの……なあ。二十代の男にそんな真似したら、そりゃ誰だって勃つき。でも、俺はあんたは抱かない」

少し碎けた太一郎の言葉に、抗い切れない男の欲望を感じたのだろう。郁美は喉の奥で含み笑いをしつつ、十歳近く年下の太一郎を子ども扱いした。

「随分カッコつけちゃってるけど……あなたって、W大の有名人だ

ったそうじゃない？ “バージンキラー”に“レイプマン”なんて、ふざけた呼び名に笑っちゃったわ。あたしの締め付けは、あなたの大好きなバージン並よ。仲良くしましよ。どうせ、同じ穴のムジナじゃない」

「違うっ！」

太一郎の胸がカツと燃えるように痛んだ。

「俺はあんたとは違う。 約束したんだ。人生をやり直すって、二度と馬鹿な真似はしないって。俺は……俺はもう二度と本気で惚れた女以外は抱かない！」

太一郎の胸に浮かんだのは万里子のことだった。

万里子は彼にとつて神様にも等しい女性だ。愛や恋で語れるレベルではない。そんな彼女の信頼に誓ったのである。愛して欲しければ自分から愛する、信じて欲しければ自分も相手を信じよう、と。

だからこそ、一度口にした「誰にも言わない」という約束を、保身のために破ることは太一郎には出来なかった。

「ねえ坊や、いい子も過ぎるとお仕置きしちゃうわよ」

郁美は太一郎のほうに身を乗り出すと、付け爪を引つ掛けないように、器用にバックルを外した。

「この車で本番は無理なのよねえ。でも……これ以上逆うなら、あたしは服を引き裂いて外に飛び出すわよ。『きゃーたすけてえー襲われるうー』ってね。だいが、ココも硬くなってるみたいだし……今度は言い逃れることが出来るかしら？」

「……いい加減にしゃがれ」

「なんですって?」

「汚ねえ手で触ってんじゃねえぞ、ババアが! 俺はお前みたいな売女ばいたは虫酸むしずが走るんだよ!」

「あ……あたしに、そんな口を聞いて……」

太一郎のあまりの変わり様に、さすがの郁美も一瞬たじろいだ。

そして郁美の体が離れた瞬間、太一郎は右手で彼女の髪を掴み、運転席のシートに押し付ける。左手は親指と人差し指で彼女の頬を挟んだ。

「調べたんなら判るだろ? 俺は“いい子ちゃん”じゃねえ! てめえみたいなメス豚は喰い飽きてんだよ。　　いいか、俺や奈那子に関わるな。どうあっても地獄に落とすつもりなら、てめえも引き摺り込むぜ」

郁美は太一郎を追い詰め過ぎたのだ。

元々が、弱さを隠す為に吼えていた男である。窮地に陥れば、再び、狂気に満ちた牙を剥きかねない太一郎であった。

(7) 光の齎すもの

くくくくくく

「あ、伊勢崎くん、今度はそつちお願いね」
「はい。ゴミはどうしますか？」

茜は学生用のトイレを借り、手を洗つて外に出たところだった。
聞き覚えのある声に、思わず振り返る。

佐伯茜^{さえきあかね}はつい先日十八歳になった。老舗の和菓子屋の長女である。彼女は昨年、藤原邸でメイドとして勤めていた。万里子が嫁いだ頃から、今年の一月までというほんの短い間であったが……。彼女にとっては忘れられない経験だ。高校を卒業したら、ぜひまた勤めたいと思つている。

しかし、それには一つ気掛かりが……。十七歳の彼女を襲つた藤原家の息子、藤原太一郎の存在であった。

太一郎は粗野で乱暴な男だ。年配のメイドから充分に気をつけるように注意されていた。もちろん、茜も可能な限り避けていたのだ。しかし、先輩のメイド永瀬あずさに言われ、仕方なくクリーニン^グを届けることに。入り口で手渡すつもりが室内に呼ばれ、クローゼットに片付けて行けと言われたのだ。茜はあずさに警告された通り、入り口の扉を少し開けたまま中に入った。その直後である。太一郎は茜の腕を掴み、グレーのメイド服を引き裂いたのだ。懸命に「私は高校生です。十七歳なのよ！」と叫んでいた気がする。だが、

太一郎はそんな茜を鼻で笑った。

「だからなんだ？ 履歴書なんて簡単に書き換えられるんだよ。お前の家って金に困ってんだって？ 金目当てに俺に言い寄ったってみんな納得するだろうな」

大きな声を出した瞬間、頬を殴られた。怖くて声も出なくなり、カタカタ震える唇に、生温いものを押し当てられたのだ。太一郎の唇からは煙草とアルコールの匂いがした。茜にとって最低のファーストキスだった。

あの時、社長夫人の万里子が飛び込んで来てくれなかったら……。それを考えると、今でも恐ろしくて夜中に目が覚める時がある。事件の直後は本当に訴えようと思ったが、万里子に諭されたようで、太一郎は茜に謝罪してくれた。

その後すぐ、太一郎は藤原邸からいなくなってしまう……。茜も母親が退院して和菓子屋を再開したので、結局その辺りの事情は判らないままであった。

ここはW大学の構内である。茶道サークルからの注文で、茜は和菓子を配達してきたのだ。

そして、W大は太一郎が通っていた大学であった。卒業したはずだが……。あの男のこと、留年しているかも知れない。実際二度も留年しており、三度目がないとは言いきれなかった。

「女子トイレのゴミも纏めてお願いね」

しかし、周りにいるのは清掃員だけで学生の姿は無い。

キョロキョロしていると、ゴンツと何かに突き当たった。茜は、清掃員の女性がトイレから持ち出したゴミ箱を倒してしまい、周囲

に手を拭いたペーパーが散らばってしまう。

どうしよう、とウロウロしていると、男子トイレのゴミを運んでいた他の清掃員が駆け寄って来た。

「すみません……私」

「いえ、邪魔なところに置いたままですみませんでした。すぐに片付けますから」

ブルーの作業着を着た大柄な男性は、顔が隠れるほど目深にキヤップを被っている。

「あの、手伝います」

「本当に大丈夫ですか……ら……」

一瞬、顔を上げた男性が息を飲む音が聞こえた。

だがそれは……

「た、た、たいちろっつ！ なっ何やってんのっ!？」

茜の叫び声にかき消されたのであった。

くくくくくくくく

大学構内の一番目立たない場所にある自動販売機の前に、太一郎は立っていた。ポケットから小銭を掴み出し、その中から三百円を入れてスポーツ飲料を二本買う。

後方のベンチに座る茜にチラリと視線をやり、太一郎はこっそりと溜息を吐いた。

ロードスターの中で郁美を脅しつけてから、早一週間。

そこそこの修羅場は潜り抜けている女だが、太一郎が牙を剥くとは思ってもいなかったのだろう。車を降りた彼の後を追って来るこ

とはなかった。

だが、四日目には情夫の等を使い、嫌がらせをして来たのだ。官公庁の担当に決まった太一郎が、いきなり勤務場所を変更され、このW大の清掃に回された。半年前まで通っていた大学である。それほど真面目な生徒でなかったとはいえ、他人が四年のところを六年近く通ったのだ。顔見知りは一人や二人では済まない。

郁美はそれを承知で太一郎をW大こゝに回した。

そして、今日で三日目である。幸いここまでは誰にも会ってはいない。つるんでいた連中のほとんどが、三月には卒業しているはずだから当然かも知れないが。

「ホラ。飲めよ」

差し出されたペットボトルを、茜は恐る恐る手に取った。

「あの……何されてるんですか？」

「仕事だよ」

「藤原グループに役付きで入るって聞きましたけど……。研修とか？」

一般社員ならともかく、役付き社員の研修でトイレ掃除をやらせる会社はまずないだろう。太一郎がベンチに腰掛けようとした時、茜はビクツと体を震わせた。

茜には、手を上げたことがあった。太一郎はそのことを思い出し、ベンチから離れ地面に腰を下ろす。

「あの……伊勢崎って？」

「親父の旧姓だ」

「藤原はどうなったんですか？」

「どうもなっていない。卓巳がちゃんと守ってるよ。俺が家を出ただ

「けだ」

「でも、なんで清掃員を？」

太一郎は仏頂面のまま天を仰いで答えた。

「悪いことをやったら、便所掃除と決まってるそつだ」

その返答に、茜は声を上げて笑った。笑われて愉快ではないが、泣かれるよりマシだろう。

太一郎はしばらくして立ち上がると、

「俺、行くから。出来たら、誰にも俺のことは言わないで欲しい。頼む」

キャップを手に持ったまま、頭を下げた。

すると、茜は交換条件を突きつけてきたのだ。

「一発、殴らせて！」

「……」

半年前、藤原邸で謝罪した時、茜は同じ要求がしたかったという。だが、その時は怖くて太一郎に近づくことも出来なかった。でも今なら……。

太一郎は頷き、目を閉じた。

すると飛んできたのは、なんとグーのパンチだ。

「ちょ、ちよつと待て、俺はパーだったぞ」

「男と女なんだから、ハンデがあつて当然でしょ！ それに……私のファーストキスだったんだからっ！」

「……すみませんでした」

それを言われたら一言も反論は出来ない。殴られようが蹴られようが、一切文句を言う資格はないのだ。だが、茜は一発殴ってすつきりしたらしい。

太一郎が本気で謝っているから、許してあげてもいい、それに、
「黙っておいてあげる。弱々しい太一郎を見るのってスツゴク楽し
いし、なんて言うか、秘密を握った感じ？」

「呼び捨てかよ」

「じゃあ、トイレ掃除のおじさん、とどっちがいい？」

「何でも好きに言ってくれ」

茜の“赦し”は太一郎の心に射し込んだ光だった。

だがそれは、より一層、彼を苦難の道に導く光となったのである。

(8) 眩しい少女

太一郎が『名村クリーンサービス』に移って三週間が過ぎた。カレンダーは八月に入り、奈那子も妊娠七カ月半ばである。

「いつてらっしゃいませ」

日に日に狭くなる玄関口に立ち、奈那子はニツコリと微笑み太一郎を見送った。

「なあ、ちゃんと食ってるか？ 電気代が勿体ないとか言って、エアコン切ってるんじゃないだろうな？ 金が必要なら言えよ、俺がどうにかしてくるから」

太一郎の見る限り奈那子は小食で、僅かな栄養は全て子供にやってる気がする。心配ではあったが、ほとんど傍にいられないのも現実だった。

「わたしより……太一郎さんのほうこそ、昼間働いて夜もなんて。お願いですから無茶をしないで下さい」

「俺は平気だよ。丈夫なだけが取り得なんだ。最近は見掛け倒しじやなく、少しは筋肉もついてきたしさ……。でも、お前は子供がいるんだから、絶対に無理はするなよ」

「……はい」

『名村クリーンサービス』の給料はこれまで以下で、とても二人が生活していけるものではなかった。太一郎は週四回、ビルの夜間警備員の仕事を増やしたのである。

子供が産まれる十一月までは、奈那子の所在を彼女の父・桐生代議士に知られる訳にはいかない。加えて、この騒動に卓巳らを巻き

込む訳にもいかないのだ。

保険も公的支援も期待できない分、出産に掛かる費用は何をどうしても太一郎が工面する必要があった。その為なら、食事も睡眠も削れるだけ削る。命すらも削る覚悟だ。たとえ今、奈那子に宿る命が太一郎の子供でなくとも……。それは彼が人生をやり直すためにも、決して避けては通れない道だった。

奈那子自身の体に何かあれば、すぐに救急車を呼ぶように教えてある。そして、太一郎と丸三日連絡が取れなくなれば……。その時は助けを求めるようにと、宗の名刺を奈那子に持たせた。

何も無いことを願っている。だが、郁美はかなり欲の深いタイプだ。藤原から金を引き出せるチャンスを、このまま見逃すとは思えない。

「行つて来る。帰りは明日の朝になる」

鈍い音を響かせ、太一郎はアパートの階段を降りる。彼は人生で初めて背負った“責任”の重さを、痛いほど実感していた。しかも、片足には女郎蜘蛛の吐き出した糸が絡まっている。

ふと見上げれば、奈那子が二階の手すり越し、懸命に手を振っていた。愛情と信頼を詰め込んだ笑顔だ。

太一郎は軽く手を挙げ、微かに覚えた後ろめたさを振り払ったのだった。

くわくわくわくわく

「あ、またコンビニおにぎり一個だ」

小窓から顔を押し込み、中を覗き込んでいるのは……。見なくても

判る、佐伯茜だ。再会してから二週間、なぜか太一郎の周囲を徘徊している。

「お前な……。店の手伝いはどうしたんだよ。弟妹の面倒はみなくていいのか？」

茜は顔を引つ込めると、ドアの方から管理人室に入つて来た。大きめのTシャツにショートパンツ、小柄で幼さの残る顔だが、ボデイラインは一人前の女だ。生足にサンダルを履き、小麦色の太腿を見せ付けられるのは……。今の太一郎にはちよつとした拷問である。

「うっさいなあ。午前中手伝つたからいいの！ 下も中学生だもん、最近じゃ部活だなんだって家にいないよ」

「また、勝手に入つて来るし……」

「ちよつと太一郎！ ここを紹介してあげたのは、私だつてこと忘れてない？」

そうなのだ。このビルの一階に和菓子屋『さえき』があり、六階が茜一家の住居であった。

随分昔は佐伯家が土地も所有しており、ここは二階建ての店舗付き住宅だった。しかし、営業不振や代替りが続き相続税などの問題も生じて、茜の父親が藤原系列の不動産業者に売却したのである。今は六階建てのビルの建物だけを所有していた。その所有権を担保にした借入の返済が滞り、それが切っ掛けで茜が藤原邸に勤めることになったのだが……。

“伊勢崎”は本名ではないので証明書が何も提示できない。怪しい仕事は幾つもあるが、それでは藤原の名前が知られた時に、卓巳らに迷惑を掛けるだろう。宗にはかり頼ることも出来ない。

「夜……どつかで働かしてくれねえかな」

太一郎が漏らしたそんな一言を聞き、茜はビルの管理室に話してくれたのだった。

おまけに、

「それにさ……とおーっても貧乏で可哀想な警備員さんに差し入れよ！ ハイ！」

と言つては弁当を作つてきてくれる。

最初、太一郎には訳が判らなかつた。なぜなら、茜は去年の十二月、太一郎に襲われ殴られたのだ。レイプは未遂とはいえ、自分を殴り、無理矢理キスまで奪つた男に近づく心理が、太一郎には不可解としか思えない。

だが、

「こないだまで、何度も夢の中に出て来て怖かつたのはホントよ。でも……毎日一生懸命掃除してるし、夕食は一〇五円のコンビニおにぎり一個で我慢してるし、前みたいにお酒の匂いはしないし、ねなんか、今の太一郎に逢つて、怖い夢を見なくなつたの」

茜ははにかんで頬を赤らめつつ、そんな風に話してくれた。

太一郎が死んでも誰も救われない。

あの時、万里子が言った言葉の意味がようやく判つた気がする。きつと、太一郎があのままだったら、或いは、あのまま死んでいたら、茜は一生恐ろしい夢を見続けたのかも知れない。

そしてそれは今も……。

「……お店はさ、あんまりいいほうがいい気がする……」

「例のお袋さんの“お気に入り”か？ 何かされたのか？」

「ううん。太一郎が私にしたようなことは何も」

「……いちいち引き合いに出すんじゃないねえ」

「でも、目がね。嫌な予感がするんだ……再婚とか言いだされたら、どーしよー」

父親が亡くなったのは四年前だという。夫婦で店をやっていた為、母親がそのまま老舗の味を継いだ。いずれ、娘か息子に引き継いで貰おう、と。それが、この春から少し変わって来たのだと茜は話す。原因は春に採用した三十一歳の菓子職人……。

茜の母は若くに結婚して子供を産んだ為、まだ三十七歳であった。三人の子持ちなだけあって、見た目落ち着いた和菓子屋の女店主だが、あの郁美と年齢は大差ない。貞淑な女性であっても、心も体も揺れる時はあるだろう。その相手が新しい菓子職人、新田祐作にゅうたゆうさくだった。

新田の姿は、太一郎も何度か見かけた。彼は地方出身ということ、このビルの五階に住んでいる。社宅替わりだと茜の母が住まわせているらしいが……その母が度々新田宅を訪れるのが茜の悩みになっていた。

新田は、太一郎の目にはそれほど危険な男には見えない。だが、人を見る目は今ひとつ、という自覚はある。何より茜が、新田の目からかつての太一郎のような気配を感じると言うのだ。

「それにつ、今の太一郎って超安全じゃない！」

「あのなあ」

「なんか、狂犬病の治ったセントバーナードみたいで」

「……それは褒めてんのか？」

そんな、何気ない話をしながら、太一郎は差し入れの弁当を平らげる。

茜は、元々が借金返済の直談判の為、万里子に会いに来た少女だ。中々踏ん切りのつかない太一郎からすれば、羨ましいほどの行動力である。

そんな茜に、何のために金が必要か……話せずにいる太一郎だった。

(9) 泡沫の如く(前書き)

集団イジメの表現が苦手な方はご注意ください。

(9) 泡沫の如く

「お前、受験生じゃねえの？ 勉強はいいのかよ」

「残念でした！ 大学には行かないし、就職先まで決まってるのよ！ 遊び倒せる最後の夏休みなんだからね」

「じゃ、俺なんか構ってねえで遊び倒しに行けよ」

「なんか言った？ 掃除のおじさん」

昼は昼で、茜の自宅はW大から自転車で十分程度の距離にある。

そのせいか、太一郎の休憩時間になると茜はさり気なく顔を出した。太一郎と同じグループで清掃作業に回るのは四十代から五十代の主婦が中心だ。母の年齢に近い彼女らは、真面目で黙々と働く太一郎に好印象を持っていた。そして、母子家庭で実家の手伝いをする茜のことも、同じように受け入れてくれ……。

「あら？ 茜ちゃんが来たわよ。一緒にお昼食べて来なさいよ」

親切心から二人きりにしてくれる同僚たちの誤解を解かぬまま、太一郎はひと時の甘い夢を見てしまった。

茜の行動は気紛れに決まっている。おそらくは、言われっ放しになっっている太一郎が面白いのだろう。……それでもいい。ほんの僅か、贖罪を忘れさせてくれる時間があれば、これから先も頑張ることが出来る。それは決して、奈那子を裏切ることではない、と。

だが過去は……彼を赦そうとはしなかった。

その日、茜が叫んだ一言が引き金となる。

「ねえ！ 太一郎ってば。明日は休みなんですよ。買い物くらい付き合ってよ！」

茜に悪気などあろうはずがない。だが、場所が悪かった。そこは太一郎が六年近くも通った商学部^{ショウガクブ}の建物。「太一郎」という名前は珍しくはない。だが、よくある名前でもなく……。

「太一郎って……。藤原の？ 藤原先輩……何してるんすか？ こんなところで」

笑いながら後輩の北脇大吾^{きたわきだいご}が太一郎に声を掛けたのだった。

くくくくくくくく

まだ、同級生であれば良かったかも知れない。

彼らは太一郎に群がり、甘い汁を吸った。言わば、同じ穴の貉^{むじな}だ。“金と女”彼らは悪事の片棒を担いだのである。それで太一郎の罪が軽くなる訳ではないが、その連中に責められる謂れはないだろう。

だが、後輩は違った。

ターゲットにする女を連れて来い、と強引に命令した時もある。

この北脇もその一人だ。彼の父親は藤原系列の金融会社に勤める中間管理職であった。それを知った時、以前の太一郎が悪用しない訳がないだろう。

「うるせえな！ お前の親父なんか、クビにすんのは簡単なんだぜ。お前をW大^{ウチダイ}から追い出すのもな」

それは、北脇の憧れ続けた女性をターゲットにして弄んだ後の、
太一郎の言葉だった。

その数日前、やっと係長に昇進できたと、喜ぶ父の姿が北脇の脳裏に浮かぶ。母はパートで働き、父は小遣いを削ってまで、「お前は頭が良いから」と幼稚園から私立に通わせてくれた。W大に入学が決まった時、両親は本当に喜んでくれたのだ。藤原の冠を被った暴君に逆らうことは、その全てが無に帰きすることになる。

北脇は唇を噛み締め、引き下がったのだった。

一人に存在を知られたら、後は瞬く間に知れ渡った。
北脇の他にも、暴君・太一郎の下僕にされた後輩たちが、嬉々として仕事中の彼を取り囲む。

「藤原から追い出されたってホントだったんだあ」
「おもしれえ〜。あの藤原先輩が便所掃除してるぜ」
「なさけねえな。俺だった死んでも嫌だね」

彼らは口々に太一郎を嘲笑った。

太一郎はそんな蔑みの視線に耐えつつ、懸命に仕事を続ける。逃げるという選択肢は、今の彼には許されていない。

「……掃除中なんだ。出て行ってくれねえか」
ボソツと太一郎が口にした時、北脇は大声で答えた。

「何、偉そうに命令してんだよ！ お願いします、じゃねえのか？
掃除のおっさん」

騒ぎは少しでも小さく済ませたい。会社や大学側に、問題が起きていると知られては困るのだ。北脇に言われるまま、太一郎はもう一度頭を下げた。

「掃除が終わるまで、外に出ていて下さい。……お願いします」

太一郎に向かって擲楯が飛び交う中、北脇はトイレの隅に積んであったトイレットペーパーを片っ端から床に転がした。白いロール状の塊は、縦横無尽にコロコロと転がる。水に濡れ、床に張り付いて行くのを、太一郎は黙って見ているしかない。

「ああ、わりいな。落としちまった。片付けといてくれよ。掃除のおっさん」

北脇を筆頭に、集まった六人ほどが一斉に笑った。

不幸中の幸いと言うべきか。ここが男子トイレであったため、他の清掃員には気付かれていなかった。太一郎は急いで膝を折り、使い物にならなくなったトイレットペーパーを拾い集める。張り付いた分はモップで擦ろう、そう思い立ち上がった直後、再び新しいトイレットペーパーが太一郎の前に転がり落ちたのだった。

「おっと、悪いね」

「いい加減にきなさいよ！ 大学生にもなってイジメみたいなこと！ 汚いわよ！」

入り口から飛び込んで来たのは茜だ。小柄な身体で北脇たちに立ち向かう姿は勇ましい。だが……。

「汚い？ そりゃそうだろう。こついうやり口は全部、藤原先輩から教わったんだからな」

「……え？」

茜の視線が太一郎に向けられた。

太一郎には何も反論出来ない。北脇の言う通りなのだ。逆らう人間を集団で吊るし上げ、苛め抜いて来たのは太一郎自身であった。

今、出来ることは、黙ってトイレットペーパーを拾うことくらい

……。

無言で床に伸ばした太一郎の手に、厚底のカジュアルスニーカーが乗せられた。踵部分は指を折り兼ねないほどの硬さだ。太一郎は咄嗟に拳を作るが……北脇は全体重を掛け踏み躪った。

「…………グツ…………くう」

奥歯を噛み締めた瞬間、太一郎の喉から呻き声が漏れる。

「ちょっと！ 止めてよ」

「ああ、悪い悪い…………足が滑った」

「太一郎！ どうして何にも言わないのっ！」

太一郎に駆け寄ろうとする茜の腕を、北脇が掴んで言った。

「お前さ、うちの学生じゃないよな？ コイツの女か？」

「違う！」

答えたのは太一郎だ。

「そいつは藤原家の使用人だ。社長夫人のお気に入りで、俺の見張りみたいなもんだよ」

「違うわ、私は…………」

「うるせえ！ お前が騒ぐからバレたんだろうがっ！ 二度と俺の前をチヨロチヨロすんな…………今度こそ犯すぞ！」

茜の目は一瞬で怯えた色に染まった。

「そんなこと…………万里子様に言うわよ。い、いわれたら…………困るくせに」

太一郎は立ち上がり、茜の前まで行くといきなりTシャツの襟首を掴んだ。そのまま引き摺るように、男子トイレから廊下に突き飛ばす。

「こいつらにバレたのはお前のせいだ！ 今度来やがったら、便所の中に引き摺り込んでヤツちまうぞ。 忘れんなっ」

壁に肩をぶつけたのか、茜は痛そうにしている。それ以上に、殴られた時のことを思い出したのだろう。太一郎の顔を見ることがせず、茜は走り去った。

(二度と来るな……頼むから……来るな)

この日から、執拗な北脇の嫌がらせが始まった。

(10) 因果は巡る(前書き)

イジメの描写が苦手な方ご注意くださいね。

(10) 因果は巡る

「休み中で使用者も少ないはずなのに男子トイレが汚い」と大学の事務局に通報があるらしい。君が担当になってからだよ。もつと、真面目にやってくれないと」

太一郎は直属の上司に呼び出され叱責を受けた。だが、「申し訳ありませんでした」彼には頭を下げることしか出来ない。

あれから毎日、北脇たちは太一郎の邪魔をしにやって来る。そして、茜は太一郎の前に現れなくなつた。

「ほらほら、掃除のおっさん。ここも汚れてるぜ」

夏休みで人が少ないのをいいことに、彼らはやりたい放題であった。おまけに事務局からは「トイレトペーパーの減りが早い。持ち帰っているのではないか」そんな疑いまで掛けられ……。

茜にあんなことを言った以上、夜間警備員の仕事は辞めようかとも思った。だがこの調子では、いつ清掃員をクビになるか判らない。そうなれば、たちまち生活に困るのは判り切っている。

今朝も奈那子がパートに行くと言いだした。疲労の色が濃い太一郎を見て気遣つたのだ。奈那子をこんな状況に追いやったのも、北脇らの無法な行動も、元はと言えば全ての原因は太一郎にあった。

(助けがないのも“因果応報”か……。笑えねえな)

男の意地とプライドじゃ、女ひとり食わせることも出来ない。太一郎は恥を忍んで警備員の仕事を続けていたのだった。

そんな太一郎は、更に笑えない事態に陥る。

くわくわくわくわく

「ほら、来いよ！」

「ヤダッ！ 離してよ。離してっ」

その声に太一郎の呼吸が一瞬止まった。茜の声だ。

今日は珍しく誰も邪魔に來ない。ようやく諦めてくれたのか……そう思った矢先の出来事であった。清掃中の男子トイレに、茜は飛び込んで来る。

「なっ！ お前、なんでこんなトコに」

和菓子を届けに週一度は来ていると聞いた。だが、商学部辺りに用はないはずである。

「この女、ずっとその辺ウロチョロしてたんだぜ。他の掃除のオバチャンに聞いたんだよなあ。やっぱコイツ、お前の女なんだろう？」
「違うつて言ってるだろ！ おいつ、何でお前も違うつて言わないんだ。バカじゃねえのか？ 俺は、お前を殴って犯そうとしたんだぞ！」

「でも万里子様が仰ったわ！ “人は変わる” そうしたら、太一郎は謝ってくれた。ずっと半信半疑だったけど……でも、今の太一郎は別人だものっ！ 私も……万里子様みたいに信じたい。信じて……いいんだよね？」

この時、太一郎は気が付いた。

あの藤原家から澱んだ空気を一掃した万里子の強さに、茜は憧れている。恐怖を抑え、太一郎に近づくことで、茜は万里子のようになりたいのだ。

確かに、万里子の行動は理想に近い。彼女は正しいことを口にして、正しいことを行う。だが、その結果が正しい答えだけを導くとは限らない。時には、とんでもない危険に巻き込まれることもあるだろう。卓巳なら守れるのかも知れない。しかし太一郎にそんな自信があるはずもなく……。

「信じていいのよねえ、太一郎さあん」

北脇の声に他の連中も笑う。

「俺らがさ、卒業を棒に振ってまで、そのお嬢ちゃんをレイプするとか思ってるわけ？」

「彼女は本当に社長夫人のお気に入りなんだ。傷つけたら、タダじゃ済まない」

「だから何にもしないって。ただ、ほら……無理矢理とかじゃない方法？ 色々教えてくれたじゃん、先輩」

その顔からは狂気を感じた。北脇の目は爛々と輝き、口元は醜く歪んでいる。

「俺の女じゃない。本当だ。でも……憎いなら俺をどうにかすればいい。その子も俺の被害者で、お前の惚れてた女と同じなんだ」

その瞬間、北脇の顔から冷静さは消えた。只ならぬ憎悪が彼を包み込む。

「いいぜ。じゃあ、土下座して頼めよ。よくやってたじゃん。俺も、彼女は勘弁してくれって、あんたに土下座したよな？ 忘れたか？」

「……いや」

「じゃあ、やれよ！ さあ、便所のタイルに額を擦り付けてみるよっ！」

太一郎の中に、卓巳に殴られた時のことが思い浮かんだ。

『万里子もそう言わなかったか？ 離してくれ、助けてくれと、頼まなかったか』

あの時、太一郎は泣きながら勘弁してくれと卓巳に縋った。

『お前は一度でも許してやったのか。そんな女を、殴り倒して、最後まで犯したんじゃないのかっ』

おそらく、北脇は太一郎を許さないだろう。太一郎が北脇の願いを聞かなかったように。だが……太一郎はそのままトイレのタイルに膝をつき、腰を落とした。

「この通り、お願いします。彼女を巻き込むのだけは……勘弁して下さい」

床は掃除したばかりで濡れていた。その冷たいタイルに両手をつき、深く頭を下げる。ゴツツと額がタイルに当たった。北脇は太一郎の後頭部をスニーカーで踏みつけたのだ。

「い、いい加減にしないよっ！ あんたおかしいんじゃないの？」
茜のほうを向くと、北脇は噛み付くように叫んだ。

「うるせえ！ お前に判るか？ 大学出たら重役として会社に入る。お前の親父の上司になるかも知れない。そしたら、一生お前は俺の奴隷だ。そんな風に言われた時は、いよいよコイツを殺して俺も死のうかと思ったださ！」

「判ってる。全部俺のやったことだ。でも、彼女は」

「お前がやったことは、全部やり返してやる！ この女もボロボロにして捨てて……」

「そんなに俺みたいになりたいのかわつ!？」

北脇の足を退け、太一郎は怒鳴った。

「見ろよ　今の俺を。償っても償っても犯した罪から逃れられない。頼むから……こんなとこまで墮ちて来んなよ……頼む」

茜の後方に立つ連中は、そんな太一郎の姿から目を背けた。

だが北脇は違った。彼はいきなりフアスナーを下ろし、なんとその場で小用を足し始めたのだ!

それは……直接タイルに叩き付けられ、飛沫しぶきが太一郎に掛かる。やがて薄黄色の流れは排水溝に向かい、床に座り込む太一郎のズボンに染み込んでいった。

「ああ、床に零れちゃった。悪いけど、掃除しといてくれよな。

こんなガキに手え出したりしねえよ。あんたには何やってもいいんだろ?　しつかり償わせてやるよ、先輩」

北脇のやり方に、他の連中は数歩下がった。さすがに、まともな行為ではないと感じたのだろう。彼らはその後、北脇にも太一郎にも近寄ることはなくなつたのである。

くわくわくわくわく

「太一郎!」

茜の声を無視して太一郎はキャンパスを突き進んで行く。懸命に追いかけるが、コンパスが違つので中々追いつけない。だが、よう

やく手が届く位置まで追いつき……。

「待って！ 私の話を聞いてよ！」

「触んなっ！」

茜はビクツとして立ち止まった。

すると、太一郎も足を止め、言ったのだ。

「信じてくれたこと、感謝してる。きっと将来は万里子様のようになれるさ。じゃあな」

“猛獣使い”と評された万里子の手並に憧れた。勇気を持って正しいことをすれば必ず報われる。万里子の勇気が太一郎を変えたのだ。茜も自分の中の勇気を信じたかった。

その想いの呼び名は、まだ判らなくても……。

「……太一郎……」

「触るなって、汚いから」

茜は太一郎の袖を掴み……そのまま、後ろから抱きついた。

(11) 優しいキス

「汚くなんか無いっ！ カッコ良かったよ、太一郎。ヒーローみた
いだった」

茜の腕が、太一郎のウエストに巻き付いた。太一郎には身動きが
取れない。もし振り返れば……その時は茜と正面から抱き合うこと
になるだろう。

かと言って、このままでもいられない。人に見られたら、どんな
誤解を受けるか判らないのだ。太一郎なら構わない。元々ろくな評
判がない男である。今更、悪評の一つや二つ……だが、これ以上茜
を巻き込めば、北脇にしても本当に手を引くか判ったものではない。

「……離せよ」

「ヤダ」

「お前、自分が何やってるか判ってるのか？」

「判ってる！ 傍に……居てもいいって言うてよ」

「……」

「私、太一郎のこと嫌いじゃないよ。……好きかも知れない。現役
の女子高生がカノジヨになってやってもいいって言うてるんだから
っ！ 何とか言え、バカ太一郎！」

息が詰まった。

こんな告白は生まれて初めてで……。太一郎は胸が甘く痺れる感
覚に呼吸も忘れた。

「なあ、佐伯」

「茜でいいってば」

「佐伯、放してくんねえか。俺、家で女が待つてるから」
「……嘘っ！」

彼女がいたら、コンビニおにぎりなんて食べてないよね。

以前、茜が呟いた言葉だ。その時は、太一郎は何も答えなかった。
……答えたくなかったのだ、あの時は。

「嘘じゃねえ。何の為に昼も夜も働いてると思う？ 十一月に子供が産まれんだよ。だから」

「嘘だよ……だって、太一郎がそんなにモテるわけないもんっ！」
「いや、だから……」

その時、太一郎の内ポケットで携帯が震えた。

く*く*く*く*く*

「すみません。伊勢崎と言いますが、ここに……妻が運ばれて来た
と」

小平市内の公立病院であった。総合受付で太一郎は自分の名前を
名乗る。

伊勢崎太一郎さんですか？ 奈那子さんと仰る女性が倒れて、
救急車で運ばれました。

電話は、奈那子の携帯に添えられた緊急時の連絡先を見て掛けて
きたものだった。太一郎は慌てて私服に着替え、仕事を早退し、病
院に駆けつける。

「奥様のお名前は」

「奈那子です。お腹に子供がいて、今、七カ月なんです」

「ああ……奥様はもう、産婦人科の病室に運ばれたみたいですね。南館の三階で聞いていただけますか？」

受付の女性は丁寧に南館までの行き方と、エレベーターの位置まで教えてくれた。

その場所は……太一郎には酷く居心地の悪い場所だ。大勢の妊婦が行き来し、赤ん坊の泣き声が聞こえる。病院の消毒薬の匂いより、ほんのりと甘い……ミルクだろうか……赤ん坊の香りに眩暈を覚える。

彼にとって赤ん坊と言えば、水子の祟りくらいしか思いつかない。一生、人の親になることなどありえない、と思ってきた。それが、産婦人科はあまりに明るく、新しい命の光に魂まで浄化されそうだ。

「赤ちゃんに問題はありませんよ。ただ、お母さんが貧血なうえ栄養が足りてませんね。しかもこの暑さで……。奥様は元々、あまり丈夫じゃないのかしら？」

ちようど診察してくれた産婦人科医がいて、大したことは無い、と説明してくれた。だが、母体の健康回復に一週間程度の入院を勧められ、太一郎はすぐに了承したのである。

そして医師と共に病室まで行った時、

「奈那子！ お前何してるんだ！」

倒れて運ばれたはずの奈那子は起き上がり、ベッドを整えている。

「太一郎さん。申し訳ありませんでした。もう、大丈夫ですから」

「大丈夫なわけがないだろう！？ さっさと寝てろっ」

「でも……点滴をして頂いて、気分も良くなりましたから」

青白い顔をして“気分が良くなった”もないものだ。

だが、それを言わせているのは太一郎であった。偉そうに「助けてやる」と言いながら、最低の生活しか与えてやれず。奈那子は、普段通っている商店街で倒れたという。懇意にしている店に、パートでも雇って貰えないかと尋ねて回ったらしい。

そんな二人を見かねて、女性医師が奈那子に声を掛けた。

「無理は禁物ですよ。赤ちゃんに異常がなくても、お母さんが苦しいと、赤ちゃんも苦しいのよ。ご家庭ごとに事情があるのは判りますが……今は元気な赤ちゃんを産むことを考えて。ご主人に甘えちゃいなさい、ね」

奈那子がベッドに戻ると医師は部屋を出て行った。今日は様子を見る為に個室だという。明日の午前中には六人部屋に移ることになっていた。

「太一郎さん、お気持ちは嬉しいです。でも、父のせいで保険が使えないわたしは、一週間も入院したら何十万円も掛かってしまいます」

「お前なあ、いい加減にしろよ。いざとなったら、俺にだって頼る人間はいる」

「そう仰って、またお仕事を増やそうとなさってるんでしょう？」

一日三時間ほどしか眠られてないのに……これ以上は死んでしまします」

奈那子は体を起こし、太一郎の方に身を乗り出して訴えた。折れそうに細い指を彼の手に重ね……涙が頬を伝い落ちる。

「判って……いるんです。太一郎さまはわたしに同情して下さってるだけだ、って。ご自身もこんなにご苦労なさってるのに……。わたしさえ子供を諦め実家に戻れば、多少のお金は都合して」

「やめろっ！ 同情じゃないって言ったろ？ なんで、そんな」

「太一郎さまに好きな女性が出来た時は、わたしは家を出ますから。もちろん、子供さえ産まれたらすぐに。このお金もいつか必ず……」
「それ以上言うな！」

無意識だろう、奈那子は「太一郎さま」に戻っていた。太一郎はそんな奈那子のお腹を庇うように、そっと抱き寄せる。

妙なものだが……再会してから四ヶ月も一緒に暮らしながら、彼女に触れたのは初めてだ。それを奈那子が気にしていたことに、太一郎はようやく気付かされた。

「もう、わたしでは太一郎さまのお役に立てませんから」

「役？ どういう意味だよ」

「……他の男性と……それに、赤ちゃんまで……。太一郎さまのお心に背いてしまいました。ですから、わたしは」

確か「他の男と寝たら、二度とお前を抱かない」そんなことを言ったような気もする。罨に嵌められたとも知らず、太一郎に会いに来る奈那子が目障りで言った言葉だ。仲間を嫉めて奈那子を襲わせ、「他の男に抱かれた」と難癖を付けて捨ててやるうか、とも考えていた。

そんな太一郎の了見も知らず、奈那子は……だから二度と恋人には戻れないし、妻にもなれないと嘆く。

太一郎は奈那子と少し離れると、頬に張り付いた彼女の髪を払いのけた。そのまま、そっつと唇を重ねる。奈那子とは約一年ぶりのキスだ。こんな穏やかな口づけも悪くない。

その瞬間

太一郎の心を掠めるように、茜の笑顔がチラついた。

茜の告白に、不思議な感覚を覚えたのは事実だ。彼女には借りがある。だがそれ以上に“何か”を茜から感じた。

しかし彼の目の前には、生気のなかつた頬がキス一つで桜色に上気し、嬉しそうにはにかむ妻ななこがいる。

太一郎は心の中から茜の存在を打ち消した。

「余計な心配すんじゃない。子供が産まれたら……いくらでも抱いてやるよ」

太一郎の言葉に、奈那子はもっと赤くなる。それを見ていた彼自身も、甘ったるい空気を胸いっぱい吸い込み、咽せそうだった。

「あらあ。あたしったら、お邪魔だったかしら？」

スライド扉が開き、きつい香水の匂いと共に耳障りな声が部屋中に響く。女でありながら、これほど産婦人科が似合わない女も珍しい。名村郁美であった。

(12) 果てしない悪意

自動販売機前のベンチに座り、郁美は派手なゼブラ柄のバッグから煙草ケースを取り出した。彼女がライターを手に、ケースから一本引き出そうとした時　大きな手が煙草ケースとライターを一纏めに奪い取った。

「ここは禁煙だ」

太一郎は怒りを露に、煙草ケースとライターを元のバッグに押し込む。

郁美はムツとした顔をしながら立ち上がり、自動販売機の前まで歩いて行った。

「ねえ、ビールはないの？」

「　　帰れよ」

「随分偉そうじゃない。誰のおかげで今の仕事に就けたと思ってるの？」

「その前に、誰のせいでクビになったか、思い出させてやるのか？」

郁美の台詞に、太一郎は言い返した。容赦ない視線で彼女を睨みつける。途端に、郁美は意味もなく周囲に目を逸らせたのだった。

社長夫人である郁美の来訪である。何も知らない奈那子は恐縮頻りだ。

「ひよつとして、ご近所の方が会社に連絡したんでしょうか？　ご迷惑をお掛けして申し訳ございません」

慌てて姿勢を正し、郁美に頭を下げる。

近所の人間は太一郎が『名村産業』から『名村クリーンサービス』

に移ったことを知らない。奈那子が運ばれるのを見かけた誰かが、親切心から『名村産業』に一報を入れたのだった。

そのことを郁美は声高に言い上げる。

「ほおんと、いい迷惑よねえ。でも、うちの系列だし、伊勢崎くんにはとおってもお世話になったから……。こうしてわざわざ来てあげただけど。ラブシーンの真っ最中なんて、随分お元気そうじゃない」

奈那子は恥ずかしそうに、頬を染め俯いた。申し訳なさも感じているのか、細い肩を一層竦めている。

「奈那子、お前は横になつてろ」

「でも……」

「お詫びなら俺がするから。とにかく、頼むからゆっくり休んでくれ」

渋る奈那子を強引に寝かせ、太一郎は郁美を押し出すように病室を後にした。

「とにかく。理由がそれだけなら……。ご覧の通り、大事には至りませんでしたので、お引取り下さい。わざわざどうも、ありがとうございました」

太一郎は力を入れて礼を言い、郁美に背中を向ける。

その時だ。

「ふーん。あかねちゃんの話は、奥さんに言わなくてもいいのかしら？」

郁美はベンチの背に浅く腰を置き、腕を組んで思わせぶりな笑顔を見せる。

「何だよ、それ」

「佐伯茜ちゃんだっけ。女子高生に手を出しちゃうなんて。さすが？ バージン・キラー？ 復活ね」

「……」

黙り込む太一郎に郁美は近づいてくる。

「人目があるんだから、ここで妙な真似は出来ないわよね？ 太一郎パパ」

産婦人科病棟の隅にある談話スペースだ。目の前の廊下を、看護師をはじめ病院関係者、入院患者や見舞い客が行き交う。確かに、ロードスターの中のような脅し半分の手段は使えない。

「彼女は藤原家のメイドで……」

「清掃中に男子トイレの個室に引つ張り込んで、イイコトしてたんですって？ ついさつき、大学側の事務局からクレームが来たって、等さんが怒ってたわ」

「違う。デタラメだ！ 俺は」

言い掛けて、太一郎は口を閉じた。

後輩の北脇だ。やることが素早い。卒業を棒に振ることのない、『無理矢理とかじゃない方法』の一つ、密告を利用したのだ。

だが…… そうなれば茜のことも心配である。もし太一郎が北脇^{ヤツ}の立場なら、茜も傷つけようとするだろう。

「倒れたばかりの奥さんが知ったら、傷つくでしょうねえ。妻の妊娠中の浮気なんて、よくあるケースだもの」

郁美の指先が太一郎の背中を突いた。指でっつと上になぞり、同じようにゆっくり、今度は下になぞる。そのままジーンズぎりぎり、太一郎の腰骨辺りまで指先が下がった時、彼は郁美の腕を振り

払いベンチに腰掛けた。

「いい加減にしてくれよ。俺のこと調べたんなら判っただろ？俺のお袋は先代が妾に産ませた子だって。大した財産は相続してないし、その金すら……俺が馬鹿やってかなり食い潰した。藤原グルーブは巨大だけど、その全部が社長である俺の従兄のもんだ。俺は奴を散々怒らせた。俺が死んでも、葬式費用も出しちゃくれねえよ」

『野垂れ死にしそうな時は、意地を張らずに戻って来い』

卓巳はそう言ってくれた。だが、そのことを郁美に言うわけにはいかない。何としても諦めさせなければ……。

だが郁美は、太一郎が予想もしなかった台詞を口にした。

「別にいいわ。お金が入ったら美味しいけど……今の生活に困ってる訳じゃないから。あたしだって馬鹿じゃないのよ。身の程は知ってるわ。財界の有名人に喧嘩売ったって勝ち目なんてないじゃない」
郁美は実にあっけらかんと言いつつ。

それには太一郎のほうも驚きだ。てつきり太一郎を出汁に使い、卓巳から幾らかの金を引き出すのが目的とばかり思っていた。しかし、郁美は再度太一郎に近寄り、彼の横に座るとミニスカートで脚を組んだ。

「あたしの言うことを聞かない男って初めてよ。？メス豚？呼ばわりしたツケはしっかり払って貰うわ」

「俺をクビにするのか？」

「やあだ。それじゃこの先、楽しめないじゃない。それに、いい事聞いちゃった」

郁美の顔には悪巧みたっぷりの笑顔が浮かんでいる。そう、子供が蝶の羽を生きたまま筆うつとする時のような……。子供と違つと

ころは、百パーセントの悪意が詰まっている点だろう。

「ねえ、太一郎くん。奥さん、パートの仕事を探してて、倒れたんですって？ 健康保険も母子手帳もなしなんて、異常よね？ ひよっとして、お金……もの凄く困ってるんじゃない？」

奈那子の父・桐生は代議士だ。かなりの方面に力を持っている。奈那子がそういったものを少しでも使えば、すぐに居所は知られるだろう。

奈那子の子供は、彼の政治生命を脅かすかも知れない存在なのだ。どんな手を使っても、桐生は産まれる前に処分しようとする。或いは産まれた後でも……。

「お金、用立ててあげてもいいのよ。そうね、当座に三十万。それだけあれば、今回の入院費用は払えるんじゃない？」

三十万円。かつての太一郎にとって、一夜の遊びの代金だ。

それが今は 喉から手が出るほど欲しい。

「俺に……貸してくれる訳か？ 担保は何もないぜ」

「やあねえ、あるじゃない！ その立派なか・ら・だ」

太一郎は郁美の貪淫たんいんな視線に悪寒が走った。腰が引けそうになる太一郎を無視して、彼女は続ける。

「こないだの言葉を撤回して、ベッドの上で足を舐めて貰うわ。満足行くまで楽しませてくれたら……無利子で貸してあげる」

まさか、男である自分が金と引き替えにセックスを要求される日が来るとは、夢にも思わなかった。札束で女の頬を叩き、言いなりにさせた罰かも知れない。そんなことを考え、太一郎は吐き気を我慢した。

「さあ、どうするの？ 身重の奥さん働かせる気？ 昼間の仕事は、もっと給料が減るかもねえ。得意なんですよ、セックス。仕事だと思って割り切ればあ？」

奈那子を働かせる訳にはいかない。金がなければ、すぐにも退院すると言い出すだろう。

郁美の申し出は天の助けだ。蜘蛛の糸にも等しい。問題は……それが毒蜘蛛であることだった。

(13) 苦渋の決断

「伊勢崎さん　お待たせ致しました。こちらがお釣になります」
トレイに千円札一枚と数枚の百円玉が乗せてあった。太一郎はそれを受け取り、財布に入れた。

「なるべく早く保険証を持って来て下さいね。再計算して、差額は返金させて頂きますから」

「はい。どうもお世話になりました」

親切にそう付け足してくれる事務員に、太一郎は丁寧に会釈して支払い窓口を離れたのだった。

病室に戻ると奈那子は既に帰り支度を済ませていた。

救急車で運ばれた当初は酷い顔色だったが、今ではすっかり血色も良くなった。この一週間で貧血の数値もだいぶ戻ったという。お腹の子供も順調で、太一郎もホッと一息だ。

(やっぱり……これで良かったんだ)

太一郎は、同じ病室の入院患者に挨拶に回っている奈那子の横顔を見ながら、この一週間に起こった事を思い出していた。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊

郁美への返事は即答出来なかった。

今の太一郎には、どこから出ていても金は金、とは思えない。まともな人生を歩むために、藤原を出て自活しようと思ったのだ。贖

罪のために身を墮とすのは間違っている。郁美に屈服し、金の為にあの女を抱いたら……今度はどんな要求をして来るか判らない。郁美は藤原の金には興味がなくなったように言っていたが、額面通りに受け取るのは危険だ。

だが、どれだけ綺麗事を言っても、金を必要としている現実はその前にあった。

そして郁美の言った通り、会社はクビにはならなかった。それにW大の担当も変わらずに済んだのだ。理由は簡単である。北脇は太一郎を痛めつける上で最も効果的な手段を取った。

「あなたね。うちの茜を誑かしながら、高校生の娘に誘われたなんて嘘を平気で吐いた男は！」

ビルの夜警に出勤した太一郎を、和菓子屋「さえき」の女主人・佐伯雅美が待ち構えていた。茜の母親である。

案の定、北脇は太一郎より茜の評判を徹底的に落とすのだ。

茶道サークルに和菓子を配達する名目で大学構内に自由に出入りしている女子高生が、大学生に声を掛けて小遣いを稼いでいる。北脇も、彼の友人も声を掛けられた。実際に、その女子高生が清掃員を誑し込み、男子トイレで事に及ぶのを目撃した。

北脇はそんな風に通報した。非常に迷惑しているので、排除して欲しい、と。

その結果、和菓子屋「さえき」はW大学に出入り禁止となった。茜は？不純異性交遊？果ては？売春？の疑いがある、と高校にまで連絡されたのだ。

夏休みであるにも関わらず、茜は母親と共に高校から呼び出された。幸い証拠は何もなかった為、処分には至らず、「必要以上に大

学構内に入りにしないように」と、注意を受けたのだった。

「言ったでしょ、お母さん！ たい……伊勢崎さんが悪いんじゃないってば！ 私が、あの大学生たちに遊びに行こうって言われたのを断ったから。その嫌がらせなんだって」

茜は太一郎の素性を言わなかった。彼女自身が大学生から誘われ、それを断った腹いせに嘘の通報をされたのだ。そんな風に周囲に話したらしい。

だがもちろん、母親はそれでは納得出来ないだろう。

「そのせいで、お得意様が減ったのよ！ そもそも、あなたがこの男に適切なことを言われて、フラフラと大学に出入りするから……。しかも、うちのビルの夜間警備まで紹介してたなんて。母さん、新田さんに聞くまで何も知らなかったわ」

母親の後ろに少し困ったような表情をして和菓子職人の新田が立っていた。人の良さそうなルックスをしている。見た目も細身で一七〇もないだろう。太一郎にはどう見ても、この男からかつての自分と同じような気配は感じられなかった。

母親もそう思っているのか、信頼と愛情の混じった眼差しで新田を見ている。

「僕は……ただ、身元が確かでない男性を茜ちゃんが紹介したって聞いて。茜ちゃんは『さえき』の大事なお嬢さんですから」

「ええ、本当に。普通に考えれば判りそうなものなのに……。頻繁に大学に行ったり、夜には警備室にまで出入りしてたなんて……。全然気付かなくて」

母親の仕草を見て、茜はカチンと来たようだ。

「そりゃそうよ。お母さんにとつたら、家にいるより新田さんの部屋にいるほうが多いんだもの！」

見る間に母親は真っ赤になった。確かに、どう見てもこの二人は男女の関係だ。高校生の茜の目にも明らかだろう。

再び親子喧嘩になり掛けた時、
「全て俺のせいです。本当に申し訳ありませんでしたっ！」
太一郎は大声で謝罪し、深々と頭を下げたのである。

働いた分の給料を受け取り、立ち去る太一郎の後を、茜が追ってきた。

「ごめんね、太一郎。次の仕事はきつと探すから」

「謝るのは俺のほうだ。巻き込んで本当に悪かった。もういいから……俺には関わるな。藤原の名前を出さないでくれて感謝してる」

「ダメだって！ だって……子供、産まれるんでしょ？ お金が必要んでしょ？」

涙に潤んだ声で言われると、茜から責められているようだ。太一郎の胸は苦しかった。罪の意識とは違う、別の痛みが彼を苛む。

「とにかく、戻れよ。あの新田って野郎のことはよく判んねえが……何かあったら連絡しろ。俺に出来ることは何でもするから」

「それって襲ったことの罪滅ぼし？ でも……太一郎も相当ボロボロだよ」

「……るせえ」

茜は携帯番号が書かれた紙切れを握り締め、太一郎に尋ねた。

「奥さんとか子供とか、私を追い払う為の嘘で……私のこと振り向いてくれる確率ってどれくらいある？」

「俺にそんな価値はない。イタズラ電話はすんじゃねえぞ」

何でもいいから、茜の力になってやりたかった。母親に男が出来たことで寂しい思いをしているなら、単なる慰め、話し相手でもいい。太一郎が茜にしてやれるところは、それくらいしか残されていない。だったのである。

その日から、太一郎の精神状態は、日に日に追い詰められて行く。新しく夜の仕事を見つけなければならぬ。そして、数日以内に入院費用だけで二十万円を用意する必要もあった。いよいよ腎臓でも売らなければならないのか、と思った時、郁美から連絡があったのだ。

『今から、お見舞い？ 毎日大変ねえ』

病院に入る寸前、携帯を切ろうとした時に郁美から電話が掛かる。あまりのタイミングの良さに、太一郎は周囲を見回した。病院の駐車場を挟んだ歩道の向こう、一台の真っ赤なロードスターが見える。『俺のことつけてんのか？』

『やあねえ。そろそろ覚悟が決まったかなあと思っただけよ。明日には奥さん退院じゃないの？ お金は出来たのかしら？』

『……』

『貧乏つてイヤよねえ。あたしだって、六十の爺さんと寝て、手にしたお金のよ。見返りは求めて当然よね？ 思わない？』

太一郎には何も答えられなかった。

『このまま、車停めて待つてあげるから。見舞いはさっさと済ませて来なさいね。二度と偉そうな口叩けないように調教して』

途中で電話を切り、そのまま電源もオフにした。

液晶画面から明かりが消え、命が終わったような携帯電話を握り締める太一郎だった。

(14) 救いの手

病室に行くと、奈那子はいなかった。他のベッドの患者に「奥さん、シャワーに行かれてますよ」と教えてもらおう。太一郎は軽く頭を下げ、廊下で待つことにしたのだった。

もう、タイムリミットである。残る手段は卓巳に頭を下げることだ。宗に頼んでもどうにかしてくれるだろう。だが、事情を話さなければならぬ。

去年、太一郎が奈那子を妊娠させた時、怒り狂う彼女の父を卓巳は金で黙らせた。藤原の直系ではなく、政治家になれるほどの能力もない太一郎を、婿とするには役者が足りなかったのだ。逆に、卓巳が代わりに責任を取るなら、婿養子でなくても構わない言い出しただけである。

その時に太一郎は、『二度と奈那子には関わらない』といった念書を書かされた。

今、この日本において、政治家と一切関わりを持たず、大企業を経営して行くなど不可能だ。何処かで必ず繋がりは生まれる。卓巳も企業倫理における法令遵守コンプライアンスを尊重しているが、綺麗事だけでは藤原を守れなかつただろう。

卓巳と桐生代議士の関係には、そういったものも含まれていた。

太一郎が奈那子の家出に関わったこと。それも積極的に彼女を隠そうとした行動は念書に逆らうものである。桐生は藤原に対して報復措置を取るかも知れない。それを考えたら……まさかとは思うが、卓巳や宗が奈那子を桐生に渡さないとも限らない。卓巳は万里子にこそ優しいが、それ以外の女は別だ。いざとなれば、どこまでも冷

酷になれる人間である。

だが、卓巳は生まれた時から今の太一郎並の生活だった。母親に捨てられ、父親が死んだ後は施設で育ったという。高校も行かずに朝晩働き、十代の遊びなど一つも経験せず……。

太一郎は今の自分の状況に置き換え、最終的には藤原に逃げ込めると考えている、自分の甘さを恥じた。

郁美の要求を飲もう。

墮ちる時は、自分だけ墮ちればいい。何処かで野垂れ死ぬなら、それもまた自業自得だ。太一郎が覚悟を決め、顔を上げた時……。

「太、一郎……さん？」

奈那子より少し大きめのお腹をして、そこに立っていたのは

太一郎が女神と崇める、藤原万里子、その人であった。

「なっ！　なんでこんなところに居るんだよ！　皇月ばあさんが入院してた病院で産むんじゃないの？」

まさか、藤原の社長夫人が、言っではなんだが公立病院で子供を産むとは考えられない。第一、卓巳が認めないだろう。

「去年、ボランティアに来てた幼稚園がすぐ傍なんです。仲良くあった園児のお母さんが出産されて……お祝いに。でも……わたしよ、どうして太一郎さんが？」

万里子の問いに、太一郎は答えに窮する。だが、その悩みはすぐに解消された。

「あら？ 伊勢崎さんのご主人、もう来られてたのね。奥さん、シヤワーを済ませてお部屋に戻られましたよ。赤ちゃんも順調ですよ」

太一郎の肩を叩き、奈那子の主治医である女性ドクターが朗らかに言ったのだ。

無論、悪気などあろうはずがない。だが、口を開けたまま、目をまん丸にしている万里子を見て、どう言って説明するか頭を抱える太一郎であった。

くくくくくくくく

万里子を、郁美と同じ談話コーナーに連れて行くことは躊躇われ……。一階にあるカフェレストランに二人は入った。

伊勢崎の名前から始まって、とりあえず、奈那子のことを説明する。昔、太一郎が酷い目に遭わせた女性が、未婚の母になることを両親に猛反対された。彼女を助けたくて、夫婦だと嘘を吐いていると。

だが、奈那子の姓が桐生であることや、郁美の件、茜と再会したことなどは言わずにいた。

万里子は最初 ちゃんと食べているのか、痩せたんじゃないのか、どんな仕事をしているのか。と、太一郎を質問攻めにした。

「そう……じゃ、太一郎さんの子供じゃないのね。でも、太一郎さんは奈那子さんのことを愛してるの？」

「え？ 今は……それどころじゃないというか……生活に手一杯で」「何言ってるの、太一郎さん！ そこが一番重要でしょう？ もし、わたしなら……愛されてるって思ってしまうわ。事情はよく判らな

いけど……孫が産まれたら、彼女のご両親もお許しになるんじゃないかしら？ その時はどうするの？ 彼女と結婚して、子供の本当の父親になるうとは思わないの？」

「……」

矢継ぎ早に質問され、とうとう太一郎は黙り込んでしまう。

以前なら、「うるせえ」と怒鳴りつけるところだが……。ここでは、太一郎は奈那子の夫であり、子供の父親なのだ。一人前の大人の男だと認められている以上、それを壊すような言動は慎む必要がある。

答えない太一郎を見て、万里子は恥ずかしそうに微笑んだ。

「ごめんなさいね。なんだか小姑みたい。でも、ちょっと悔しくて……。新婚旅行から戻ったら、太一郎さんと卓巳さんに仲直りして貰おうと色々計画してたのよ。でも、もうお屋敷にはいらっしやらなくて。半年ぶりに会ったら、別人なんですもの。ビックリしちゃった」

「俺が……別人？」

「だって、以前は少しでも劣勢になると、すぐに悪ぶって大声出してたでしょう？」

万里子はクスクス笑っている。だが、凶星を指され……。太一郎は閉口するしかない。

「そうそう、都合が悪くなると嘘を吐かないで黙り込むところ。卓巳さんにそっくりよ。卓巳さんのほうが理屈っぽいから、少し考えて言い返して来るんだけど」

可笑しそうに笑う万里子を、太一郎は不思議な気持ちで見つめていた。以前感じていた、自分を見て欲しい。卓巳さえいなければ……。そんな制御出来なくなるような感情は、何処かに消えている。

今日の付き添いは運転手だけで、ロビーで待っているという。男性に産婦人科は居心地が悪いだろう、と万里子が気を利かせたらしい。普段ならメイドの雪音が付き添いで来るのだが、彼女は今、教習所通いだそうだ。

そして別れ際、「太一郎さん。本当に何も困ってない？」名残を惜しむような眼差しで万里子を見上げる。出産に必要なものがあれば……そんな風に言葉を続ける万里子に、太一郎の心は揺れた。

「出来れば……卓巳には言わないで欲しい。それと……」

万里子なら、どうかしてくれるかも知れない。だが、それは……。

「太一郎さん？　どうかした？」

万里子と郁美、同じ土下座するなら……太一郎は歯を食い縛ると、病院の廊下の端に座り込み、いきなり頭を下げたのだ。

「た、たいちろうさんっ！　どうしたの？　何してるの？」

驚いた様子で万里子も座り込み、太一郎を立たそうとする。

「頼む。何も聞かず、三十……いや、二十万貸して欲しい。頼みます」

万里子の息を飲む音が聞こえた。

「太一郎さん。困っていることがあるなら、卓巳さんに……」

「卓巳には……知られたくないんだ。というか、奴は知らないほうがいい。詳しくは言えないけど……変なことに使う金じゃない。明日、退院で金が居るんだ。必ず、どんなことをしてでも返す！　だから」

「わたしが銀行からお金を引き出せば、卓巳さんに必ず伝わるわ。」

わたし……彼に聞かれたら、正直に答えます。だから、内緒でお金は貸せません」

最もな話だ。卓巳への口添えであるなら、万里子は喜んで引き受けてくれるだろう。だが、卓巳に嘘を吐けと言われて、承知するはずがない。

通り行く人の視線を感じ、太一郎は急いで立ち上がった。

「悪いな。忘れてくれ。今日の話は……卓巳に聞かれるまで黙っておいてくれたら」

ボソボソと呟く太一郎の手を取り、万里子はバッグから慌てて取り出した白い紙を握らせる。

「すぐに連絡しておくから……訪ねて下さい。必ず、力になってくれるから」

それは一枚の名刺で

？千早物産株式会社 代表取締役社長 千早隆太郎？と書かれてあった。

「あつちい。ちよつと待つてろ」

太一郎は紙袋やスポーツバッグを玄関に置いたまま、部屋の中に駆け込みエアコンのスイッチを入れた。

古いアパートなせいか、引越し当初は鼻につく臭さを感じたものだ。だが、それにも次第に慣れ……。今では寧ろ、奈那子の甘く清潔な匂いがカーテンや布団に染み付いている。

奈那子の入院中、太一郎は初めてこの部屋で独りになった。布団に入ると妙な気分が納まらず、思わず右手が動いてしまい……。
(こんなことやってる場合じゃねえだろうが)

朝には軽く自己嫌悪に陥る太一郎だった。

「奈那子！ お前は持つなつて」

「そんなに心配しないで。太一郎さんのおかげで元気になりました。少しくらいの荷物は平気です」

確かに顔色は良くなったが、細い手足は相変わらずだ。

太一郎はTシャツの肩袖で顔の汗を拭いながら奈那子の傍まで行く。そして、わざときつい表情を作り、少し凄んで見せた。

「言うこと聞かねえと、ただじゃ済ませねえぞ」

「え？ 怒ったんですか？ 太一郎さん」

奈那子は途端に不安そうになり、太一郎を見上げて言う。

その時、太一郎は彼女をいきなり掬い上げ、横抱きにしたのだ。

「きゃー！」

「お前ごと抱えて運ぶ。」

「……あの、あの、重いです。赤ちゃんの分も重くなつてて」

「羽みたいなもんだ。もつとちゃんと食べよ。今度から、夜は一緒

にいてやれるから……俺みたいな男でも、居ないよりマシだろ？」

奈那子は目を潤ませながら、太一郎に抱きつき、

「太一郎さんが居て下さったなら……もう、何も要りません」

そう言うと、ギョツと細い腕に力を籠めたのだった。

くくくくくくくくく

千早物産の本社は中央区にある。

藤原グループの本社ビルには比べるべくもないが、六階建ての自社ビルを持つ立派な会社だ。主に外食産業を対象とした業務用食品の研究・開発から、独自の物流システムを駆使して出荷までを行う。全国に三十二の支店と五十の営業物流拠点を持つ、健全経営の中堅企業だ。

藤原との業務提携は、万里子と卓巳の結婚以前からである。しかし、ごく自然にラインが強化され、関連各社の千早物産に対する評価は上向きであった。

他に手立てなど一つも残されてはいない。万里子の言葉を信じ、太一郎は千早物産本社ビルを訪れた。六階の社長室に通され、待つこと十数分。茶色のスーツに身を包んだ、万里子の父・千早隆太郎が姿を現す。

その視線は非常に険しく、値踏みするかのようには太一郎を上から下まで繰り返し見ている。

「君が、伊勢崎太一郎くんかね？」

「……はい」

万里子の申し出を、太一郎は断わろうとした。

なぜなら、この千早物産に桐生の手が及んでは困ると思ったからだ。万里子の親切に甘え、彼女の実家に迷惑は掛けられない。それこそ、卓巳が怒るに決まっている。理由を説明せずに断わろうとする太一郎に、万里子は言ったのだ。

「藤原に問題があるの？ だったら父には？ 伊勢崎さん？ て話すわ。わたしが幼稚園でボランティアさせて頂いた時に、ご夫婦に色々お世話になったって、ね？」

「え？ いや、でも、親父さんに嘘を吐いてもいいのか？」

驚いて尋ねる太一郎に、万里子は肩を竦め、悪戯っぽく微笑んだ。「だって、お父様と卓巳さんは別だもの」

それが親子なのだ、と思うと、太一郎は新鮮な感動を覚えていた。

思えば彼自身、両親を無条件に信頼し、互いに支え合う関係など築いたことがない。此処まで困っても、父や母に頼ろうとは一切思わなかった。だが母はともかく、僅かでも心を通じ合わせた父なら、太一郎が頼めば窮状を救ってくれるかも知れない。しかし、上海までは行けず……連絡先も聞かずじまだった。

「私は君と同じ名前けたものの人間に心当たりがある。娘の夫の従弟で、非常に粗野で凶悪な獣だそうけたものだ。娘も結婚当初はかなり辛い思いをさせられたという。藤原太一郎という名だが、君は知らないか？」

その口調も視線も、明らかに太一郎本人を睨みつけていた。

太一郎は息を呑むと、「……いえ。知りません」と震える声で答える。

「そうか……。万里子は何も聞かず、君に三十万円を貸してやって

くれ、と言つんだが。常識的な人間なら、身元を確認するだろうな。君の勤務先を聞かせて貰おうか？」

万里子の願いは本心ではなく、この男に脅されたものではないかと。隆太郎はそんな目で太一郎を見ていた。

「名村クリーンサービス？の名前を挙げるのは簡単だ。しかし、このことが郁美の耳に入れば……。太一郎が金を借りられないように、あることないこと隆太郎に吹き込むだろう。」

そこまで考えた時、太一郎はテーブルに額をぶつける勢いで頭を下げた。

「借用証を書きます！　すぐに全部は無理ですが……。もし、夜に働かせて貰えるなら、その給料は全額返済に充てます。ですからっ」

「一体、何に使う金だね？　それすらも聞かせて貰えないのか？」
「……。つ、妻が……。妊娠七カ月で……。倒れて入院しました。訳があつて保険証が使えず、退院するのに纏まった金が必要なんです。担保も保証人も居ません。肉体労働以外は……。出来ません。でも、何としても無事に子供を産ませてやりたいんですっ！　たとえ腎臓を売つてでも返しますから、どうか」

太一郎が一息に言った時、不意に万里子の父が立ち上がった。そして、太一郎の腕をガシツと掴む。

「馬鹿を言つんじゃないっ！　子供は産んだらお終いじゃないんだ。一人前に育てるのに、何十年掛かると思う？　少なくとも向こう二十年、君は働き続けなくてはならんだぞ。判つとるのかっ！？」

一瞬、叩き出されることを覚悟した太一郎だったが……。

くくくくくくくく

九月から、太一郎は千早物産の西東京支店で働かせて貰えることになった。

冷蔵・冷凍倉庫の商品管理業務と言えば聞こえは良いが……。早く言えば、商品を倉庫からトラックに積み込む作業である。

隆太郎は妻を第二子妊娠中に失った。当時、万里子は僅か四歳。彼女が産まれる時には大したトラブルもなく。その為、隆太郎は妻の身を案じることを忘れていた。父親として、家族が増えることへの責任しか頭になかったという。

何としても無事に子供を産ませてやりたい。

太一郎のその言葉は、隆太郎の琴線に触れた。万里子の父は、太一郎の為ではなく、母子の為に力になろうと約束してくれたのだ。た。

その時に現在の太一郎の収入を聞き、「妻子を養う男の収入じゃない」と憤慨し……。

「もう、金の心配はしなくていい。大きな会社に雇って貰えたから。しばらく伊勢崎で働くけど……その子が産まれたら、ちゃんと本名を名乗ろうと思う」

太一郎は奈那子を畳の上に下ろしながら、真面目な顔で言った。それを見て、奈那子の笑顔が急に消える。どうやら、何か勘違いしたらしい。

「そう……ですね。産まれたらもう、太一郎さんにご迷惑はお掛けしませんから……わたし、子供と一緒に」

「いや、そうじゃねえって……」

太一郎が息を吸い、一気に言葉にしようとした瞬間、彼の携帯が鳴った。太一郎は大きく息を吐くと、「悪い……」軽く手を上げて窓際に寄り携帯に出る。

出た後で、郁美かも知れない、と後悔したが

『太一郎！？ 助けて、太一郎！ 助けてっ！』

携帯から聞こえたのは、緊迫した茜の声であった。

(16) 邪心の網(前書き)

少しでも暴力的な表現があります。苦手な方はご注意ください。

(16) 邪心の網

「辞めるう？ 会社を辞めるって言ったの？ アノ男からっ」
『そうそう。もういいじゃんか、郁美ちゃん。女子高生に手エ出して、ヤバイからって逃げるのかもよ。もう、放っておいても平気だつて。オレらのことも、一々オヤジに言いつけたりしないよ』

電話口から流れる等の軟弱な声に、郁美は怒りが沸き上がってくる。

平日の午後、六十歳をとうに回った夫はもちろん仕事だ。世間は盆休みでも、市の指定業者である名村産業に休みはない。

郁美は自営業の夫を持ったことに感謝していた。そうでなければ、昼過ぎまでのんびり寝てはられないだろう。足の指にトウセパレーターを嵌め、黒にシルバークラメ入りのペディキュアを塗りながら…… 郁美は怒りの原因について考えていた。

太一郎は一体、何処から入院費用を用立てたのか。進退窮まった太一郎は、ほぼ百パーセント、郁美に降参して来る予定だった。それが「いつまで待たせる気？」と電話をした彼女に、「一生待つてろ」と太一郎は答えたのだ。

手元にある資料では、太一郎は等と大差ない放蕩息子と書かれてある。どんな女の誘いも断わらないセックス好きで……しかも、睡眠薬で処女を喰い物にする要注意人物だ、と。とても、清掃会社で真面目に働く男と同一人物とは思えない。

「ねえ、郁美ちゃん。聞いてる？」

「聞いてるわよっ！ とにかくっ。アノ男を辞めさせないで！ 何とか言つて引き止めなさい」

『無理だよ、そんなの。事務の人間が退職願いを受理したつてさ。オレにはよく判んないし……』

郁美自身、太一郎に特別な感情がある訳ではない。ただ久しぶりに、セックスで楽しめると期待しただけだ。あの、自分に反抗的な……若い男の野獣のような体を、思う存分堪能するつもりだったのに。想像するだけで郁美の女の部分が疼いた。

電話の向こうでは等が郁美の名を呼んでいる。仕方ない、今夜はこの男で間に合わせよう。どうせ、金さえ払えば十代の少年だって買えるのだ。

ただ……藤原の金は魅力的だった。あの太一郎をセックスで骨抜きに出来たら、彼を通じて少しでもその恩恵に与りたいと思っていた。だが別に、郁美が損をしたわけではない。

しかし、彼女を？ ババア？ と呼び、？ メス豚？ と蔑んだ。あのツケだけは何としても払わせてやりたい。そうでなければ、郁美の腹の虫が治まらないのだ。

郁美は一つのことを思い浮かべ、途端に声色が変わった。

「じゃあ、ねえ。等さんをお願いがあるの。聞いてくれる？」

……郁美は笑いを堪えながら電話を切った。等は大したことは出来ない男だが、これくらいなら失敗はしないだろう。

郁美が声を立てて笑おうとした瞬間、置いたばかりの電話機が鳴り始めたのである。面倒くさそうに受話器を取った郁美だったが、少しすると彼女の表情が目に見えて変わって行き……。

くわくわくわくわく

「佐伯！ 佐伯、どこだ！？ 居ないのか？ 返事しろっ」

夏休み中でも大学構内はそれなりに学生がいる。スポーツ系の部に所属していたり、理系だと実験もある。それ以外にサークル活動もあれば、当然、就職活動の学生もいた。だが、さすがにお盆の期間中は事務局が休みになる為、無断で出入りは出来なくなる。

その大学の構内に、太一郎はいた。彼は清掃会社の社員として、入退出の許可証を持っている。退職願いを出し、今日は休みを取っているが、八月一杯は真面目に働く予定だ。その間に、後輩・北脇を説得し、これ以上茜を巻き込まないように頼むつもりだった。

茜の電話は、『北脇さんから大学に呼び出されたの……今、大学の……最初にドリンクを買ってくれた自販機の前に』 それだけ言って切れたのだ。

茜が何故、北脇の呼び出しに応じたのか。北脇が茜に何をするつもりなのか。太一郎にはサッパリ判らない。だが、放っていく訳にはいかなかった。

太一郎は、仕事先でトラブルがあった、とだけ奈那子に告げ、アパートを飛び出したのである。

「北脇、何処かで見てるのか！？ 出て来いよ！ 佐伯を巻き込むなっ！」

そこは茜と再会した日、何処となく怯えた彼女にスポーツドリンク

クを買って渡した場所だった。茜は太一郎の頬を拳で殴り、「許してあげてもいい」と初めて笑顔を見せてくれた。

「クソッ！」

足下のゴミ箱を思い切り蹴飛ばす。鉄製のゴミ箱は備え付けで……太一郎の足が痛いだけだった。

直後、自販機の上で携帯が鳴った。

太一郎が駆け寄り手に取ると、それは茜の携帯電話だ。そして番号はおそらく……。

「北脇か？」

『随分早く来たんですね、先輩』

やはり見える位置にいるのだろう。太一郎がそれを伝えると、北脇はさも楽しそうに笑った。

『今のあんたが忍び込むとは思えないからな。警備室に電話したら一発で教えてくれたぜ』

「だったら……今、何処にいるんだ？ 用があるのは俺だろう？ すぐに行くから……佐伯は放してやれ」

太一郎がそう言った後、携帯電話の向こうに微妙な沈黙が流れた。やがて小さな声が聞こえ……太一郎は耳を澄ませるが、話の内容までは判らない。もう一度、北脇を説得しようとした瞬間、頬を叩く音と女性の悲鳴が聞こえた！

『……何するのよっ！ 太一郎、来ちゃダ……キャ！』

『もういいっ！ 黙ってるっ！』

もう一度同じ音が聞こえ 「北脇っ！ 北脇、止める！ 頼むから止めてくれ、北脇っ！」 茜の携帯電話に向かって太一郎は叫んだ。

『煩い女だな、コイツ。往生際が悪いっつうか』

数秒後、携帯から北脇の声が流れた。茜の声は聞こえない。

「佐伯に手を出すなっ！ いいか北脇……彼女に何かしたらお前はお終いだ。憎いなら俺をやれ！ 殴るなり何なり好きにしる。佐伯茜は無関係なんだ。絶対に傷つけんじゃねえ！」

太一郎は携帯を握り締め怒鳴った。

だが、北脇は余裕の声で太一郎に答える。

『覚えてるだろ、先輩？ どうでもいい女を抱く時に使ってた豊島区のラブホテル。そこから割りと近いから、二十分もあつたら来れるよな？』

「豊島区のドコだ！ ホテルの名前を言えっ！」

『さあ、なんてったっけな？ 部屋番号は二〇二だから。早く来ないと……最近の携帯って性能良いからねえ。ああ、言わなくても知ってるか 藤原センパイ』

電話はそのまま切れたのだった。

池袋は都内でも有数のラブホテル密集地だ。豊島区内のラブホテルなら、ざっと百件は超えるだろう。太一郎の額から噴き出した汗は、顔の輪郭を伝って顎から滴り落ちる。

北脇は太一郎と違って頭が良い。両親を大事にしている、父親の為に太一郎の横暴に耐えたくらいだ。そんな奴が人生を棒に振るよな、警察沙汰を起こすはずがない。

茜を使って、太一郎を罠に嵌めようとしている そう考えるのが妥当だ。いや、そうに違いない。

(頼むから……そうであってくれ)

太一郎は強く念じると、心当たりの場所に向かって全力で走り出した。

(17) 落とし穴(前書き)

直接の描写はありませんが、陵辱的なものを思わせる表現があります。苦手な方はご注意ください。

(17) 落とし穴

池袋の北口、ラブホテルが集中する辺りに到着すると、太一郎は二〇二号室を探して回った。

だが、平日の昼間からそうそう埋まっているものでもなく……。三件目の前に立った時、再び茜の携帯電話が鳴ったのである。

『随分早いじゃん。鍵、開いてるからさ。まあ、しっかり慰めてやんなよ』

北脇の言葉に、太一郎は汗を拭うのも忘れ、息を呑んだ。

そこは太一郎も利用したことのあるホテルだった。

誰とだったか、何度使ったかまでは覚えていない。細長いビルで入り口は狭いが、夜になると表はやけに煌びやかだ。だが一歩入ると、お世辞にも立派とは言い難い内装である。それが昼間となれば……表もお粗末の一言に尽きた。

その味気ないホテルの中に入り、正面のパネルボードに目をやる。二〇二号室のライトは消え、使用中であることを示していた。

こんな時間、こんなホテルに男が独りで入って来たのだ。当然、フロントは監視カメラを見ながら訝しんでいることだろう。だが、余程のことがなければ、出て来て声を掛ける様な真似はしない。

太一郎はエレベーターに乗り、二階で降りる。そこは一階以上に飾り気のない空間が広がっていた。左奥の突き当たり二〇一のプレートが、二〇二はその手前の部屋だ。

部屋の前まで行き、太一郎は驚いた。まるで清掃中のようにドア

バーが挟まっている。こういったホテルは精算が済むまで鍵が開かないようになっていたはずだが……。太一郎は不審に思いつつ、ドアをノックした。

「北脇、居るのか？ 佐伯、居たら返事してくれ」

太一郎は出来る限り小さな声で尋ねる。

同時に、茜の携帯から北脇に掛け直すがコールしない。どうやら電源を切ったらしい。

いきなり飛び込んで赤の他人が居た時は……。場所が場所だけに、洒落にならないだろう。その反面、昼間からこんな所にしけ込む連中が警察沙汰にするとも思えなかった。

太一郎はドアのノブに手を掛け、ゆっくりと回す。

これが太一郎を嵌める罠ならそれでいい。ヤバイ連中が出て来て、袋叩きにされたとしても……。傷ついた茜の姿を見るくらいなら、いつそ殺されたほうがマシであろう。

室内は静寂に包まれている。オフホワイトの何の変哲もない壁が続き、床はくすんだブルーだ。かつては爽やかな水色だったのかも知れないが、今は跡形もなかった。左側に二つのドアが おそらくトイレとバスルームだろう。狭く短い廊下を進むと、右手に視界が広がった。奥にダブルサイズのベッドがあり、手前にミニソファセットが置かれている。壁にはテレビが、その下に冷蔵庫とアダルトグッズに自動販売機があった。

パッと見た感じでは誰も居ないように思え……。その直後、太一郎はベッドの反対側に座り込む人影を見つけたのである。

「さ、えき？」

一歩ベッドに近寄った時、太一郎は床に落ちている白い塊を蹴飛ばした。拾い上げた瞬間、それが丸められた女性用の下着であることに気付き……太一郎は心臓が耳の横に移動したような錯覚に囚われる。バクバクと音を立て、今にも爆発しそうだ。

茜はベッドと壁の隙間に座っていた。膝を抱え込み、顔を伏せたまま……何かに怯えた様子だ。

「さえ……茜……頼むよ、何でもない、大丈夫だと言ってくれ」

太一郎は心から願った。

そして、茜が顔を上げた瞬間、太一郎の中に底知れぬ怒りが湧き上がる。

(北脇の野郎！俺がヤツを甘く見たばかりに)

太一郎は自分の責任を痛感した。だが、太一郎には奈那子がいる。茜にも借りがあるとはいえ、二人を守ろうなんて土台無理な話だ。

たとえ……茜と一緒にいる時の太一郎が、僅かな時間でも贖罪を忘れられたとしても……。それを求めることは、太一郎が自らに許した選択肢にはなかった。

「太一郎の……せいだよ」

茜は太一郎の方は決して見ようとせず、両手で自分の肩を抱き締めたまま言葉を続ける。

「あの……北脇って男に……レイプされたのは太一郎のせいなんだからっ」

そう叫ぶと再び顔を伏せ、小さな体を余計に小さくして……肩を

震わせた。

茜の頬は赤くなり、唇の端が切れていた。携帯電話から聞こえた音と悲鳴が太一郎の脳裏に甦る。彼は右の拳を握り締め、思い切り壁を叩いた。壁は微かに揺れ、天井からパラパラと埃が舞い落ち……。

太一郎は茜に近づこうとして躊躇した。

オフホワイトのキャミソールは両方の肩紐がずれている。そして、しっかりと成熟した胸元には指の形をした痣が見え……。痕が残るほど、北脇が茜の胸を掴んだ証拠であろう。そんな彼女に何か掛けやりたくても、手元には何もない。

さらには、茜が膝を立てているのも問題だ。デニム地のミニスカートから伸びる生足もさることながら、ギリギリまで捲れ上がった裾から……奥の鬚りが目に入ってしまっているのである。

「クツ……ソオ……」

目を閉じた瞬間、太一郎は眩暈を覚え、ベッドの端にドサツと座り込んだ。血管が切れてしまいそうなほど、頭の中が沸騰している。

（俺が……まともになるうなんてしなきゃ良かったのか？ 救われようとか……普通の人生を送りたいとか……そんなことを考えたから）

不覚にも目頭が熱くなってくる。

太一郎は両手で顔を覆うと、しばらくの間、身動きも出来なかった。

「た、いちろう……ごめん。太一郎のせいだなんて言って、ごめんなさい。怒らないで……私」

「お前が謝るなよ。全部俺のせいだ。中途半端に関わった俺の」「中途半端なんかじゃないよ。私ที่บ้านにも店にも居辛くて……会いに行ったら、話を聞いてくれたじゃない。私、ずっと家のことで一所懸命だったから……友達も彼氏もいなくて。だから、太一郎が引け目に思ってるのをいいことに、ワガママ言って付き纏っただけなの。太一郎のせいじゃないから……私……私」

茜は立ち上がり、太一郎の隣に座る。

そんな彼女の腕を掴み、太一郎は真剣な眼差しで言った。

「茜、今すぐに病院に行こう」

「ヤダ！」

「取り返しのつかないことになるんだぞ！」

「イヤだってば。絶対に行かないっ！」

「……頼む。俺と一緒に行くから、頼むから言う通りにしてくれよ。頼む」

今度は太一郎が床に膝をつく。

ベッドに座った茜はきつく唇を噛み締めたまま、「それって……私が汚いってこと？」そんな言葉をポツリと呟いた。

「バカ野郎！ そんなこと言ってんじゃねえっ」

「じゃあ、抱いて！ そうじゃないって言うなら、私のことを抱いて。あの男を忘れさせてよっ！」

この部屋に入り、初めて茜は太一郎の目を見た。その瞳に、太一郎は心を捕まれたのだ。去年とも、一ヶ月前とも違う。いつの間に、茜はこんな女の目をするようになったのだろう。

「お願い……太一郎。傍にいて、何処にも行かないで……同情でもいいから、私を抱いて」

茜の頬を伝う涙に太一郎は……。

(18) 恋の犯した罪

「……なあ、マジで言ってるのか？ 去年は訴えてやるって言ってくらい、俺のこと嫌ってたじゃねえか」

「女心は……色々変わるんだってば。それとも……バージンじゃないとイヤ？」

それは、太一郎にとつては厳しい問い掛けである。

しかも泣いて縋られたら……胸に掲げた奈那子の顔から、思わず、目を逸らしてしまいそうだ。

「そんなんじゃねえよ」

「だったら……」

「だから、女房が居るんだって」

「嘘！ 結婚してないって聞いたものっ」

その言葉に、太一郎の意識は危うい場所から引き戻された。

彼は身を乗り出し、茜の両肩を掴んで尋ねる。

「誰から聞いたんだっ？」

「社長……夫人って言った。太一郎の働いてる会社の……三十歳くらいで派手な感じの女の人」

郁美だ。本当は三十代半ばだが、間違いないだろう。

茜を問い詰めると、太一郎の結婚は正式なものではない、と教えてくれたらしい。子供が産まれるのに入籍していないと言うことは、結婚する気がないか、太一郎の子供ではないのかも知れない、と。

太一郎は、本当は茜が好きなのかも……。そんな風に言われ、茜

は郁美に気を許してしまう。質問されるままに、茜の目で見た太郎の立場も色々話してしまったようだ。道理で、郁美が藤原から金には取れないとアツサリ引いたはずである。

太一郎は深呼吸を一つし、覚悟を決めた。

「茜……目を瞑れ」

「え？ あ、あのっ」

「いいから。俺が好きなら言う通りにしろよ」

茜は言われたまま目をギュツと閉じる。

太一郎が片膝をベッドについた時、ベッドは傾き、スプリングが軋んだ。そのまま、太一郎は茜の身体を掬い上げるように抱きかかえた。

「キャツ！」

茜は小さく悲鳴を上げる。

「病院まで抱いて行ってやるから……暴れるな」

「ヤダッ、下ろして！ 下ろしてっば」

茜の抗議を無視して、太一郎は部屋の出入り口に向かって歩く。

「違うの……されてないからっ！ レイプされてないから下ろして……！」

太一郎はビククリして茜を床の上にゆっくりと下ろしたのだった。

くわくわくわくわく

茜は郁美に言われたことを確かめたかった。

そんな時、北脇から電話があつたのだ。太一郎の気持ちを、茜の方に向けられるチャンスだと言われた。茜が助けてを求めて、来て

くれるかどうか。それだけでも太一郎の心を知ることが出来る。

北脇にすれば、本当に女性を攫ったら犯罪になってしまう。けど、茜とお互いに協力し合う形なら……。太一郎に一泡吹かせてやりたい、そんな理屈で北脇は茜を説得したのだった。

茜自身、馬鹿なことをしているのはよく判っている。しかし、この時の彼女は、初めて芽生えた感情に心を奪われてしまったのだ。？相手の気持ち？より？自分の気持ち？しか見えない。愛と恋の境界線上に彼女は立っていた。

「今、何て言った？」

「……レ、イプ……されなかったの。されたって言ったら……太一郎が同情してくれるかもって……」

怒鳴られるかと思ひ、茜は途切れ途切れ、どうにか声を出した。でも太一郎は違ったのだ。彼は壁にもたれて大きく息を吐いた。両手を膝につき、心から安堵したような表情である。

「ごめん、ごめん太一郎……あの」

「良かった。ほんつとーに良かった。ホントに」

そう言った太一郎の瞳には、薄っすらと涙が浮かんでいる。

茜は後ろめたさに、その場から逃げ出したい心境に駆られた。

「面白くねーの。センパイ、えらく腰抜けになったもんですね」

入り口のドアが開き、入ってきたのは北脇だ。

その北脇を見た瞬間、太一郎は飛び掛った。胸倉を掴み、今にも殴りそうだ。

「いいぜ、殴つても。ホラホラ、殴れよ」
「隠しカメラか？ どつから撮つてんだよ。確か…… ココはお前のダチの実家だったよな」

北脇の表情が変わつたのはその時だ。

「知つてたのか？」

「思い出したんだ。俺が茜に手を出すのを、カメラ越しに見てた訳か？ それをネタに俺を脅すか。それとも、思い切つてマスコミに売るつもりか？ その為に茜を巻き込むなんて」

「巻き込む？」

北脇の声のトーンが微妙に変わった。

茜の心臓もドキンとする。太一郎は茜が巻き込まれたと思つていいのだ。自分のせいで襲われて、でもレイプはされなかったと聞いて、ホツとしている。もし、SOSの電話そのものが嘘だとバレたら……。

「なんだ、茜ちゃん。ホントのことは言えなかつたんだあ」

「やめてっ！」

「俺にレイプされたつて泣きついたら、女房面して居座つてる女から奪えるかも、つて言つてたよな？」

「違う！ そんなこと言つてないっ！ 私はただ……ただ……」

北脇は太一郎の隙を突いて拘束から逃れた。そして止める間もなく、太一郎を呼び出す為に吐いた茜の嘘を、ペラペラと話して聞かせたのだ。

茜にはもう、太一郎の顔を見ることも出来ない。きっと軽蔑しているだろう。

ただ……ただ茜は、魂まで入れ替わつたような太一郎に魅せられ

ただけだ。そんな太一郎の傍に居て、自分も変わって行きたいと思っただけであった。なのに、いきなり決まった女性が居ると聞かされ……茜は悔しかったのだ。太一郎の良さに、自分より先に気付いた女性がいることに。

だが、それは郁美にも責任があった。茜が消そうと必死になった恋の炎を、彼女が横から煽ぎ立てたのだから。

「ホント、馬鹿なガキだよな……」

北脇がそう言った瞬間、今度は襟首を掴まれて壁に叩き付けられた。

太一郎である。

「馬鹿なガキはお前だろうが、北脇」

「なんだと？ 一発でも殴ってみろよ、すぐに警察に駆け込んで」

「自首でもすんのか？」

「何？」

「お前が茜の携帯に掛けた電話、全部録音してたらどうなると思う？」

茜が警察に行き、お前にレイプされそうになったと訴えたら？」

「そ、そんなこと……その女も承知で……第一、お前の過去を俺が警察で話したら……」

北脇の声が震え始めた時、太一郎は肘で彼の喉元をグツと押さえた。

「いいぜ。俺にはもう失くすものはねえんだ。裁判沙汰やマスコミの餌食になった所で、トイレ掃除の仕事くらいは出来るさ。ムシヨで働くのもそう変わんねえだろ。お前も仲良く一緒に堕ちようぜ。なあ後輩」

茜は太一郎の表情と声に驚いた。

それは去年、茜を殴り、組み伏せた時と同じであった。北脇もそう感じたのだろう。一言もなく、俯いたまま震えている。

太一郎は北脇から手を離すと、今度は茜を見た。

「帰るぞ。来い」

同時に太一郎は茜の手首を掴み、強引に引っ張ったのだった。

「い、いたって。放して……太一郎」

ラブホテルから出ると、池袋の駅に向かって太一郎はズンズン歩いて行く。

茜が抵抗すると、太一郎は彼女の手をパツと放した。そして、いきなり怒鳴ったのだ。

「この……バカヤロウがつ！」

「わ、わかつてる、でも」

「判つてねえっ！ あんな場所にノコノコついて行きやがつて。男をなめんなよ！ 思い通りにいかなかったら、奴はお前を犯すに決まってるだろうがつ！？ 理性なんかすっ飛ばすのが男なんだよ！」

「ごめんなさい……謝るから……だから」

「謝らなくていい。もう、二度と電話して来るな」

「太一郎……」

「俺は奈那子と結婚する。ガキに振り回されるのはもうゴメンだ」

太一郎は茜に携帯を放り投げ、クルリと背中を向け歩き出した。

携帯に北脇との会話など録音されておらず、あの台詞は太一郎のハツタリだったのだ。同時に、太一郎がどれほど茜の身を案じ、必死で助けに来てくれたか……。怒ってあの場に茜を置き去りにしな

かったのも、逆切れした北脇に茜が傷つけられることを心配したからだろう。

もう、好きな人の背中を追いかけることは出来ない。人の優しさや思いやりを試したことを、心から後悔する茜であった。

(19) 危険な使者

電車の揺れに身を任せながら……太一郎は窓の外を眺めた。

外はもう真つ暗だ。こんなに遅くなる予定ではなかったのに、久しぶりに酒を飲んだせいで、酔いを醒ますのに思った以上の時間が掛かってしまった。

北脇のやり方は卑劣で、どうにも怒りが納まらない。迂闊にもそれに乗った茜は……馬鹿にもほどがあるだろう。十八歳の女子高生が、太一郎のような男を捉まえる為に、簡単に差し出すようなものじゃない。一連の騒動が芝居だと聞き、太一郎は心底安堵したのである。

だが一瞬、太一郎の胸にも欲情の火が点いた。……北脇のような男に奪われるくらいなら、と。

ほんの僅かに過ぎった男の欲望が、太一郎を自己嫌悪に陥れた。奈那子に申し訳なく、つい酒に手を出してしまったのである。しかし、何故飲んだのか……それを彼女に説明することも苦しい。結果、缶ビール一本に手を出したばかりに、太一郎は池袋から高田馬場まで歩き、その後数時間を駅のベンチで過ごす羽目になったのだ。

つくづく、自分は豪胆と言われた祖父とは似ていない。

考えてみれば、母の尚子自身が性格は父親似ではなかった気がする。太一郎の中から藤原の血を見つけようと、母は懸命に隔世遺伝だと主張していた。なまじ、見た目が祖父に似ていたせいかも知れない。母も妄想から抜け出せなくなったのだらう。

もし祖父に会えるなら、本当に太一郎を自分の後継者にするつもりだったのか聞いてみたい。

先代社長である祖父・藤原高德は他人の人生を思うままに動かし、狂わせた張本人だ。それでいて自分が不幸だと思い、満たされぬまま死んだのだとしたら……。

(爺さんに似てなくて良かったぜ)

奈那子を？裏切りそうになった？のど？裏切った？のは違う。

そんなことをブツブツ言いながら、太一郎は駅の改札を抜け、アパートに向かうのだった。

くくくくくくくく

角を曲がった瞬間、太一郎の目に黒い塊が飛び込んで来た。狭い路地に栓をするように止められた、真っ黒のメルセデスベンツクラスである。フルスモークで見るからに怪しい車だ。それが、太一郎たちの住むアパートの前に停まっていた。

太一郎の鼓動は瞬く間に激しく打ち始める。

彼が目を凝らしたその時、階段から人が下りて来た。その中に、二人の男に挟まれた奈那子の姿が見える。太一郎は脊髄反射のように走り出していた。

「奈那子っ！ お前ら何やってんだ！？ 俺の女房を放せよっ！」

「あ……だめ、来ないでっ」

今にも泣きそうな奈那子の声を聞いた瞬間、太一郎は手近な一人を殴り倒していた。

男は車に乗った運転手も含め四人。そのうちの一人は、見たことがあるような比較的貧弱な三十代の男だ。奈那子の左右にいる男はどちらも二十代である。格闘家かボディガードのようにも見える、屈強な大男たちだった。

だが、体格だけなら太一郎も負けてはいない。

一人目を殴り倒して奈那子の手を取り、もう一人と思った時男の膝が太一郎の腹部に入っていた。痛みと共に息が詰まる。次の瞬間、男の拳が太一郎の顎を突き上げた。

「いやっ！ やめて。止めさせて白石さん。た……彼を傷つけないで！」

「お嬢様ともあるう方が、こんな薄汚い男と。先生がどれほどお探しになったか、少しは考えてみて下さい」

「お父様は泉沢との縁を切るために、わたしを探しているだけでしよう？ この方は関係ありません！ お願いだからもう止めてっ」

地面に倒れながら、太一郎は奈那子が口にした白石の名を思い出していた。

（たしか……桐生の私設秘書が白石……）

公設秘書とは違い、主にこの白石が桐生代議士のプライベート問題を処理すると聞いたことがある。太一郎が念書にサインした時も立ち会ったのは桐生ではなく白石だった。会ったのはその一度だけだが、白石のいけ好かない顔を太一郎は覚えていた。

そして太一郎を殴った男が奈那子の体に触れ、白石から引き離すとベンツに押し込もうとする。太一郎は渾身の力で立ち上がり、声を限りに怒鳴ったが。

「奈那子に触るんじゃ　グウッ！」

衝撃は突然だった。

最初に太一郎が殴り倒した男が立ち上がり、脇腹にスタンガンを押してたのだ。悲鳴を上げそうになった奈那子の口を、もう一人の男が塞ぐ。白石は「おいおい、あまりそう言った物を使うんじゃない」と、顔を顰めて言うだけである。

(俺は結局……奈那子ひとり助けられない……)

落ちかけた意識の中、「火事だーっ！ 火事だ、燃えてるぞ、早く出て来てくれ！ 火事だぞ！」

どこか聞き覚えのある声が、太一郎の脳裏を掠め……。

くくくくくくくく

「太一郎さんにもしものことがあったら……わたし」

「大丈夫ですよ、奥さん。骨はやってないし、すぐに意識も戻りますよ」

「でも……」

「な、なこ？ あの連中は……」

目が開くより先に、声が耳に入ってきた。

奈那子に大丈夫だと言ってやりたいが、どうもすぐには体が動かず、声も出ない。その間にもう独りの声の主に見当がついた。しばらくして、重い瞼が開いたと同時に声が出たのだった。

「太一郎さん！ 良かった……良かった。ごめんなさい、わたしの

せいで……本当にごめんなさい」

「お前、連れて行かれなかったのか？ 伊丹さんが助けてくれたんですか？」

太一郎が目を覚ましたのは、病院ではなくアパートの部屋だった。どうやら、布団の上に寝かされているらしい。涙をポロポロ流しながら覗き込んでいる奈那子の隣で、太一郎を見下ろしているのは元同僚・伊丹清であった。

あの「火事だ！」と言う声も伊丹のように思う。太一郎がそのことを尋ねると「人が襲われてるから助けてくれ」と叫ぶと、警戒して誰も出て来ない可能性がある。火事なら逃げるか、火を消そうと考え、大概の人間が飛び出してくるそうだ。

「さすがに人前で誘拐は不味いと思ったんだろうな。連中、ベンツに飛び乗って逃げてったぞ」

伊丹は無骨な手で頬を撫でながら笑う。

奈那子は笑う所ではなかったが……。太一郎の意識が戻りホツとしたのだらう、泣き笑いの顔を浮かべたのであった。

今日の夕方、伊丹が仕事を終え会社に戻った時のこと。

妙な雰囲気をした三人の男が会社から出てくる所に遭遇した。敷地に入つてすぐ、邪魔な場所にエンジンを掛けたまま停車しているベンツの主だとすぐに判る。若い連中は単なる金持ちだと思つたようだ。だが伊丹には、その男たちが堅気の商売ではないとピンと来たらしい。

更に、滅多にいない社長夫人の郁美が、事務室の奥にある社長室から出て来た。何か後ろ暗いところがあるのか、伊丹に愛想笑いを浮かべ……。「おつかれさま」などと言う。

「社長は部屋ですか？」

伊丹は社長に用事があるふりをして、社長室に足を向けた。

「まだ役所よ。もう戻って来るんじゃないかしら？」

「でも、お客さんがいらしてたんじゃない……」

「代わりにお話を聞いてたのよ。大したことじゃなかったわ」

そう言つと、そそくさとファイルを引き出しに押し込み、事務室から出て行つた。

社長夫人の退室を見送つた後、女性事務員は不満を口にしながら、折れ曲がつたファイルを引っ張り出した。チラツと見えたファイルは半年以内に辞めた従業員のもので……。そこには『伊勢崎太一郎』の文字が見えたのである。

(19) 危険な使者(後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

この度、本編と番外編を分けることにしました。

本編のほうで連載中の番外編は、次の更新時に削除します。
以降はこちらでのみ、更新していきます。

引き続き、よろしくお願い致します m () () m

(20) 切ない事情

伊丹の話聞き、太一郎は横になつたまま目を閉じた。

さすがに忍耐強くなつた彼だが、次に郁美の顔を見た時、我慢出来るかどうか自信がない。

「なんか、困つてるみたいだな」

奈那子が席を立つたのを見計らい、伊丹は声を潜めて言う。

「お前……ヤバイ男の娘にでも手エ出したのか？」

どうやら伊丹は、奈那子の父親を暴力団関係者と勘違いしているようだ。

だが、このやり口を見ると大差ないと言わざるを得ない。しかも公的機関に影響力がある分、始末に負えない。

今日は助かった。だが、必ずまたやつて来るだろう。伊丹もそれを心配して、逃げた方がいいんじゃないか、と言う。

「悪いな……俺が寮住まいでなきゃ、うちに来ていつて言つんだが」
当座の足しに、と伊丹は財布からあるだけの金を引き抜こうとする。太一郎はそれを慌てて止め……。伊丹の思いやりにも、心から感謝したのだった。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊

奈那子が太一郎の子供を妊娠して、中絶を余儀なくされたのは昨年夏。奈那子の父・桐生代議士はそれをひた隠しにしようとした。

元々が、桐生は政治とは無縁の家に生まれた。

その為、彼の後援・支持者は全てが桐生……妻・美代子の父親に繋がった。年齢八十を越えながら、引退後も政界に影響力を持つ義父。桐生代議士は娘を利用して、義父を越えるルートを開拓することに躍起になっていた。

その足がかりが、現職大臣を父親に持つ泉沢清二と奈那子の結婚である。

内々での婚約が整ったのは奈那子が高校を卒業する前だった。当時は清二もまだ二十代半ば、どちらかと言えば、桐生が積極的に泉沢との縁を欲しがっていた。奈那子の大学卒業後、と言われ、渋々承諾したのである。

その後、奈那子と太一郎の一件は、当然のように泉沢の耳にも入る。

婚約解消を覚悟した桐生であつたが……。今年に入り、急遽、卒業後の結婚予定を早めたいと言われたのだ。『必要なのは家同士の結びつき』疵物となつた娘の処遇に困っていた桐生は、すぐに了承した。

ところが、肝心の奈那子が清二との結婚を断固拒否する。彼女は太一郎の「必ず迎えに行くから」という言葉を信じていた。

しかし、桐生はそんな娘の寝室に、強引に清二を送り込んだのだ。つた。

奈那子は抵抗したが……………。

その二日後のことである。

なんと、清二の父・泉沢大臣の汚職疑惑が一気に浮上したのだ。

贈賄側の企業責任者が逮捕され、数日中に泉沢の私設秘書である長男も逮捕された。そして、泉沢本人にも捜査の手が及んで来て……。

予てから、泉沢と非常に深い繋がりを言われてきたのが桐生代議士だった。しかも桐生自身、その汚職問題に一枚絡んでいたのだ。だが、桐生は検察関係に強力なコネがあり、既に逃げ切る算段が出来ていた。

泉沢の起訴は時間の問題　そんな報道が出始めた時、泉沢は桐生に救済を求めて来る。だが、桐生は泉沢との親密な関係を一切否定。その時に、奈那子と泉沢の次男・清二との婚約も否定したのだ。

婚約発表前で良かったと安堵する桐生の耳に、妻が囁いたのが？
奈那子の妊娠？である。

奈那子と清二の関係はたった一度だ。まさか、そんな事態になるとは思ってもせぬ……。妊娠を知れば、泉沢は嬉々として結婚を進めるだろう。婚約の証拠が奈那子の中に存在するのだから当然である。実のところ、泉沢は桐生そのものより、桐生の義父の力を期待していた。

縁戚となり、匿って欲しいと望んでいる。仮に泉沢自身が第一線から退いたとしても、息子に地盤を継がせ、まだまだ金の傍に居たいと思っているのは明らかだった。

そしてそれは、桐生にとっても同じこと。

贈収賄疑惑に巻き込まれる危険も然る事ながら、一番恐ろしいのは義父の怒りであろう。

今度の件で、泉沢との金に塗れた関係を義父に知られてしまったのだ。拳げ句、ろくでもない相手を娘婿に選んだと叱られることになった。

その結果、奈那子の妊娠を知らぬ義父は、可愛い孫娘の婿は自分が選ぶと宣言したのである。

義父の言葉に逆らえない桐生は、大慌てで奈那子に中絶を命令した。しかし……。

「中絶はもう嫌です！ その為なら、太一郎さまのことは諦めます。わたし……泉沢さまに嫁ぎます」

父の思惑を知らない奈那子はそんなことを言い始めたのである。それが清二の耳に入れば、二人の結婚を阻止する術は桐生にはない。もしそうなれば、義父は失態を犯した娘婿より、血の繋がった孫娘を選ぶであろう。更には、奈那子が男の子を産んだ時……桐生はこの家を追い出されるに違いない。清二を婿にして、最終的には曾孫に全てを残す。義父がそう考えてもおかしくはないのだ。

奈那子が家を出たのはそんな時だった。

義父にはその事実を伝えず、「騒動が収まるまで、奈那子を海外に行かせた」と釈明した。そして、私設秘書を使い、極秘裏に奈那子の行方を捜させたのである。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊　く

「太一郎さん……わたし、泉沢さまの許へ行くほうがいいのでしょうか？ この子にとって、実の父になる訳ですから……」

太一郎が動けるようになり、伊丹も引き上げた。

二人きりになった途端、奈那子がそんなことを言い出したのである。

「お前がそうしたいなら……俺に止める資格なんてねえけど」
「わたしは……わたしは……」

親に言われてか、それとも保身の為か……どちらにせよ、太一郎には清二が奈那子を愛しているとは思えなかった。婚約していたとはいえ、強引に奈那子を奪い、それきりだと言う。

政治の世界は複雑で、太一郎には何が常識だか計り知れない。だが、もし桐生代議士と泉沢が再び手を組んだら……。或いは、清二側も桐生との関係を断ちたいと思つたら……。奈那子の子供は誰にも望まれず、闇に葬られる可能性だつてある。

同じように奈那子を傷つけた太一郎に、清二を責める資格はない。だが奈那子が望むなら、彼女と子供を守る資格は得られるはずだ。

「あの男、お前の親父さんの秘書だつたよな？」

「はい。白石さんはいつも地元の事務所に詰めている方です。それと……部屋に來られた時、何処の馬の骨とも判らない男と一緒に暮らすなんて……そんな風に仰つてました」

もし、藤原太一郎だと知っていれば、「またあの男と」そう言われるはずだ。

どうやら郁美はその件は言わなかったらしい。だが、太一郎が白石を覚えていたように、すぐに白石も気付くだろう。そうなれば、卓巳に連絡が行くのは目に見えている。

(折角、千早で働ける目処がついたのに……諦めなきやなんねえのか?)

太一郎は思わず悪態を吐きそうになった。だが、そんな様子を奈那子がジツと見つめている。ここで苛立ちを見せれば、奈那子は清二を選ぶかも知れない。

グツと歯を食い縛り、太一郎は泣き言を腹の中に飲み込んだ。

「心配すんな。俺が何とかするから」

「わたし、太一郎さんの傍に居てもいいんですか？ わたしのせいで殴られたって……怒ってないんですか？」

涙ぐむ奈那子の髪を撫で、太一郎は必死で笑顔を作った。

「怒ってねえよ。とりあえず、この家から離れようぜ。落ち着いたら、今度はこつちから動く。 奈那子、お前は清二って野郎のこ

と、好きでも何でもないんだろ？ だったら行くな」

「……わたしが好きなのは太一郎さんだけです」

懸命に微笑む奈那子の姿に、知らず知らず、自分を変えた女神の笑顔と重なる太一郎だった。

(21) 愛と、迷いと

「ほらほら、そんな強火で煮たら駄目だよ。弱火でじっくり、と。

……ジャガイモが煮崩れるからね」

「あ、はい。すみません」

奈那子は慌てて頭を下げる。

「急いで動かないの。台所は狭いんだからね。お腹に包丁やお鍋の取っ手が当たったら大変だよ」

「あ、はい。す……すみません」

太一郎は真剣に謝る奈那子の横顔を見つつ、苦笑いを浮かべた。

「ばあちゃん。風呂場の掃除が終わったぜ。天井のカビも取ったからな」

「ああ、済まないねえ。じゃ、お茶でも淹れるかね。さあ、ナナちゃんもおいで」

？岩井のばあちゃん？太一郎がそう呼んでいた女性である。

太一郎が名村産業で汲み取り業務に従事していた時、周回担当になつていたのが、この岩井ときの家だった。腕を骨折していた彼女に代わり、太一郎がバケツで水を運んでやったのが始まりだ。それ以外にも、休日に出向いて買い物を手伝ったり、タンスの置き場を変えたり、大工仕事までした。かつての太一郎からは考えられない働きぶりである。

その代わりに、ときは太一郎に何度もご飯を食べさせてくれた。そして何より太一郎が欲しかった、「ありがとう」の言葉をたくさんくれた人だった。

ときの家は平屋建てだ。玄関を入るとすぐ右にトイレがある。そのまま三畳程度の台所があり、正面奥のドアが風呂場だ。台所のガラス戸を開けると四畳半の和室、ガラス戸の向こうの開き戸は六畳の和室となる。二つの和室は襖を隔てて繋がっていた。

四畳半の部屋の真ん中に、昔ながらのちゃぶ台があった。手前には小さな食器棚、ガラス戸を挟んで置かれたカラーボックスは電話台である。反対の隅には仏壇があり、二十年前に亡くなったときの夫と、五十年前に五歳で亡くなった息子の位牌が祀られていた。

「見た目がでつかいだけで、怖がりだよねえ、太一ちゃんは。こんな小さいアブラムシを見ただけで、飛んで逃げたんだよ」

ちゃぶ台を囲んで太一郎が座ると、奈那子がお茶を出してくれた。ときもそれを囁りながら、八ヶ月前に会った太一郎のことを、奈那子に面白おかしく話して聞かせる。

「タンスを抱えりゃへっぴり腰だし、釘を打たずに手を打ちまうしねえ」

「いい加減にしろよ、ばあちゃん。奈那子に余計なこと言っんじやねえよ」

「はいはい。こんな可愛い嫁さんがいて、困ってんならさっさとちに来りゃ良かったんだ。ねえ、ナナちゃん」

奈那子が退院した日、彼女の父・桐生に居所を知られた。

二人は夜のうちに荷物を纏め、アパートを出たのだ。しかし、当然のように行く当てはなく……。その夜は近隣のビジネスホテルに泊まった。

翌朝、商店街を通り抜け、駅に向かう太一郎にときが声を掛けたのである。

ときは二人を、親の反対に遭い、駆け落ちしたのだと誤解したよ
うだ。

「子供が産まれたら、きつと嫁さんのご両親も許してくれるよ。そ
れまでうちにおいで。狭いけど、雨露は凌げるさ、ねえ」

太一郎はときの言葉に甘えたのだった。

ときに世話になってちょうど一週間が経つ。

月末には千早物産の家族寮に移るつもりだ。名村の会社には新し
い職場のことは言っておらず、さすがの郁美も気付いてはいないだ
ろう。

桐生の秘書・白石も、奈那子と太一郎が姿を消したことを知れば、
遠くに行ったと思うはずだ。

だが、千早に世話になる前に、卓巳と会う必要がある。桐生経由
で知られる前に、太一郎から話したほうが無難であろう。卓巳なら
先手が打てる。そして卑怯かも知れないが……太一郎は万里子に泣
きつくつもりだった。万里子の口添えがあれば、卓巳も奈那子を桐
生に返せとは言わないはずだ。

ときと奈那子は、祖母と孫娘のように楽しそうに話している。

太一郎と同じく、奈那子も冷たい家庭で育った人間だ。奈那子は
太一郎と再会して初めて、人の優しさと温かさを知ったと言う。今、
声を立てて笑う彼女は、一年前の寂しい笑顔とは比べ物にならない
ほど幸せそうだった。

太一郎はズボンのポケットから小さく畳んだ紙をコソッと取り出
す。そして、誰にも聞こえないように、ため息をついた。

(こつちが先だよなあ……)

踏み切ろうとしては、正体不明の迷いが頭に過る。
？愛？を知る難しさに、逃げたくなる太一郎だった。

くわくわくわくわく

夜十一時頃、太一郎が着替えようとした時、携帯が鳴った。
ときは眠るのが早い。自然に太一郎らも早めに布団に入るようになつたが……。

太一郎は慌てて携帯を掴み、奈那子に目をやった。最近を上向きで眠るのは苦しいらしい。彼女は襖の方を向き……既に寝息を立てているようだ。
ときと奈那子を起こさないように、太一郎は素早く外に出たのだ。
つた。

『太一郎……太一郎？　お願い……すぐに来て！』

茜である。

太一郎は深く息を吐き、苛々した様子で地面を蹴った。

「……お前なあ。掛けてくんなって言っただろう」
『判ってる、でも』
「切るぞ」

『待って、お願い待って。いるの、あの男が。家の中にいるの。い

ま、私ひとりなの。どうしたらいいのかわからない……」

茜の話によると。

彼女の母親は、例の菓子職人・新田と旅行に出たらしい。茜自身は、例のろくでもない計画を思いつき、自宅に残った。彼女の弟妹は、母親が途中で実家に預ける予定だったという。

ところが、中学一年の妹が急に熱を出し、母親も実家に泊まることになったのだ。母親は「友人と旅行に行く」と実家の両親に話したが、まさか相手が男とは言えない。その結果、新田は独りで家に戻って来た。母親は「自宅に戻って連絡を待つ」という新田を引き止めるはずもなく。

しかし新田は、自分の部屋には戻らなかった。茜が独りでいるのを承知で、母親から預かっていた合鍵を使い、部屋に上がり込んで来たと言っただ。

「だったらお前が家を出て、友達のところでも行けよ。それか母親に連絡して、出て行くように言ってもらえ」

『あいつ酔ってるのっ！　なんか凄い酔ってて……リビングで飲んでるのよ。リビング通らないと外に出られない。母さんの携帯にかけるんだけど、電源切ってるのか、田舎だから通じないのか……』

耳元で羽音が聞こえる。熱帯夜の不快感も重なり、太一郎は大袈裟な仕草で虫を払った。

「で、俺が駆けつけたら……今度はお前のヌードでも拝めるわけか？」

『そんな……私、そんなこと』

「茜……ホントにヤバけりゃ俺じゃなくて警察にかけるだろ？　ここからお前の家まで一時間近く掛かるんだぞ。俺が行くまで、そいつは襲わずに待っててくれる訳か？」

『しんじて……くれないの？』

太一郎の心は揺れた。

女子高生の割にしつかりしていて、生意気な口ばかり聞く。怖いもの知らずで、突拍子もないことばかりして……。茜を？ガキ？と呼んだが、太一郎もまだ充分に？ガキ？であった。

『太一郎……お願い、見捨てないで』

「もう、勘弁してくれ」

『……たい』

吐き捨てるように言うと、太一郎は電話を切る。

そして振り返った時、そこに奈那子が立っていたのだった。

(22) 涙のプロポーズ

「な……んだ、奈那子か。ビックリさせんなよ。携帯で起こしちゃまったか？」

「茜さんって仰るんですね。何か困っておいでなんでしょう？ どうぞ、行ってあげて下さい。わたしのことなら、気になさらないで」

まるで浮気がバレた気分だった。太一郎の胸は早鐘を打ち始める。言葉もしどろもどろだ。

逆に奈那子は静かな微笑みを浮かべたまま、悟りきったような声で太一郎に話す。

「い、や、だから……」

「ずっと考えていました、太一郎さんには好きな方がいらっしやるんじゃないか、と。ごめんなさい……わたしがあなたに甘えてしまったせいで、茜さんに辛い思いをさせていたのでしょうか。一年前の約束を気になさっているなら、もうお忘れ下さい。元々は、わたしが一人でどうにかしなければいけないことです。これ以上、あなたを」

「いい加減にしるよっ！」

茜に惹かれる気持ちはあった。

理由は判っているのだ。茜は太一郎の過去の悪行込みで笑い飛ばしてくれる。後ろめたい思いをせずに、茜とは笑い合えるのだ。

だが奈那子は……。

太一郎は、奈那子の視線が怖かった。真正面から見つめることが出来ないほど……怯えていたのだ。太一郎さえ関わらなければ、奈那子は深窓の令嬢として、幸福でいられたのである。もしそうなら、

桐生が結婚を急ぐことはなかつたろう。泉沢に強行突破されることもなく、その前に不正が明らかになつたはずだ。彼女は泉沢との内々の婚約を解消し、何れ周囲に祝福された結婚をして……。

出逢つた頃の奈那子は、黒い絹糸のような髪をして、しなやかな指先で鍵盤を叩いていた。将来は、子供たちにピアノを教えるのが夢だ、と語つた。

それが今は、長い髪を無造作に束ね、慣れない家事で指先はボロボロだ。こんな場所で……大きなお腹を抱え、苦勞するような運命に引きずり込んだのは太一郎であつた。

その二人の出逢いが、太一郎の悪意だと知つた時、奈那子は何と言つたろう。奈那子を抱きながら、他の女とも寝ていたことを知れば……。奈那子から巻き上げた小遣いを、女と遊ぶ資金に使っていたのだ。あの時、奈那子が妊娠しなければ、きっと他の男に襲わせていただろう。

一年前の約束など、太一郎は口にした三日後には忘れていた。彼女の顔と共に……。

太一郎は深く息を吐き、一気に吸つた。そして息を止め、口を開いたのである。

「茜は……藤原でメイドをしてた。その時、俺は……茜を殴つて犯そうとした」

奈那子は小さな悲鳴をあげ、口元を押さえる。

その時、彼の中で声が聞こえた。余計なことは言つな、と。ただ一度の過ちで、それを償う為に茜と関わっている。そんな嘘を言えと心の声がする。

「俺は去年までそんな生き方をして来たんだ。無理矢理……犯した女は何人もいる。子供を墮ろさせた女も……お前だけじゃない。最初の出逢いも……俺が仕組んで……お前を襲わせて……」

言葉にすることは、拷問にも等しかった。

飲み込んだ時は小石だったように思う。だが吐き出そうとする今は、胸が破れそうなほど罪の石は大きく育っている。それは喉に痞え、太一郎は息も絶え絶えであった。

「俺に……謝らないでくれ。頼むから、もっと責めてくれ。殴つてもいい……お前の気の済むように……どうか、どうか」

太一郎は頭を下げ続けた。次第に体ごと前に倒れそうになる。だがその瞬間　太一郎はフワリと包み込まれた。

何が起きたのかよく判らない。それほど、奈那子の行動は予想外のもので……彼女は太一郎をしっかりと抱き締めてくれたのである。

「いいえ……わたしにとって、太一郎さまはヒーローでした」

「違うんだ！　だからそれは全部嘘で……お前を抱く為の」

「あなたに出逢えて、わたしは人を愛することを知ったんです。わたしは幼い頃からずっと、両親や祖父母の意思で動く人形でした。

そのわたしを救い出してくれたのは……太一郎さまです」

「だから、それは」

「愛している、と言ってくださったでしょう？　？わたし？を必要としてくれたのは、太一郎さまだけでした」

「違うんだよ……俺はそんな男じゃない……金の力で罪から逃れて来ただけで」

「わたしは一生信じます！ 太一郎さま、どうか自信を持って下さい。あなたはわたしに愛をくれて、救って下さいました。それは……わたしの中で生涯変わらぬ真実です！ ですから、どうか……あなたも心のままに」

太一郎は奈那子を、世間知らずのお嬢様だとばかり考えていた。だが、何も知らなかったのは太一郎のほうだったのだ。

愛は人を脆くする……弱くも情けなくもするだろう。だが、信じられないほど強い力も与えてくれる。奈那子は愛を糧に強くなれる女だった。信じることも、待つことも、耐えることも、赦すことも出来るほど。そして……別れることも出来るほどに。

「……判った。茜のそこに行つて来る」

それは心を決めた声だった。

太一郎は奈那子からパツと離れ、背中を見せる。この上、涙まで見られるのはあまりに無様だろう。

だが、奈那子は太一郎の決断を違う意味で捉えたようだ。

「……はい……」

小さく震えた声で、それでもしっかりと頷いて見せる。

「太一郎さま……今まで本当にありが」

「勘違いすんじゃないよ。戻って来るまでに、これ……書いてくれ」

太一郎がそう言って渡したのは、ズボンのポケットに入れたまま、ずっと持ち歩いていた？ 婚姻届？ だった。本名の藤原太一郎で全部

記入してあり、後は奈那子の署名捺印を残すのみである。

「た、いちろう……さま？」

「さま、は止めるって」

「でも、茜さんは？」

「アイツは危なっかしいんだ。家庭環境もちよつと複雑で……それに、アイツはまだ十八だよ」

太一郎は一旦言葉を切ると、再び口を開いた。

「俺の罪は多分一生消えないと思う。やり直したり、幸せになろうなんてこと自体、間違ってるのかも知れない。でも、お前の子供の父親になりたい。叶うなら、償うチャンスが欲しい。お前とやり直したい。一年前の約束を守るところから始めさせてくれ。でも……無理には」

次の瞬間、奈那子の瞳に涙が浮かんだ。

そして大粒の真珠が煌きながら頬を伝い始める。

「太一郎……さんが罪を犯したなら、わたしも一緒に償います。だから……あなたの妻にして下さい」

泣きながら微笑む奈那子を、太一郎はソツと抱き寄せた。

雲が月を横切り、重なる二人の影が消え。

数分後、太一郎は駅に向かって走っていた。

茜の言葉はおそらく嘘だろう。だが、彼女の誘惑に乗るわけにはいかないのだ。今度こそきっちり茜と話し、太一郎に奈那子の許を離れる気がないことを判ってもらおう。

この時の太一郎に偽りは欠片もなく……。

(22) 涙のプロポーズ(後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

なぜでしょうか？

どうも太一郎のラブシーンだけは恥ずかしくて書けませんっ！

このまま行くと、まともなラブシーン一つなく、ラストまで行きそ
うです(^^;)

皆さん、そんなに期待してませんよね？ね？(苦笑)

なんでこんなに照れるんだろっ???

ではでは、引き続きよろしくお願い致しますm()m

(23) 悲劇(前書き)

直接の描写はありませんが、陵辱的なものを思わせる表現があります。苦手な方はご注意ください。

太一郎が高田馬場に着いた時、既に○時半を回っていた。

和菓子屋『さえき』のビルまでは二キロ近くある。走って行くとした時、駅から程近い橋の上に茜の姿を見つけたのだった。

嘘で良かった。

ホツと胸を撫で下ろした、と同時にやはり憤りが込み上げてくる。こんな場所で、しかもこんな時間に、未成年の少女が一人で居ていはずがない。

「おいっ！ 茜、お前なあ。いい加減にしねえと」

太一郎の声にビクツとして茜が振り返った。

その一瞬、背後を走り抜けた車のヘッドライトが彼女の顔を照らし出す。それを見て、太一郎は絶句した。茜は嗚咽を上げ泣きじゃくり、口元が赤く見えるのは……血であろうか。髪は掴まれ引き摺られたように乱れている。体に張り付いたＴシャツにショートパンツ……着衣に乱れた様子はない。だが、茜は裸足だった。

「ど、どうしたんだ？ 殴られたのか？ すぐに警察に行こう……」

いや、病院に」

「だ……め……」

「お前、まだそんなこと言ってるのかっ!？」

大声で怒鳴った瞬間、茜の身体は痙攣したように震えた。

以前、北脇に襲われたと嘘をついた時とは様子が違う。あるとき茜は、自分から太一郎に近づいてきた。だが今は……。

太一郎が一步近寄ると、茜は一步後ずさる。その瞳は焦点が合っ

ておらず、今にも橋の欄干を乗り越えてしまいそうだ。

「わ、わかった。判ったから、こっちに来いよ。そこは危ねえって……」

「わたし……わ、たし……」

「あの職人がなんかしたんだろ？ もう大丈夫だって。俺がどうにかしてやるから。だから、こっちに来い」

「もう……だめ。遅いの……私は」

「人間生きてりゃどっからだって挽回出来る！」

そう言うと太一郎は二歩近づいた。

だが、茜は首を振りながら一歩後ろに下がり……。

「無理なの。私……だってもう」

「無理じゃねえ！ 俺が何とかしてやる」

「できないよ」

「出来るか、出来ないかじゃない！ やるか、やらねえかだ！」

再び太一郎が近づいた時、茜の腕に触れ……そのままグイッと引き寄せた。

その時はじめて、太一郎は茜の顔色が尋常でないことに気付いたのだ。

襲われた恐怖などといったレベルではないような気がする。太一郎がそんなことを考えた時、茜は彼の胸に縋りついたまま、とんでもない言葉を口にしたのだった。

「ど、うしよう……私……あの男を……ころし……ちゃった」
「……！」

くくくくくくく

太一郎に電話を切られてすぐ、茜はもう一度母の携帯に電話をかけた。だが、やはり繋がらず……。茜は家を出て、店の休憩室で夜を過ごすそうと考える。

実は、太一郎には言わなかったが、警察には電話をかけた後だった。

しかし……。

『じゃあ、お母さんの交際相手なんですね？ これまで暴力を振るわれたり、脅迫めいた言葉や暴言を吐かれたこともない。お母さんの許可を得て、家に入られてる訳ですし。お酒を飲まれているだけでは、どうしようもないですね。もし、酔って暴れるようなら、もう一度電話して下さい』

事件性がないと言われてしまったのである。

確かに、客観的に見たら茜の考え過ぎかも知れない。学校の友人にそれらしき話をした時も、母親を取られた嫉妬じゃないか、と言われた。

茜は溜息を吐くとショートパンツのポケットに店の鍵を入れた。なるべく新田を刺激しないように、リビングはサツと走りぬけよう。そんなことを考え自分の部屋の扉を開ける。

その瞬間 目の前に新田が立っていた。

茜はしばらくの間、息をするのも忘れた。

「よう茜、オレと一緒に飲もうぜ、な？」

これまでとは口調が違う。新田はその目に宿る下劣な光を隠そうともせず、茜に近づいた。

「わ、たし……友達と約束があるから……勝手に飲んで下さい」
震える声でそれだけ言い、茜は新田を避けて逃げ出そうとした。
だが、強かに酔っている割に、新田の動きは素早く、茜の腕を掴んだのだ。

「逃げんなよ。オレさ、ホントは雅美よりお前のほうが好みなんだ。当たり前だよな、四十近いオバサンより、女子高生のほうが良いに決まってるよ。肌もスベスベだもんなあ」

雅美は母の名前だ。茜は母を馬鹿にされ、悔しくて言い返そうとしたが……。直後、新田は茜の腕に頬擦りしたのだ。ざらざらと男の髭が当たり、茜はその気色悪さに声を失う。

無言で触らせる茜に気を良くしたのか、新田はそのまま抱きついてきた。

「きゃっ！」

「どうせ男とヤリに行くんだろ？ だったらオレとやるうぜ。雅美とどっちが上手かな？」

太一郎に比べれば、新田はだいぶ小柄だ。それに酔っていて足元もおぼつかない。なのに、凄い力で茜を引き摺り倒そうとするのである。

そして……新田は言ったのだ。

「お前がイヤだつてんなら、^{まどか}円で試してみようかなあ。中学生つてどうだろうな。雅美に言ってもいいぜ。アイツはオレに惚れてるから、絶対信じないだろうねえ」

妹の名前を口にされ、茜は凍りついた。

くわくわくわくわく

茜の話聞き、太一郎は血の気が引く思いだった。

本当のことを言えば、茜の友達と同じことを太一郎は考えていた。母親に女の部分を見せられ、茜は少女らしい不快感を覚えているのだろう、と。新田は真面目な職人にしか見えない、そう思っていた自分の見る目のなさが呪わしい。

「妹のことまで持ち出して……奴はお前を？」

橋の近く、誰も来ないビルの影に身を潜め、二人は話していた。

太一郎の質問に茜は首を小さく横に振り、

「お母さんと……同じ事をしろって言い出して……」

彼女は消えそうな声で……口の中に男のモノを押し込まれたと告白する。髪を掴まれ強引に口を開けさせられ……。だが、茜はやられっ放しになっている少女ではなかった。

「お、おもいきり……噛み付いてやったの……そしたら……」

刹那　茜は道の端に駆け寄り、吐き戻した。

生臭い感触と、血の匂いを思い出したのかも知れない。茜の口元を汚していた鮮血は、彼女の反抗の証であった。

茜は太一郎が自動販売機で買ったミネラルウォーターで口をすすぎ、ようやく言葉を繋ぎ始める。

「あの男は怒って……私に飛びついてきたの。怖くて……暴れて……その時に突き飛ばしたら……動かなくなって……」

地面に座り込む茜の横に、太一郎は腰を下ろした。見るに見かねて、髪を撫で、そつと整えてやる。

「頭を打ったみたいだった。血が出て……それも結構たくさん……」

「……正当防衛だ。お前のせいじゃない。だから警察に」

太一郎が茜を宥めようとした途端、彼女は血走った目で叫び始めた。

「誰がそれを信じてくれるのっ!? 太一郎だって信じなかったでしょ? きつと、誰も信じてくれない。だって私、適当に男と遊んでる今時の女子高生って思われてるもの。アイツ、周りにいい顔してたから……私を襲うわけないって言われるよ。それにお母さんも……私が新田を殺したって知ったら、恨むに決まってる!」

そんな訳がないだろう……と、太一郎には言えなかった。

無条件で母親の愛を信じられるほど、彼自身、愛された記憶がない。娘より男に対する愛情を優先させる母親がいないと、断言出来ないのだ。

茜は太一郎に身を寄せ、熱に浮かされたように呟き続ける。

「どうしよう……殺すつもりなんてなかったの。ホントよ……ホントに」

不安そうに見送る奈那子に「始発で戻るから待っていてくれ」と告げた。その約束を破りそうな予感に、心の中で詫びる太一郎だった。

(24) 味方

茜の自宅があるビルが見える位置までやって来た。

思った通りと言うべきか、和菓子屋『さえき』の店の前に救急車が一台停まっている。そして、そのすぐ後ろにはパトカーも見えた。大きな道路沿いで商店街の近くの為、道行く人が足を止め、結構な野次馬が集まっている。

茜は太一郎の背中に居た。

裸足の彼女を歩かせるわけにもいかず……。太一郎は茜を背負ってここまで来たのである。

途中、茜は泣きながら呟いた。

「罰が当たったんだよね……。きっと、太一郎に嘘をついたから……だから、こんなことに」

「馬鹿言っつなっ！ 女を襲う男なんか、殺されて当然なんだ。俺が言っただから、間違いねえよ」

真つ赤な回転灯の明かりが目刺さるようだ。一步近づぐことに、茜の震えが酷くなる。おそらく、彼女の脳裏には、新田の流した血の色が浮かんでいるに違いない。

太一郎は茜を説得してここまで連れて来た。だが、思えば太一郎にしても、こういった警察の対応など上手い方ではない。逆に、自らが逃げ出して逮捕された経験もあるくらいだ。しかし、ここで太一郎が震えて怯えていては、誰が茜を守るのだろう。

自分の置かれた環境により、人は変わらざるを得ない時があることを痛感する太一郎であった。

「なんか、血まみれの男の人がいるって、通報があっただって……」

「刺されたのかしら？」

「さあ……」

年配の女性が二人、遠巻きに噂していた。どうやら、付近の住民らしい。その男……新田の生死が知りたいのだが、おそらく聞いても判らないだろう。

「茜、お前はこの辺で待ってるよ。俺が事情を聞いてくるから……」

「……置いて行かない？」

「行くかよ」

「警察に逮捕されても、一緒に来てくれる？」

「ああ……傍に居てやるから、馬鹿なことは考えんなよ。いいな？」

太一郎は近くのビルの非常階段に茜を座らせ、独りで店の前まで歩いて行く。すると、ビルの入り口から担架に乗せられた男が出て来たのだ。新田である。

新田は頭に白い布を当てられ、それを自分で押さえていた。体には薄手の毛布が掛けられており、詳しい怪我の状態は判らないが、生きていることは確かなようだ。自分の目で確認して、太一郎はホツとする。このことを、早く茜に教えてやらなければ……そう考えて太一郎が踵を返したその時、背後から声が上がったのだ。

「あ、あの男だ！ ア、アイツが僕を殴っただんです！」

その叫び声に太一郎は振り返った。そして彼の目に飛び込んできたのは……。上半身を起こし、真っ直ぐに太一郎を指差す新田の姿であった。

くわくわくわくわく

「すみません。私はこちらに運び込まれた、佐伯茜さんの保護者の代理で……」

「ああっ!? あなた、この病院で刺された人よね? 良かったわねえ、助かって」

「……はあ」

(どうやらこの病院とは、妙に縁があるらしい)

宗はそんなことを考え、苦笑しつつため息をついた。

先月の小平警察署に続いて、今度は目白警察署からの連絡だった。案の定、太一郎のご指名である。だが、今度は少々事情が違うようだ。

太一郎は現在、知人男性に対する傷害容疑ということで、警察署に拘束されている。その太一郎が、自分は後でいいから話を聞いてフォロワーしてやってくれ、と頼んで来たのが佐伯茜であった。

宗と茜は当然面識がある。

昨年末、わずかな期間だが藤原邸でメイドをしていたのが茜だ。

来春、高校を卒業したら正式採用と宗は聞いていた。

問題は太一郎と茜の関係であろう。

同じく昨年の十二月、太一郎が万里子を襲う切っ掛けとなった少女が茜のはずだ。彼女は強姦未遂で太一郎を訴えると激昂していた。そんな彼女に、入院中の母親に心配を掛けるべきではない、と説得したのが宗である。

疑問だらけの宗が警察署に駆けつけ、聞いた事情は……。

何と、太一郎と茜は恋人関係にあり、二人で共謀して、和菓子屋「さえき」で働く職人・新田祐作に暴力を加えた、というもの。新田は茜の母・佐伯雅美の内縁の夫で、茜は以前から彼に反抗していた。その新田が、太一郎との交際を反対した為、酔った所を二人で襲ったらしい、と。

これは些かハッキリしない新田が、駆けつけた警察官に話した内容からの推測らしい。

とりあえず、太一郎からも話を聞きたいということになり、おとなしく任意同行に応じた為、今回は逮捕には至らなかった。

「その方なら一応、婦人科で検査を受けて貰っています。そちらに回って貰えますか？」

婦人科の言葉に嫌な予感を覚える宗だったが……。

「だから、あの男って言うてるでしょ！ あの男が私を襲ったのっ！ 太一郎に電話して助けに来て貰ったんだってば。何で太一郎を捕まえるのよっ！ 警察ってバカなんじゃないの!？」

(これは……大丈夫そうだな)

茜の勢いに安堵し、宗は慌てて彼女に声を掛けた。

「佐伯さん、お久しぶりですね。事件に巻き込まれたとか……太一郎様から聞いて」

「宗さんっ！ 太一郎よ。私はいいから太一郎を警察から出してっ！ コイツら話になんないんだってば！ 私を襲ったのは新田なの。新田がウソをついてるのよ。怪我をさせたのは私だけ……それもアイツが変なことさせるから……。とにかく太一郎は無関係なのっ」

茜の向こうで婦人警官が一名と男性警官一名、困ったような顔をしている。

太一郎から聞いた話では、新田を殺したかも知れないと、茜は酷く落ち込んでいたという。しかし、どうやら新田の怪我が軽傷であることを聞いて、俄然元気になったらしい。出血量が多かったのは飲酒が原因のようだ。

「落ち着いて下さい。太一郎様は任意で事情を説明するべく、警察に向かわれただけですから」

「新田は外面めんめんがいいのよ。でも、太一郎は無愛想だし……警察なんか丸め込まれるに決まってるわっ！ 太一郎に迷惑を掛ける気じゃなかったのよ。ホントに……ただ、私は」

茜は超軽量のソフトサンダルを履いていた。サイズも微妙なようだ。裸足であったというから、おそらく警察の用意したものだろう。確かに、任意とはいえ現在の太一郎の立場は微妙だ。しかし宗の聞いた限りでは、現場検証さえ済めば、一両日中には事実が解明されるはずである。

次第に泣き崩れそうになる茜の肩を抱き、宗は彼女を慰めつつ、警察から引き離れた。

「話は聞きました。ですが、本当に太一郎様は大丈夫ですから、ご安心を」

「でもっ！ あの男は私のことも指差したのよ。だから太一郎は……」

不安に駆られ、ビルの陰から茜が覗き見た時 何と太一郎が警察に連れて行かれる所だった。茜は恐怖もそこに、店の前まで

走って行く。すると、救急車の中から新田は「あの娘も共犯だ！」と叫んだのだ。新田が生きてて良かったと思う反面、悔しさが湧き上がり……茜は言葉にならない。

その時太一郎が「警察には俺が行く。彼女は見ての通り裸足で怪我をしてる。病院に連れて行くのが先だろう」「そんな風に言ってくれ……」。

「事情は全部自分が話すから……私は被害者だからって」

茜の言葉に、宗は感心を通り越して言葉もない。

先月、警察に囲まれたことで逃げ出し、そのせいで逮捕されることになった男と同一人物とは思えない腹の据わり具合だ。この茜と恋人同士になり、そこまで変わったのだとすれば……。やはり、卓巳の従弟と言うべきか。

だが茜の次の台詞に、宗の頭には再び疑問符の山が積み上がった。

「太一郎には奥さんがいるのっ！ これ以上、迷惑は掛けられない。お願い、宗さん。太一郎が早く出て来れるようにしてっ！」

(24) 味方(後書き)

御堂です。

第1話以来の宗くん登場です(笑)

この23話の間に色々あって、太一郎の変わりように驚いてますけど(^^^;))

いつでも、どこでも飛んで来てくれる良い奴だなあ)

ということ、前は驚かせてすみませんorz
引き続き、何卒よろしくお願い致します。

(25) 別れ道

「藤原太一郎さん。ご苦労様でした。もうお帰りになって結構ですよ」

そんな風に言われたのは、任意同行を求められてから丸一日も経ってはいなかった。

さすがに警察相手に偽名は使えない。太一郎は小平署の時と同様に、本名の藤原を名乗る。事情を説明すると言ったものの、太一郎には詳しい事情は何も判らないのだ。ただ、茜から聞いた通りのことを答えた。

しかし、それは新田の供述とはかなりずれており……。太一郎は、長期戦になるなら宗に奈那子のこと頼まなければならない、と考へ始めた時だった。

「お疲れ様でした」

目白署の玄関口で宗が迎えてくれる。だが、茜の姿がないことに、太一郎は若干の不安を覚えた。

「ああ……悪い。なんか迷惑ばかり掛けて。それで、あの……あか……佐伯は？」

「佐伯さんはお母様が迎えに来られました。お母様の落ち込みが酷く……佐伯さんが傍についてご実家の方に戻られました」

宗から聞いた事情は、太一郎の想像を遙かに上回るものであった。先ず、警察は最初から新田を怪しんでいたという。理由は簡単である。

「義理の娘の身を案じる男が、股間をその娘に噛まれる訳がありませんからね」

宗は笑いを堪えながら話す。

新田は頭の傷もさることながら、茜に噛まれた傷からの出血に慌てふためいたらしい。悪態を吐きながらビルの廊下をうろついていた所を、警備員が見つけて救急車を呼んだと言う。同時に、警察にも通報された。

当初、顔も知らない女との情事の結果で、女は逃げたと言ったらしい。しかし、警察は数時間前の茜の通報を引き合いに出し、新田は返答に窮する。直後、新田は太一郎の顔を見つけ、短絡的にも罪を押し付けようとしたのだ。しかし、それがそもその間違いとなる。

太一郎や茜は一滴も酒を飲んではおらず、二人の話のほうが信憑性は高い。その場合、新田の強姦未遂は明らかだ。しかも警察からは「どうしてそんな場所を噛まれたのか」と質問され……。

朝になり、酔いの醒めた新田は「昨夜は酔っていた。実は茜に誘惑されて……」「いや、本当は僕と茜は深い交際があつて、単なる痴話喧嘩……」など、供述を二転三転させたのだつた。

「それだけでも充分怪しいんですが……。実は、警察の身元確認で新田が偽名を名乗っていることが判つたんです」

あの男の本名は渡瀬祐作わたせゆうたくと言い、なんと結婚詐欺容疑で取調べを受けた過去が判明したのだ。起訴には至らなかったものの、現在でも複数の女性から慰謝料を請求されており、裁判中であつた。

駆けつけた茜の母・雅美は新田の正体を聞き……茜の支えなしでは立っていられなかつたという。

「どつやら結婚の話が出ていたようです。店の名義を新田にする予

定だったとか……。あの男が自分の娘に何をしたかを知り、泣き崩れてしまわれて。佐伯さんは、元々親孝行なお嬢さんですからね。太一郎様のことは気にされてましたが……」

茜もつくづく苦労人だ。

思えば茜が太一郎に関わり始めたのも、母親や弟妹の手が離れたからであった。周囲の面倒を見ることで自分に存在価値を見出してきた茜なら、今度も頑張るだろう。寧ろ、こういった事態のほうが茜自身が落ち込まずに済むかも知れない。

警察署を出てしばらく歩くと自動販売機があった。宗はそこで缶コーヒーを二本買う。その横の、ベンチ代わりとも単なるブロックとも言える場所に腰を下ろし……。太一郎は礼を言い、一本受け取った。

「俺にはよく判んねえけど。もし法律的にどうにかしなきゃならぬのなら、力になってやってくれよ」

「はい、判っています。ところで……太一郎様に奥様がいると聞いたんですが？」

いきなり話を振られ、太一郎はコーヒーを吹き出した。

「戸籍上の変化はないようですが。お子さんも産まれる予定だとか……事情を説明願えますか？」

その質問に、奈那子の名前が上がらなかったことに太一郎は驚いた。

どうやら、桐生の私設秘書はそれほど優秀な男ではないらしい。太一郎ですら思い出したのに、向こうは覚えていなかったのだ。そ

うでなければ一週間以上が過ぎて、卓巳の元に連絡が行かない訳がない。桐生より先に話さなければ、と思いつつ……。再び奈那子に関わったことを知られるのが怖くて、卓巳に連絡の取れない太一郎であった。

「これは良い機会ではないでしょうか？ その女性を伴い、藤原に戻りませんか？」

太一郎は宗の言葉に驚き、顔を上げる。すると、宗は随分穏やかな表情で微笑んでいた。

「まだ半年だ。何にもしてねえのに……藤原に戻ったって」

「実は、九月一杯で私は社長秘書を辞することになりました」

「辞するって……こないだの事件は終わったんだろう？ 今月、仕事に復帰したばかりじゃねえか」

「日頃の行いの悪さでしょうね。些か仕事の遣り辛い状況でして……。会社にもご迷惑を掛けてしまいそうなので、社長の采配でしばらく本社から離れることになったんです」

宗は二年を目処に北海道で働くことになるという。

その瞬間、太一郎は酷く心細い思いに駆られた。自分でも気付かぬうちに、宗を頼り切っていたようだ。一人では仕事も探せなかった太一郎に、名村産業を紹介してくれたのは宗だった。卓巳にはプライドが邪魔して頼れない所を、宗なら頭を下げることが出来た。一見、軟派でいい加減な男に思える。だが、その柔軟さと機転はさすが藤原グループの社長秘書と言っべきだろう。

「社長には確実な味方となるべき親族がおられません。やはり、太一郎様が藤原に戻り、本社に入るべきではないでしょうか？ 少なくとも社会人としての常識は、半年前からは想像も出来ないほど立

派になられておられますし……」

宗の言うことは判る。いつかは藤原に戻り、卓巳の役に立ちたいと思う。

だが……。

「卓巳……さんに会いたいんだ。その……結婚したい女のこと、話がある。明日か、明後日か、俺が出向くから時間と場所を指定して貰えないか？ それから……我俣言つて悪いんだけど、万里子さんにも同席して欲しいんだ」

覚悟を決めて太一郎は口にした。

宗は僅かに驚いた表情を作ったが、すぐに上着の内ポケットから手帳を取り出し、捲り始めた。

「万里子様も同席と言うことでしたら、藤原邸が望ましいと思われる。……明日の夜九時以降で如何でしょう？」

「ああ、それでいい」

「では、太一郎様も奥様をご同伴下さい」

「それは……」

一瞬、宗の態度は芝居で、奈那子をおびき寄せる罫かも知れないと考える。

「明日は俺ひとりで行く。な……彼女は体調が今ひとつなんだ」

「判りました。では、社長には明日、約束の時間直前にお話することに致します」

「わ、悪い」

どうやら宗は、太一郎の不信と躊躇を感じ取ったらしい。

宗は、茜と連絡が取れるように、と母親の実家を太一郎にも教えようとした。しかし、太一郎はそれを聞かずに断わる。茜との間に友情を築き上げる自信はない。

太一郎は宗にもう一度頭を下げ、茜のことを頼んだ。そして、二度と彼女に会わない決意を固めたのである。

奈那子は太一郎の帰りを待っている。一刻も早く帰って安心させてやりたい。

宗と別れてすぐ、奈那子に電話を掛けるが……。携帯電話は『電源が切れている……』と虚しく繰り返すだけだった。

(26) 彼女の選択

時間は少し遡る。

太一郎は始発で戻ると言い、出て行つてから半日。奈那子は太一郎の身を案じ続けていた。

彼女は何度も、太一郎から渡された婚姻届を見つめ、嬉しさを噛み締める。その反面、ひよっとしたら茜という女性に会って気が変わったのかも知れない、と思い……。はたまた、奈那子の父・桐生に見つかり、先日のような酷い目に遭わされているのでは、と不安を覚えていた。

「ねえナナちゃん。じつと待つてないで、買い物にでも行こうか？

太一ちゃんが帰るまでに、美味しいもんを拵えといてやろう」

「はい」

ときに促され、奈那子は気持ちを切り替えてにっこりと頷いた。

一度太一郎と離れた時、奈那子は二度と逢えないことを覚悟した。迎えに行く、という約束が果たされる日はないのだと、彼女にも判っていたのだ。それでも、信じたかった。夢を見続けたかった。最初に太一郎に感じた想いを捨て去るほうが、奈那子には苦痛だったのである。

しかし、再会した太一郎は、悪い魔法の魔法が解けたかのようにで……。

着ているものが、ボロボロのジーンズとＴシャツだったとしても、見た目と人格が比例しないことは、奈那子自身の経験でよく知っている。高価な衣装を身に纏い、高い教養を身に付け　その心の内

で考えることは、如何に人を陥れて自分が得をするか、それだけだ。奈那子とて、それが楽な生き方だと信じていた時もあった。親に逆らう力は自分にはないのだ、と。

だが、今は違う。笑い方すら忘れた生き方が、本当に楽な筈がない。楽しく生きるのは決して簡単ではないけれど……太一郎と一緒なら心から笑えるのだ。

そして今の太一郎は、一年前の彼より百万倍素敵であった。

「ねえ、おばあちゃん。今日は魚にしましょうか？ サバのみそ煮が太一郎さん好きだし……」

「じゃあ、生サバを一匹買って帰ろうかね。ナナちゃん、目玉が怖いって泣くんじゃないよ」

「いやだ、もう、おばあちゃんたら……太一郎さんには内緒ですよ」

二人が笑ったその時、一台の車が奈那子の横に停まった。白石が乗って来たのと同じタイプのベンツで、奈那子は一瞬ドキッとす。だが、後部座席が開き、出て来た男は白石ではなかった。

その男は奈那子の前に立つと、眼鏡を押し上げながら言ったのだ。「やあ、奈那子さん。僕の子供も随分大きくなったようだ。こんなになるまで言わないなんて、君も君のお父さんもひどいなあ。さあ、君の祖父上、桐生先生に結婚のお許しを貰いに行こうじゃないか」

奈那子は、幸福な時間に幕が下りるのを感じていた。

くくくくくくくく

「じゃあ……奈那子はソイツに付いて行ったのか？」

太一郎は家に戻るなり、待ち構えていたときからその話を聞いて拳を握り締めた。

「あたしにやよく判らなかつたんだけど……」
そう前置きして、ときは話し始める。

奈那子はその男を『清二さん』と呼んだという。

最初、奈那子は同行を断わり、通り過ぎようとしたのだ。だが、清二が降りたのは反対側のドアが開き、一人の女性が降り立った。

「まさか、三十くらいに見える、きつい化粧の女か？」
太一郎の脳裏に過つたのは郁美だ。

しかし、「いやあ、もつと若く見えたよ。ナナちゃんと同じくらいじゃないかね？」と、ときは答えた。更に、その女と奈那子は面識がなさそうだった、という。

清二は車から一冊の雑誌を取り出し、奈那子に見せた。すると、見る見るうちに奈那子の表情が変わつたのである。

「伊勢崎太一郎くんの正体はこの男だろう？　？　贖罪の日々？と題して、特集を組んでくれるそうだよ。探せば、彼を法的に訴えたいという女性も出てくるだろうね。彼女は協力してくれるそうだ」

清二はそう言つと、車の向こう側に立つ女性を指差した。そして、奈那子に言ったのだ。

「君の我侭で、彼の人生を縛るのはどうかな？　彼は人生をやり直そうとしてるんだらう？　交際中の彼女と別れてまで、君に尽くそうとしてるそうじゃないか？　それに……子供は実の父親の許で育つほうが幸せだ」

「そう言われたらナナちゃん黙り込んで……」

奈那子はポケットから折り畳んだ紙を取り出し、ときに渡したという。

ときの手をしっかりと握り、「短い間でしたがお世話になりました。太一郎さんにこれを渡して、一生に一度の夢をありがとうございました、とお伝えください」

奈那子はそう言い残し、清二の車に乗り込んだ。

それは、太一郎が渡した婚姻届だ。ちゃんと奈那子の名前も書いてあり、捺印もしてあった。

奈那子は、太一郎と結婚するつもりだったのだ。清二さえ現れなければ……。

太一郎のことを書かれた雑誌といえは見当はず。今年の一月に発売された、低俗な写真週刊誌だ。三流誌の為、藤原のチェックから漏れ、市場に出回ったのである。しかも間の悪いことに、藤原の会長である臯月が倒れた時期とも重なった。

あの情報を提供したのは、ちょうどその直前に辞めたというメイドの……。

「悪いな、ばあちゃん。俺、奈那子を迎えに行つて来るよ」

「場所は判るのかい？ 金持ちそうな男だったよ」

「ああ、判る。それと……」

ときは清二の言葉で、奈那子の子供の父親が太一郎でないことを知ったはずだ。きっと訝しんでいると思い、何か言い訳をしようとした。

だが、

「人間の子は、馬や牛の種付けとは違うんだ。あんたは立派に父親になる資格がある！ がんばれ、太一郎！」

ときはそう言うと太一郎の背中をバンと叩いた。

太一郎は思い切り頭を下げ、ときの家を飛び出したのだった。

くくくくくくくく

奈那子の実家は横浜だ。

一方、泉沢大臣の家は五反田方面と聞いた記憶があるが……うる覚えだ。

とりあえず、都心に向かって戻りながら、再び宗に連絡を取ろう。場合によっては卓巳の手も借りるしかない。

「なあ、伊勢崎太一郎ってお前？」

駅に着く直前、乱暴な口調で後ろから声を掛けられた。

太一郎が足を止めると、四人の男が周囲を取り囲む。一瞬、清二が手を回したのか？ と思い、太一郎に緊張が走った。だが、それにしては白石が連れていたボディガードとは違い、単なるチンピラの状態だ。

どう見ても二十歳前、下手すれば十五く六かも知れない。色んな意味で怖いものを知らない、一番傍迷惑な年頃だろう。

「かつあげなら相手を選べよ。俺は金は持ってねえし、悪いが先を急ぐんだ」

そう言って軽くすり抜けようとした時、一人の少年が太一郎の足

を引っ掛けた。

太一郎は前のめりになり、危うく倒れそうになる。

「おい、いい加減にしねえか！ このクソガキ！」

「聞いてんだよ。お前が伊勢崎太一郎なんだよなっ！」

「だったら何だよ。俺はお前らなんかにはねえんだよ」

太一郎が答えた瞬間、先ほど足を掛けた少年がいきなり右足で蹴りを入れてきたのだ。咄嗟に避けたが、スニーカーの先が太一郎の腕を掠めた。

「お前をぶちのめして、骨の二〜三本折ってやれってさ。俺らもバイトだからさ。勘弁してくれよな、おにーさん」

白石か、それともやはり清二が……考えをめぐらせた瞬間、少年らの背後に女の足が見えた。

太一郎は唇を噛み締め、唸るように呟く。

「やっぱりお前か……」

そこに立っていたのは郁美であった。

(27) 路地裏の攻防

「言つとくけど、これはあなたが悪いんだから。世話になった社長夫人に対して、失礼なことを言ったからよ。充分に反省してちょうだいね」

太一郎にそんな台詞をぶつけながら、郁美は内心、可笑しくて堪らなかった。

義理の息子で情夫の等に、金で暴れてくれる人間を見つけると命令した直後、白石と名乗る男から電話が掛かった。

奈那子らしき女の亭主が名村産業で働いている。

そんな情報を白石が拾ったらしい。

白石は郁美に、『名前は明かせないが、家出した名家のお嬢様が悪い男に騙されている。両親は連れ戻したい意向だ』と伝える。情報には金を払う、その言葉に郁美は飛びついた。

だが、？藤原太一郎？の情報は黙っておいた。これは別に金になるかも知れない、そう考えたからである。

案の定、白石のすぐ後に別の人間からコンタクトがあった。

名前は名乗らなかったのも、よほどヤバイ筋なのかも知れない。

だがその相手は、郁美が白石に話していない情報があると伝えると、情報料を上積みして来た。

おかげで小遣いはタップリ稼げたし、この少年たちを雇う金は等に出させたし、太一郎には仕返しが出来るし……。

郁美は笑いが止まらない。

「俺たちのことを、白石や泉沢に話したのもテメエだな」

「あら、何のことかしら？ 証拠があるの？」

「こんなガキども使つて、一体何の真似だ」

「決まつてるじゃない。あなたの腐った根性を叩き直してあげるのよ。悪党が良い子ちゃんぶつても無駄だつて、ね」

顎を少ししゃくると、少年らはスポンサーである郁美の言いなりに太一郎を取り囲んだ。

（折角の仕返しですもの。特等席で見なきゃね）

郁美は真つ赤なロードスターにもたれ掛かり、煙草を一本取り出して、のんびりと火を吐けたのである。

くわくわくわくわく

太一郎は、体格だけならボディガードにも負けてはいない。

だが、正直に言うのと？見掛け倒し？の見本であった。

元々、器用でもなければ運動神経もない。その割に負けず嫌いな性格だけが邪魔をして、真面目にスポーツに励むこともなかった。高校時代から酒を飲み、自堕落な生活を十年近くも送ってきた体だ。事実、今年に入って初めて仕事に就いた時は散々だった。一日中立ちっ放しと言うだけで、筋肉痛でバテたくらいである。半年掛けて、ようやく人並に働けるようになったのだ。いや、今は人並以上に働いても平気というべきか。

しかし、喧嘩となると話は別である。

揉め事は極力金で片を付けてきた。一方的に殴りつける喧嘩以外は知らない男だ。一人、二人、と掛かってくる連中を避けるのが精々で、不意打ちでなければ相手を殴り倒すことなど出来ない。この間の、白石が連れていたボディガードがいい例だろう。

後は、卓巳と殴り合った記憶があるが……。

あの時の気力をここで振り絞れと言われても、突然出て来るものではない。

(こんなことしてる場合じゃねえのに……)

太一郎の気持ちが一瞬奈那子に逸れた。

その隙をつかれたように、足を掛けられ……今度は避けきれず、太一郎は地面に手をついた。同時に腹を蹴り上げられる。いくら少年とはいえ四人相手では、一旦転がされると立ち上がることも出来ない。太一郎は頭を庇って丸まった。

足や背中に痛みが走る。だが、腕っ節はなくても、頑丈なのは取り柄だ。大きな怪我をする前に、誰かが通りかかってくれることを願っていた。

だが……狭い路地とはいえ、駅に程近い。夜の十時を回ってはいるが、帰宅途中の会社員が一人や二人通っても良さそうな場所である。

横になった太一郎にも、駅前の通りから路地に入ろうとする足が何本か見えた。ところが、喧嘩沙汰に巻き込まれるのを恐れてか、誰も立ち止まった後、引き返してしまふのだ。

その時、不意に蹴りが止まり、

「残念ねえ、太一郎くん。だあれも助けちゃくれないわ。あたし

をメス豚呼ばわりするからよ。ちやーんと反省するのね」
クスクス笑う郁美の声が真上から聞こえる。

太一郎は、

「馬鹿じゃねえーか？ 俺をぶちのめしても、テメエは所詮、ババアのメス豚だ。ブタ小屋が似合いだよ」

僅かに体を起こしながら、郁美に向かって吐き捨てた。

太一郎の言葉に、周りの少年たちも顔を見合わせ笑っている。郁美はそれに気付き、憤怒の形相で叫んだ。

「だ、だったら何なのさ！ あたしがブタなら、あんただって似たようなもんじゃないか。一度糞に塗れた体はね、一生臭いまんまなんだよっ！ あんたじゃない方が、あの奈那子って女も幸せになれるってもんさ！」

郁美は少年らに向かって怒鳴った。

「さあ、払った分は働くんだよ！ 骨をへし折って、減らず口をたたけなくしてやりなっ」

郁美に蹴^{けしか}けられ、少年の一人が太一郎の腕を取る。

「悪いね、おにーさん。メスブタなんて言うからだぜ」

含み笑いをしつつ、別の一人が伸ばした腕を下から蹴り上げようと近づく。

「お前ら……あんな女に関わってみろ。ロクなことにはなんねえぞ」

振り払いたいが、一人に腕を掴まれ、別の一人に体を押さえられでは身動きが取れない。

近づいてくる少年は笑いながら言ったのだ。

「お金が欲しいんだよねえ。おにーさんが払ってくれるんなら、逆にあのおバサンをどっかに捨ててきてやるけどさ……。おにーさん、

お金なさそうだもんなー。ごめんねえ」

太一郎は覚悟を決め、グツと歯を食い縛った。

くくくくくくくく

ほんの一瞬のことだったように思う。

背後から足音が聞こえ、その直後、太一郎を蹴ろうとした少年の鳩尾みそおちに膝が入っていた。男は後ろ向きのまま、太一郎の腕を押さえ、少年の頬を肘で殴る。そのまま、体を押さえていた少年の襟首を掴み上げると、呆然と立ち尽くす少年に向かって突き飛ばしたのだ。二人は抱き合うように地面に転がった。

太一郎も驚いたが、郁美はもつとである。

その時、最初に膝蹴りを食らった少年がよろよろ立ち上がり……その手にナイフを持っていた。少年は奇声を上げ、背中を向けた男に突っ込んだ。

「卓巳！ 避けるっ！」

太一郎には叫ぶことしか出来ない。

だが、男 藤原卓巳は特に慌てる様子も見せず、手にしたスーツの上着で少年のナイフを持った右腕をから搦め捕った。

「金が欲しいと言っていたな」

片手で少年を押さえると、もう一方の手で上着の内ポケットに見える財布取り出し、中身を見せる。

「黙って引くなら好きにだけくれてやる。だが……欲をかいたら失

敗すると、鑑別所で学んで来ても構わんぞ」

少年は卓巳から飛び退いた。

そして金を受け取ると、「あ、あのオバサンも、俺らが連れて行くのか？ どっかで痛めつけてやっても」そんな提案を口にするが……。

「いや、始末ならこちらです。貴様らはとつとと失せろ」

卓巳の冷酷な台詞に、少年らは青褪めつつ走って逃げた。可能なら、太一郎とて逃げ出したい気分だ。思った通り、卓巳はつかつかと太一郎の前に歩み寄り。

「この馬鹿野郎！ 意地を張るなど言っただらうがっ！」

路地に派手な音がして、思い切り横っ面を張り飛ばされた太一郎であった。

(27) 路地裏の攻防(後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

お待たせしました。

やっとヒーローの登場です！(違っつてば)

ですが、怒りまくってます… 太一郎危うし(苦笑)

悪美が逃げる？ いやいや、逃がしません。

対魔女戦は得意なカレにお願いしましょう(^^;))

真打登場でやっとクライマックスに入れます。

ではでは、引き続きよろしくお願い致します(^^) /

(28) 従兄弟

「宗は何処に行ったんだ!?」

今日の正午近く、藤原グループ本社ビル社長室内での会話である。

卓巳は、配属されたばかりの新人秘書に宗の所在を尋ねた。

「はっ、はい! 急用で出社が遅れると、連絡があったみたいです」
「急用とはどんな用だ? いつ連絡があった? なぜ携帯にも出ないんだ?」

「……それは……私には」

新人とはいえ卓巳とそう歳は変わらない。これまで地方支社で重役秘書を務めて来た男だ。本社に呼ばれた以上、使えない人間であるはずがなかった。

しかし、ほとんどの人間が卓巳の前に立つなり、身を竦め口が回らなくなる。その態度が余計に社長を苛立たせ、冷たい視線を浴びる羽目になるのだが……。

無論、卓巳に悪意はない。ただ無意識のうちに、辛辣な口調と厳しい視線を向けてしまうようだ。

(そのために宗が必要で、奴の引継ぎが重要なんじゃないか!)

「もういい。仕事に戻れ。ああ、宗から連絡があったら私に回せ」
「はいっ!」

新人秘書は最敬礼して部屋を出て行った。

宗の秘密主義はいつものことだ。以前はそのほとんどが女絡みだったが、今回は違うらしい。

「万里子から聞いた。お前に身重の女がいて、随分厳しい暮らしをしているようだ、とな」

万里子が購入していたベビー用品は、太一郎と奈那子に渡す為のものだった。

藤原邸には贈り物を合わせて、ベビーショップが出来そうなほど揃っている。だが、お腹の子供の為に頂いた品物を、そのまま人に上げてしまうのは失礼だから、という万里子の気遣いだ。

この日、万里子はそれを持って、太一郎から聞いた住所を探した。ようやくアパートを見つけ訪ねるが、当然のようにそこには誰も居なかったのである。

万里子は同じアパートの住人から、奈那子が連れて行かれそうになったことや、太一郎が殴られたことを聞き……。二人の周囲でとんでもないことが起こっていることを察し、後悔したのだ。

「ごめんなさい。太一郎さんが頑張っているから、わたしも応援しようと思っただんです。でも、こんなことになるなら、最初に卓巳さんに相談していたら良かった。太一郎さんや奈那子さんにもしものことがあつたら……」

万里子はすぐに卓巳に助けを求めた。

太一郎の行方を捜し、二人を助けて欲しい、と。本社ビルを訪れたのだった。

「そ、それで……何で俺がここにいて判ったんだ？」

「宗の居所を調べたら目白署に行き着いた。お前も一緒だと踏んだんだが、すれ違いだったな。警察に残した現住所も万里子に伝えたアパートだったろう？ 仕方なく、携帯のGPS機能を使わせてもらった」

太一郎は卓巳の説明を聞き啞然とする。だが、驚いたのはこれだけではなかった。

「悪い……どうしても行かなきゃならない所があるんだ。話はその後で」

「何処に行けばいいのか。お前は判ってるのか？」

「それは……」

「山手の桐生家にも、桐生老の家にも彼女はいないぞ」

「！」

「それから、五反田の泉沢家に戻った形跡もない。おそらくは、清二が女を囲ってるマンションの一つだろう。港区内との情報は得ている」

万里子に奈那子の姓が桐生だとは言わなかった。だが卓巳は、泉沢清二のことまで知っているのだ。太一郎には何を質問したらいいのかも判らず、呆然と立ち尽くす。

「太一郎、私を誰だと思っている？ この程度の情報なら、半日あれば造作ない」

卓巳は上着を叩きつつ、事も無げに答えた。

「怒ってないのか？」

「怒ってないように見えるか？」

「……いや」

少年たちに蹴られた傷より、卓巳に殴られた頬が痛い。卓巳の怒りを察するに、このまま見過ごしては貰えないだろう。

太一郎は思い切ってそのまま座り込み、頭を下げた。ここ数ヶ月の土下座三昧を考えると……今さら頭の二つや二つ、地面に擦り付

けることくらい訳無いことだ。

「頼む！ 俺は何としても奈那子に子供を産ませてやりたいんだ。奈那子を守りたい。いや、守らなきゃならないんだよ。藤原には金輪際迷惑は掛けません。だから……頼みます。奈那子を取り戻す、力を貸して下さい」

「彼女が、お前より泉沢の次男を選んだ可能性はないのか？ この分なら、子供の父親は奴だろう？」

「それは絶対はない！ 岩井のばあちゃんが聞いてたんだ。俺の……週刊誌の記事を持ち出して、訴える女がいると言って奈那子を連れて行った。プロポーズしたら、あいつは……俺と結婚するって答えたんだけ。嬉しそうにしてた、それなのに……」

喉の奥が詰まるような感覚に、太一郎は唇を噛んだ。地面に正座し、膝の上で拳を握り締める。自分の不甲斐なさに、涙がこぼれそうだった。

そんな太一郎の横に卓巳はしゃがみ込んだ。そして、太一郎の頭をポンポンと叩き、

「坊主頭が随分伸びたな。なあ、太一郎……一年前まで私たちは、川を挟んで向こう岸に居た。だが、万里子が橋を掛けてくれたんだ。いい加減、様子見は止めよう。少しは従兄を信用しろ」

この時、太一郎はようやく知った。

卓巳の中で太一郎は、卓巳自身と同じ岸に立つ人間になったのだ、と。

卓巳が差し出した手を、太一郎は素直に握る。それは、ぎこちなく車の窓越しに交わした握手とは違った。その力強さと安心感に、

太一郎は子供のように甘えなくなる。

だが、弱気になる従弟の気配を察したのか、卓巳の言葉は厳しくなった。

「バックアップはしてやる。だが、戦うのはお前だ。惚れた女を守るのに、選手交代じゃ洒落にならん」

「わ、わかってるさ。代わってくれなんて言っただろ」

「だったらいい。だが……あの女はどうにかしてやるう」

そう言って卓巳が指し示したのは郁美であった。

様子を窺うようにこちらを見つめていた彼女だが、卓巳の視線を受け、慌てて車に乗ろうとする。

一方太一郎は、郁美の存在をすっかり忘れていた。だが、今の話を全て聞かれたとしたら……この女のことだ。きつとまた、ろくでもないことを思いつくに決まっている。

とはいえ、太一郎には具体的な対抗手段が思いつかない。今回の件もそうだ。警察に訴えたくても証拠がない。逆に、ロードスターの中で太一郎に襲われたと言われたら面倒なことになる。

逃げようとする郁美に、臍ほそを噛む思いの太一郎であったが……。

その時、卓巳が動いた。

(29) 運命の行方

真つ赤なロードスターはフル・オープンの状態だった。郁美は車に乗り、エンジンを掛けるなりルーフのスイッチを押そうとする。しかし、その手を卓巳が掴んだ。

卓巳は身を乗り出し、もう片方の手でエンジンを切る。

「調べはついてる。随分、太一郎が世話になつたらしいな」

「そ、そ、そうよ。あたしが……あたしが仕事だつて……世話してやって。なのに、メスブタなんて言つて……そうよ！ あなたの従弟はあたしをこの車で襲つたのよっ！」

「テメエ、その前に自分が何をしたか……」

怒鳴り返そうとした太一郎を、卓巳は目で制した。

それを見て、太一郎は横を向き黙り込む。卓巳に考えがあることは明らかだった。

「それは済まなかつたな。では、その仕返しに、先ほどの少年たちを雇い、太一郎を襲わせたわけか？」

「そ、それは……さあ、知らないわ。あたしじゃないもの。たまたま見掛けて……仕返しになるかもって思っただけよ」

郁美は視線を彷徨わせながら、そんな見え透いた言い訳を重ねる。「君も先ほどの話を聞いていたと思うが、桐生代議士や泉沢大臣も絡んだ問題だ。それに、路地裏での一件が表沙汰になるのは、私にとつても非常に不味い……」

太一郎には卓巳のやろうとすることが判らない。

相手は郁美である。彼女に桐生や泉沢の名前を聞いただけで、す

ぐに政治家を思い浮かべる教養があるとは思えない。それをわざわざ知らせてやるなど……。

混乱する太一郎の前で、卓巳は小切手帳を取り出し、さらさらと金額を書いた。直筆だと判るサインをし、一枚破って郁美に渡す。

「換金は三ヶ月後だ。それ以前に、銀行には持ち込まないように。君の誠意を信じて日付は入れないでおこう。そして、マスコミに持ち込むこともなし、だ。たった三ヶ月　それで、君は生涯遊んで暮らせる金が手に入る」

そんな言葉と共に、卓巳はアルカイツクスマイルを浮かべた。

そのわずか数分後、喜び勇んで走り去るロードスターを見送りつつ……太一郎は忌々しそうな声を上げた。

「なあ卓巳……お前って、あの手の女が大っ嫌いじゃなかったか？」

「ああ、反吐が出る」

「じゃあなんであんな金をやるんだ？　しかも桐生や泉沢の正体まで教えて……」

そこまで言った時、太一郎の表情が変わった。

「お前……名村郁美を罫に嵌めたのか？」

「人聞きの悪いことを言うな。善良で勤勉な老人を、魔女の手から救うだけだ。それも、あの女が悔い改めるチャンスは残してある。後は宗がやるだろう」

悔い改めるとは微塵も思っていないくせに。

そんな言葉を太一郎は飲み込んだ。

卓巳は、「通りに車を待たせてある。お前も来い」そう言ってさっさと歩き始める。だが、不意に立ち止まり白い紙切れを拾い上げ

た。

太一郎はハツとしてポケットを探るが、ときから手渡された婚姻届がどこにもない。

「太一郎、これは桐生奈那子のサインか？」

「え？ ああ……言ったろ。奈那子は俺と結婚するつもりだったって」

「そうか。一つ確認しておく。お前も本気なんだな？ 過去の贖罪や子供のための結婚ではなく、真剣に、桐生奈那子を生涯の伴侶としたいんだな？」

卓巳の声は厳しく、重々しい。

一瞬、ほんの一瞬だが、太一郎の胸に茜の姿が浮かんだ。違う生き方をして、違う出逢いであったなら……始まったかも知れない？ 恋？ だった。

「沈黙が答えか？ 太一郎、迷ってるなら止める。後で過ちと気付いたら、周囲を不幸にする。立ち止まるのも勇気だ」

「そうじゃ……ねえよ」

奈那子は「一生信じる」と言ってくれた。

それに応えたいと思う気持ちも真実なのだ。

「俺は、奈那子と結婚したい」

「佐伯茜はいいのか？」

卓巳の口から茜の名が零れたのは不意打ちだった。だが、この期に及んで驚くことは何もない。寧ろ、目白署の一件を知っているなら、卓巳が宗から茜とのことを聞いていて当然だろう。

「茜とは偶然出会って、俺と関わったから妙なことに巻き込まれて……」

言い訳を始めた太一郎の耳に、卓巳の溜息が聞こえてくる。

太一郎はそれを振り払うように、声を荒げた。

「とにかく！俺は奈那子と結婚する。たとえ認めて貰えなくても俺は」

「認めないとは言っていない。いいだろう。お前に勝たせてやる」

卓巳は不敵な笑みを浮かべ、太一郎を見たのだった。

くくくくくくくく

間もなく、朝が来る。

奈那子は一睡もせず、ソファに座ったまま夜を明かした。てつきり、五反田の泉沢邸の向かうのだと思っただが……。奈那子が連れて来られたのは小平市よりさらに西、立川市内のマンションだった。

—LDKでそれほど広い部屋ではない。事務机が一つに合皮製の黒いソファ、その横にガラステーブルが置かれ、上にホカホカ弁当と書かれた袋が置いてあった。奈那子に夕食として出されたものだが、とても食べる気にはならない。

おそらく、泉沢家で事務所代わりに使っているマンションの一つだろう。

清二はこの部屋に奈那子を連れて来るなり、婚姻届に署名捺印させたのである。

「朝一番に提出してから、桐生先生にご挨拶だな。おい、奈那子、男の子を産んでくれよ。そうしたら、僕が桐生の後継者だ」

そんな風に笑いながら、清二は出て行った。

「いい加減諦めて寝てくれませんか？　あなたが起きてると、私も眠れないんですけど……」

「あ、ごめんなさい」

見張りとして清二が残して行ったのは、ベンツに同乗していた女性だ。

週刊誌ではAさんと書かれてあったが、奈那子には合崎悠里あいきゆうりと名乗った。今年の一月まで藤原邸でメイドをしていた女性である。

彼女は約二年間、太一郎と愛人関係にあった。それも、太一郎にセックスを強要され……親の借金があつた彼女は、泣く泣く受け入れたという。

悠里は藤原邸を辞職した直後、その一部始終を三流週刊誌に告白した。それにより、太一郎は卓巳に当主の座を奪われた『悲劇の貴公子』ではなく、藤原を潰しかねない『放蕩息子』であつたと世間に知らしめたのである。

奈那子をはじめ、悠里と清二は特別な関係にあるのだと考えた。だが、二人の様子を見る限り、悠里は清二に金で雇われただけのようにうだ。

「あの……私は何処にも行きませんから。どうぞ、遠慮なくお休みになって下さい」

「そうはいかないでしょ。ねえ、何が不満なんですか？　あの泉沢だつていずれ議員になるんだし。第一、子供の父親で、婚約もしてたつて。それが、なんでよりもよつてあんな男の許に行こうとするの？　だつて、藤原太一郎なんてただの狂犬ですよ」

悠里は腹立たしげに言う。

今の太一郎は違うのだ、と。そのことを告げても、彼女は信じてはくれないだろう。奈那子はそう思うと少し切なかつた。

だが、奈那子は太一郎に言ったのだ。自分も一緒に償う、と。太一郎の妻にはなれなかつたが、せめて、その誓いだけは最後まで守りたい。

「太一郎さんがあなたを傷つけたのなら、本当に申し訳ありませんでした。あなたが幸せになれるよう、わたしに出来る精一杯の償いを致します。ですからどうか……太一郎さんを赦してあげて下さい。お願いします」

奈那子は自分の窮地も忘れ、太一郎が新しい人生を歩めるように……それだけを祈っていた。

大きな物音に奈那子はハツとして目を開けた。

気付かないうちにソファにもたれ掛かり、うつらうつらしていたらしい。動いた瞬間、ピンクのタオルケットが奈那子の膝までずり落ちる。悠里が掛けてくれたようだ。

太一郎を庇った奈那子の言葉に、悠里は怒ったように背中を向けた。

「綺麗事ばかり！ あなたって万里子様似てるわ。だからあの男も興味が湧いたのかもね」

そんな台詞を奈那子にぶつけ、彼女は寝室に戻った。

だがあの後、一度は様子を見に来てくれたのだろう。悠里は傷ついているだけで、本当は優しい人なのかも知れない。奈那子はそう思うと、悠里の気遣いに感謝した。

カーテンの隙間からは、朝の光が射し込んでいる。壁に掛けてある時計を見ると、もう九時になっていた。

奈那子はゆっくりと立ち上がろうとしたが、両足が浮腫むくんで股関節も痛い。彼女は今、普通の体ではないのだ。座ったままの夜明けは、奈那子にとってかなりの負担だった。

「ん、もう……朝方やっとな寝たのに……誰よ」

悠里が眠そうに目を擦りながら、寝室から姿を見せた。

奈那子は慌てて、

「あの、タオルケットありがとうございます」

そのタオルケットを折り畳みながら、お礼を言う。悠里は「……

別に」と答えて、そのまま玄関に向かった。

一分後、部屋に飛び込んで来たのは泉沢清二だ。眼鏡の奥の目は血走り、奈那子を睨んでいる。

「貴様……よくもこの僕を罠に嵌めてくれたなっ!？」

清二はワナワナと震える指をきつく握り締め、その赤い目は次第に吊り上がって行く。

奈那子には彼がなぜ怒っているのか判らない。言われるままにこの部屋に来て、彼との婚姻届に署名捺印した。本来なら食って掛かり、文句を言うのは奈那子の方であろう。

「父の部下がいきなり捕まった。僕が役所に行ったら、僕も捕まるところだったんだぞ。お前のせいだっ!」

そう言うとき清二は奈那子を指さした。

「どういうことですか？ 役所って……婚姻届が受理されなかったんですか？」

「とぼけるなっ! お前はもう藤原太一郎と入籍してるじゃないかっ!？ 偽造だけ行使だから……現行犯逮捕されたんだぞっ!」

奈那子は予想外のことを言われ、声も出ないほど驚いたのである。

くくくくくく

それは卓巳の発案だ。

卓巳は直ちに連絡し、奈那子の戸籍が移動されてないことを確認した。そして深夜にも関わらず、奈那子の本籍がある役所に飛び込み、書類を揃えて太一郎と奈那子の婚姻を正式に受理させたのだ。

二十四時間・年中無休で提出可能な婚姻届ならではの手段である。勝利を確信して、呑気に朝を待った清二の負けとも言えよう。

同時に、太一郎は夫の権限で、妻である奈那子が連れ去られたと訴え出た。奈那子を脅して婚姻届を書かせ、提出する可能性がある、と言つて警察を動かしたのだ。

泉沢事務所に所属し清二に従っている社員は、『有印私文書偽造、同行使』の容疑で現行犯逮捕されたのだった。

この連絡を受け、慌てたのが清二である。

彼はその時、卓巳が調べた通り南青山のマンションにいた。愛人を住まわせているが、物件の所有者は清二ではなく、父親である。

奈那子と結婚するとはいえ、とくに彼女に対する感情はない。妊娠中の奈那子とセックスする気にはならず……。かといって、体のラインが少年ぽく、色気のない悠里は清二の好みではなかった。彼の好みは性技に長けた年上の女性だ。太一郎とはある意味、対照的と言えよう。

だが、政界で生き残る為なら好み云々は関係ない。

清二は奈那子の祖父、桐生老の庇護をなんとしても必要としていた。それさえ受けられれば、父のほとぼりが冷めた頃に、清二は泉沢の地盤で出馬可能となる。

奈那子のお腹に清二の子供がいるなら、まず百パーセント反対はされまい。彼は愚かにも、それだけで安心していただけのだった。

く*く*く*く*

「と、とにかく。桐生先生のお宅に伺うぞ！ そいつは僕の子なんだ。僕と結婚できるようにして貰う。先生なら出来るはずだ。お前もそう言つんだ。僕と結婚したいって……でなきゃ、そのガキだけ取り上げるぞ！」

清二は苛立った様子で奈那子の手首を掴んだ。
その乱暴さが怖くなり、奈那子は清二の手を振り解く。

「離して下さい！ お祖父様の所には参ります。でも、乱暴な真似はなさらないで下さい」

「なんだとお……貴様、誰に向かって言ってるんだ？ お前は僕の妻になるんだ！ 逆らうならただじゃ済まないぞっ！」

清二は手を振り上げた。

身を縮め、奈那子は必死でお腹を庇う。その前に飛び出したのが悠里だった。彼女は小柄な奈那子と違い、振り下ろされた清二の手を思い切り払い落とした。

「妊婦に……しかも、自分の子供を妊娠してる女性になってくるのっ！？ それじゃ、あの太一郎と変わらないじゃない！」

「う、うるさい！ 逆らうならお前にも金を払わないぞ」

「いいわよ！ だったら週刊誌に持ち込んでやる！ 奈那子さんを脅して連れ去って、暴力を振るったって 泉沢大臣の名前を出したら、どこも喜んで買ってくれるわ」

権力を笠に着ているだけで、本質的には口喧嘩すら出来ない男だ。強気の悠里に押され気味である。

しかし、

「そ、そ、そんなことしてみる。父に言っ……お前なんかどうとでも出来るんだぞ」

「何？ それって脅迫？ だったら警察に行つてやる！ 文書偽造とか……目の前で見てたつて、脅して書かせたって証言してやる！」

その言葉を聞いた瞬間、清二の中で何かが切れたようだった。

清二は悠里に飛び掛り、なんと首を絞めたのだ。

「止めて下さいっ！ お願い、清二さん、やめて」

奈那子は清二の腕を掴み、悠里から引き離そうとした。

「うるさいっ！ 次はお前だ。逆らうなら殺してやる！」

「きゃっ」

正気を失った清二は、縋りつく奈那子を思い切り振り払った。

今の奈那子は体のバランスを上手く取ることが出来ない。彼女がソファにお腹から激突しそうになった瞬間 力強い男の腕が、彼女を抱きとめたのだった。

「奈那子っ！ 大丈夫か？ 怪我は無いか？」

「…… 太一郎さん…… どうして、ここが」

「それは卓巳が…… てめえ、よくも！」

太一郎の後半部分の台詞は清二に向けられたものだ。

清二は太一郎の存在に全く気付いていないらしい。悠里の首を掴んだまま、馬乗りになろうとする。直後、太一郎に首根っこを掴まれ、清二は背後に放り投げられた。二人の体格差は歴然だ。清二は床の上をゴロンゴロンと転がり、キッチンとの境でようやく止まったのだった。

「おい！ 合崎、合崎、大丈夫か？」

「合崎さん、しっかりして下さい。すぐに救急車を……」

「だ、いじょうぶ。バカじゃない、の……あの、男。でも、あんたみたいな男に、助けられるなんて」

悠里の陰を含んだ視線に、彼女を助け起こしていた太一郎はすぐに手を離れた。彼女の首周りは薄っすらと赤くなっている。だが、

酷いことにはならず、奈那子は胸を撫で下ろした。

だが、ホツとしたのも束の間、奈那子らの背後で清二が喚き始めたのだ。彼は腕や足を擦りつつ、キッチンカウンターの椅子に手を置き、立ち上がっている。

「僕を出し抜いたつもりだろうが……ガキの父親は、この僕だ！
嘘を吐いても無駄だぞ。調べたらすぐに判るんだ。お前らの結婚なんて無駄だ。桐生先生が上手くやってくれるさ」

奈那子は太一郎の腕をギュツと掴んだ。それは嵐に巻き込まれ、子供だけでも守ろうと、懸命に一枚の板に抱きつく母親の姿だった。

(31) 父親の資格

「テメエじゃねえよ。子供の父親はこの俺だ。間違えんな」
腕にしがみ付く奈那子を背後に押しやりながら、太一郎は答えた。
それは嘘偽りのない、心からの言葉だ。

だが、そんな太一郎を見て、清二は鼻で笑った。

「そんな見え透いた嘘を……。馬鹿な男だな。調べたら判ると」

「馬鹿は貴様だ」

そう言いながら玄関から入って来たのは卓巳である。

「お前は……。確か、藤原の。クソッ！ 誰も入れるなど言ったのに
……。役立たずな連中だ！」

清二は卓巳の顔に見覚えがあるらしい。太一郎だけでなく、卓巳
まで通した父親の部下を口汚く罵った。

そんな清二を無視して卓巳は言葉を続けた。

「夫婦の間の子供として届け出れば、当然、奈那子さんが産む子供
は太一郎の子となる」

「事實は違うんだ！ 検査をすればすぐに」

「その検査を許可するのは戸籍上の両親だ。拒否すればお終いだな。
百歩譲って検査を受けたとしよう。貴様と子供に親子関係が認めら
れたとしても、それだけだ。親子関係を否認する権利は、太一郎に
しかない。クズは失せろっ！」

卓巳の恫喝どっかくに清二は震え上がった。

後ずさりしながら、それでも清二は父親の名を口にする。

「ぼ、ぼくをコケにして……。父が黙ってないからな。藤原グルー
プなんか……」

「同じ理屈が通用するか、下で待っている警察に試してみるんだな」

その言葉に清二は慌てふためき飛び出して行った。

だが実際のところ、清二を逮捕させるのは難しいという。『有印私文書偽造』も、調べれば奈那子の直筆とすぐに判る。太一郎の件で脅してはいるが、脅迫罪が成立するかどうかは微妙なところらしい。卓巳の判断としては『不起訴』だが、奈那子の軟禁場所を調べる意味で警察を利用したのだった。

「太一郎さん……どうしてここが？ それに、入籍って」

「婚姻届にちゃんとサインしてたろ？ それを提出しただけだよ。」

卓巳がすぐにやれって。そうしたら、誰も手は出せなくなるって言うから……」

「でも、そんなことをしたら桐生の父が黙ってはいないでしょう？」

それに、泉沢先生も怒らせてしまつて。藤原の家に、ご迷惑をお掛けすることになったら」

「いや、それは」

確かにそれは、太一郎が最も避けたかつた事だ。

藤原の名前には頼らない。二度と卓巳に迷惑は掛けない。それを心に決めて、太一郎は家を出たのである。奈那子の父に知られたら、藤原家に類が及ぶことは避けられない。本当なら何とか子供が産まれるまで逃げ切つて、桐生や泉沢の件が片付いてから結婚すればいいと考えていた。

だが、子供を処分させようとする桐生だけでなく、清二が子供の存在を知つたとなれば話は別だ。先に入籍という手を使われたら、それこそ太一郎の出番は永久になくなる。そう思つた瞬間、太一郎

の中にたとえ様のない喪失感が生まれた。

太一郎は卓巳から「すぐに決断しろ」と迫られ、入籍を決めたのである。

「奈那子さんですね。はじめまして、藤原卓巳です。太一郎がお世話になっていきます。どこも、具合の悪い所はありませんか？」

卓巳にしては穏やかな声と表情で、奈那子に一步近づいた。

「はい、大丈夫です。その……この度は大変なご迷惑をお掛けすることになってしまい、本当に申し訳ございません。なんと詫びたらいいか……」

身の置き場がないように頭を下げる奈那子に、卓巳はあっさりと答えた。

「いや、太一郎の面倒は今に始まったことじゃありません。あなたが気にされる必要はないですよ」

「は、はあ……」

卓巳の言うことは間違っていない。だが、もっと言い様があるだろう、と太一郎は独りごちる。

「だが、去年までに比べれば面倒の質が違う。今のコイツなら、手を貸してやっても無駄じゃない。そうは思わないか？ 合崎くん」
不意に、かつての主人に名前を呼ばれ、悠里はビクツとした。

太一郎憎しとはいえ、週刊誌に藤原家の内情を暴露したのだ。まともには顔を合わせづらいだろう。

「泉沢清二に金で雇われたのは数日前らしいな。だが、沈み掛けた船に乗るのは利口じゃない。いくら金に困ったのだとしても」

「え……なんで金に困るんだ？ 合崎は両親が戻って来たからって、メイドを辞めて実家に帰ったんだろ？」

太一郎は卓巳の台詞に疑問の声を上げたのだった。

悠里が高校を出てすぐに藤原邸に勤めたのは、両親が借金をしたまま蒸発したからだ、と聞いている。無論、悠里に支払いの義務はない。だが、性質たちの悪い金融会社から借りていた為、一人娘である悠里の周囲にも、人相の悪い男が付き纏っていた。

そして、その借金を清算出来たのは太一郎の母・尚子から貰った慰謝料のおかげである。悠里にすれば、不本意なことだっただろう。ともかく、それで彼女も彼女の両親にも、執拗な取立てはなくなった。今年の初め、姿を消していた両親から連絡があり、悠里は両親の家に戻ったという話だ。

だが卓巳の調査によると。

悠里の両親は娘の身に起こったことより、彼らにとって都合の良い部分のみを受け入れた。両親の借金は悠里の知るだけではなかったのだ。更なる金額を藤原家で都合して貰う為に、彼らは娘に連絡を取ったのである。

しかし、悠里にそんなことが判るはずがない。彼女はメイドを辞めて自宅に戻るが……。

「三流紙から現金を見せられ、目が眩んだらしいな。だがもう、どこもそのネタを買うことはない。先に私のもとに来るべきだったな。少なくとも、もう少し高値はついただろう。君まで逮捕させるつもりはない。さっさと着替えてどこにでも行け」

真っ青になる悠里を卓巳は簡単に切り捨てた。

太一郎も何度か口を開きかけ……だが、言葉で卓巳に敵うはずがないと諦める。

そんな太一郎の横から奈那子が声を上げた。

「お待ち下さいませ、藤原様。わたしは、この合崎さんに助けて頂きました。清二さんに殴られそうになった時、庇って下さったのです。ここに連れて来られた時も、とても親切にして頂きました。もし可能でしたら、彼女の生活が立ち行くようにしてあげて頂けませんか？ お願い致します」

「人の心配より、自分の心配が先じゃないのか？ 私の勘違いでなければ、君たちの生活も立ち行かない状態だと聞いているが」

卓巳の返事に奈那子も言葉を失う。

確かに、人の助けを借りて生活している状況だ。万里子の実家・千早社長にも借金がある。奈那子を取り戻す為に卓巳の力も借り……この先も、桐生との決着には藤原の力が必須だろう。

「卓巳の言う通りだ。でも……俺のお袋が金を払ったことで、合崎の両親が味をしめたってんなら、無関係じゃないだろ？ 何とか、ならねえか？ もう一回、藤原邸で雇うとか……」

「大きなお世話よ！ 私が何でお邸を辞めたか判る？ 万里子様の影響で、土下座一つで皆があんたを許そうとか言い出したからよ。何が結婚よ……あんたが父親ですって？ 幸せになんて出来る訳がないじゃないっ！」

太一郎の同情だけは、悠里には受け容れがたいことだったらしい。興奮を露に言い返すと、悠里は奈那子に向き直った。

「あの泉沢って男も相当のロクデナシだと思うけど、コイツだって大差ないわ！ あなたには悪いけど……お幸せに、とは言えない。太一郎なんて地獄に堕ちればいい、今でもそう思ってるわ！」

悠里は奈那子を庇ってくれたという。おそらくは心優しい女性なのだろう。だが、彼女の怒りは本物だ。呪いの言葉を吐かれるほど、怨まれているのだと思うと……。

太一郎は固く目を閉じ、唇を噛み締めたのだった。

(32) 責任の所在

「ごめんなさい。本当に……ごめんなさい。どうか、太一郎さんを許して下さい。お願いします」

黙り込む太一郎の横で、奈那子が悠里に頭を下げる。

それを見て、太一郎は胸が引き絞られる感覚を味わった。

「奈那子、お前が謝ることじゃない」

その声は上ずり、微かに震えている。だがこれ以上、奈那子に頭を下げさせる訳にはいかない。太一郎は奈那子を後ろに下がらせ、自ら悠里と向き合った。

「本当に申し訳なかった。心から反省してる。一度で足りないなら、何度でも頭を下げる。どうしても許せないなら、訴えてくれていい。俺はそれだけの罪を犯してきたから……。その時は、奈那子には申し訳ないけど、服役する覚悟でいる。だから……」

太一郎はゆっくりと、体を二つに折るほど頭を下げ、悠里に謝罪する。それ以上のことも、それ以外のことも、今の太一郎には出来なかった。何度同じように詫びて回ればいいのか、赦される日は来るのか……それを思うと、太一郎の心は萎えそうになる。

いつそ殺してくれと言いたいが、それで太一郎が犯した罪が消えるわけではないのだ。寧ろ、罪は深くなる。

太一郎が自責の念に駆られていると、そこにタイミングよく制服警官が飛び込んできた。

だが警官が迎えに来たのは、太一郎ではなく悠里。清二は奈那子を連れ出した罪を、太一郎に怨みを持つ悠里に擦り付けたようだ。

彼女からも話を聞きたいと、二人の警官は言う。

「あの……合崎さんはわたしを助けて下さいました。ですから、この方は……」

奈那子は悠里が逮捕されると思ったのが、青褪めながら説明を始める。

「藤原奈那子さんですね。あなたにも事情を伺わないといけないんですが、その」

警官は卓巳をチラチラ見ながら、言葉を濁した。ここに来るまでの経緯で、如何に卓巳が警官を嚇おどしつけたか判るうものだ。

「見たら判るだろう？ 医者が先だ」

「わずか二言で警官を一蹴すると、卓巳は太一郎に向かって言った。
「下の車リムジンで彼女を藤原の邸まで連れて行け」

「いや、俺たちは小平の家に……」

「桐生との決着がついてないんだぞ。彼女を連れ戻され、婚姻無効の申し立てでもされてみる。藤原邸うちなら警備は万全だ。それに、邸内には医者も看護師もいる。それだけじゃない……彼女を一刻も早く横にさせてやれ」

「わ、わりい」

卓巳に言われ、太一郎は初めて奈那子の疲れた表情に気付いたのだ。

自分の鈍さに嫌気が差しながら、太一郎は卓巳に謝った。だが「謝る相手が違う」と卓巳は小さく耳打ちし、太一郎と奈那子を残して、先に部屋を出たのである。

くわくわくわくわく

マンションのエレベーターが一階に着き、卓巳と悠里、そして二人の警官が降りた。

外はかなり大きな事になっている。それもそのはず、マンションの出入り口付近にはパトカーが四台も停まり、警官の数も二桁に届く。付近住民や通行人は、何かと覗き込んでいた。

「合崎……太一郎を許してやれとは言わない。だが、ほどほどにしておけ」

パトカーに乗せられた悠里に、卓巳は声を掛けた。

彼女が邸に勤め始めたのは十八歳……今の佐伯茜と同じ歳の頃だ。悠里の父親は小さな町工場を経営していた。会社が傾く前は、悠里も社長の一人娘として大切に育てられたはずである。年齢より幼い感じの、礼儀正しい少女だった。

卓巳が彼女を最初に見かけた時、太一郎が馬鹿をやるであろうと薄々察した。だが、大会社のご令嬢と問題を起こされるより、金で片が付く娘のほうありがたい、とすら考えたのは事実だ。

当時の卓巳にとって、女性問題は地雷であった。踏み込むことはおろか、言葉にも出来ない。太一郎がどんな罪を重ねようと、卓巳は顔を背けるだけだった。

そんな自分がどれほど無様であったか、誰にも言われない分だけ卓巳自身がよく判っている。

悠里は怯えた瞳で卓巳を見上げ、口を開いた。

「私、逮捕されるの？ 週刊誌には本当にことを話しただけよ！
それで何で捕まらなきゃならないのよっ」

「泉沢に加担したことはどうだ？ 奈那子さんを連れ出すのに、奴は太一郎の醜聞を利用した。君はその場において、それでも自分が正

当であつたと言えるか？」

「それはっ！ それは……」

クツと唇を噛み締め、悠里は再び卓巳に視線をやった。今度は怒りの炎が彼女の瞳に揺らめいている。

「ハツキリ言つたらどうですか？ 二度と太一郎に関わるなつて。約束するなら逮捕はさせない とか。どうせ、そのつもりなんでしょう？」

卓巳は小さく息を吐くと身を屈めて悠里に答えた。

「今回の件は立件されない。悪意のない事実誤認として、事件そのものがなくなる。だから、君が逮捕されることはない」

悠里はハツとした様子で表情を変えた。

そんな彼女に卓巳は言葉を続ける。

「太一郎を恨んでも憎んでもいい。奴のせいで人生が狂つたというなら、軌道を修正するために私も協力しよう。だが、人生を投げるような真似はしないでくれ」

「嘘よ、そんな協力なんて……。だって、永瀬さんは追い出されたつて聞いたわ。あの男の更生に邪魔だから、関係のあつたメイドは全部理由をつけてクビにされるつて」

この悠里の言葉に、卓巳も驚いた。

御し易い太一郎を利用し、万里子を傷つけ、卓巳夫婦の仲を裂こうと企んだのがメイドの永瀬あずさである。その証拠を宗が調べ上げ、一筆書かせて追い出したのだが……。どうやら、裏で他のメイドたちを煽っていたらしい。

万里子は卓巳だけでなく、太一郎も、もう一人の従弟・孝司のことも手玉に取っている。自分も万里子に嫌われたから追い出さ

れたのだ。無実の罪を着せられ、退職金すら貰えなかった、と。

クビになった後、そんな連絡を悠里らに寄越したらしい。道理で、若いメイドが次々に辞めて行くはずである。

「永瀬を解雇した理由は、太一郎と和解した皐月様を彼女が恐喝したからだ。奴の過去をマスコミに売ると脅して……まさかとは思うが、君が週刊誌に持ち込んだのはあの女の提案か!？」

首を縦に振る悠里に、卓巳は開いた口が塞がらない思いだった。

おそらくあずさのことだ、仲介料の名目で金をせしめたに決まっている。引つ張り出して思い知らせてやりたいところだ。しかし宗の話では、地方で介護の職につき、金持ちの老人を誑し込むのに必死だという。わざわざ藪をつつき、毒蛇を呼び戻すような真似も愚かだ。

「とにかく、君が藤原に戻りたいなら手配しよう。だが、太一郎夫婦と顔を合わすのが嫌なら、別の仕事を紹介する。どうだ?」

「でも……両親が」

「人間という奴は楽な方に流れなくなるものだ。だが、君の両親は懸命に働くことを知っている。我が子を?打ち出の小槌?だと勘違いする前に、離れたほうがお互いの為だろう」

卓巳の母は、藤原から金を引き出す為だけに彼を産んだ。金にもならない愛欲の結晶は、人の姿を成す前に、闇に葬り去られたのである。卓巳がこの世に生きているのは、まさに奇跡としか言えない。

後日、悠里は卓巳の紹介により、住み込みの家政婦をすることに

なる。老夫婦の住まいで、彼女を傷つける人間はいないと卓巳が受け合った。

悠里は、

「太一郎のことは許せないけど、地獄に堕ちろって言ったのは取り消します。奈那子さんは悪い人じゃないし、子供に罪はないんだし……。でも、ちょっと万里子様に似てますよね？」
少しだけ吹っ切れたような笑顔を見せる。

卓巳は複雑な想いを抱きつつ……最後の部分を除き、悠里の言葉を太一郎に伝えたのだった。

(33) あいしてる

「奈那子、大丈夫か？ 具合が悪いなら横になつてたほうがいい」
「いえ。あまり眠つてなくて。それだけですから」

リムジンの中で、太一郎は隣に座る奈那子に話しかけた。

卓巳は宗と合流すると言って、あの場に残つたのだ。広い車内に運転手の他は二人きりである。

このメルセデスのリムジンは卓巳専用の社用車だ。卓巳はドイツ車が好きなのか、私用で乗り回しているのもBMWであった。

太一郎は十八歳で免許を取つてすぐ、ポルシェを購入した。だが、一ヶ月後には事故を起こし廃車。以来、運転はほとんどしなくなる。だが、今年に入って名村産業で働き始め、仕事でどうしても汲み取り用の車両を運転しなければならなくなった。今ではだいぶ、運転にも慣れてきたように思う。

「ごめんな。俺、気が利かなくて」

卓巳に言われたことが気になり、太一郎は後部座席に体を小さくして座っていた。

そんな太一郎に奈那子は微笑み、

「謝らなければならぬのは、わたしの方です。勝手に判断して、泉沢さんについて行ってしまつて」

そして小さな声で、清二に言われた『交際中の彼女と別れてまで君に尽くそうとしてる』という言葉を口にした。奈那子はそれが事実なら、どんなことをしても太一郎を自由にしなくては、と思ったという。

「プロポーズまでしたのに、信じてもらえなかったわけか？」

「それは……再会してから、太一郎さんは一度も仰ってくれないから」

「何を？」

「……愛してる……って」

「そっ、それは、そんなっ」

奈那子の不意打ちに、太一郎は焦った。その拍子に唾まで気管に入ってしまった、太一郎はケホケホと咳き込む。

愛してる　以前は気楽に口にしていた言葉だ。奈那子にもしょっちゅう言っていた。頼みごとがある時は、特に多用していたような気がする。だが今は、想いが深く、真剣になればなるほど、容易には口に出れない言葉であった。

「だから、それは……だな」

「あ、ごめんなさい。いいんです。愛してるなんて、ねだって無理に言っただけ言葉じゃありませんもの。いつか……もし、いつか、太一郎さんが本当にわたしのことを想って下さる日が来たら。その時、聞かせて頂けますか？」

そう言うと、奈那子は太一郎を見上げてニコツと笑った。

小柄で細くて儂げで、なのに笑顔は向日葵ひまわりのように明るく眩しい。そしていつも太一郎を見ていてくれる。奈那子の傍にいたことで、太一郎は自分の中の太陽を信じられるようになった。

「あ……あい……あいしてる。……愛してるよ、奈那子。　　棒読
みになって悪い。でも、素面で言うのはすっげえ恥ずかしい」

太一郎の顔と耳は火照っていた。おそらく真っ赤になっていることだろう。？愛している？この言葉にこれほど強い力があると、太一郎はようやく気が付いた。

「太一郎さん、嬉しい！」

奈那子から抱きついてきたのは初めてだ。ずっと我慢させていたのだと思うと、太一郎は申し訳なさで一杯になる。女の扱いには慣れていないつもりだった。少なくとも、卓巳よりはましだと内心思っていたのだ。だが、どうやら五十歩百歩らしい。

「あなたが好きです。心から、愛しています」

「お……おう」

他に気の利いた返事は出来ないのか、と自分で自分の尻を蹴りたい気分だ。

そして太一郎が視線を下ろすと、同じタイミングで奈那子が見上げていた。目の前に女性の……最愛の妻の唇があれば、やるべきことは一つだろう。

だが、二人の唇が重なる瞬間、奈那子が太一郎の腕を強く掴み、押し退ける仕草をしたのだ。それはどこか一年前の二人の関係を思わせる、微妙な行動で……。

「いや……待って」

奈那子の口元から微かに零れたその言葉は、かなり強く太一郎の欲求を擦った。髪から仄かに漂う奈那子の香りが、独りで慰めた夜を思い出す。妊婦の奈那子に無茶は言えない……言えないが、少しくらい、という思いが頭を擡げてくる。

逃げる仕草にそそられる辺りが、自分自身に不安を覚えないでもない。

だが、それ以上に……。

「奈那子、お前が欲しい」

太一郎は、自分で思うより切羽詰っているようだ。声にすると同時に奈那子の返事を待たず、その唇を捉えた。

情欲を煽るようなキスに、太一郎が理性を飛ばしかけたその時。

コンコン、コンコン。

背後で何かが叩かれる音がして、太一郎が振り向いたそこには……。

くわくわくわくわく

「呆れた奴だな。私は別に、そういった方向に気を遣ったわけじゃないぞ」

卓巳は心底呆れた口調で太一郎を叱った。だが、苦笑いを浮かべているので、本当に怒っている訳じゃなさそうだ。

あの後、宗が立川警察署まで卓巳と悠里を迎えに行ってくれた。そして悠里を自宅に送り届け、卓巳と共に大田区の藤原邸まで帰って来たのだった。

ここ数日、宗は太一郎の件で都内の警察を走り回っている。

「まあまあ、突然の入籍でしたのでどうなることかと思いましたが……。ご夫婦の仲がよろしいなら、結構なことじゃありませんか」

台詞の内容だけなら非常に真面目ぶって聞こえるが、宗も笑いを堪えるのに必死だ。

「俺だつて別にそんなつもりじゃねえよ。ただ……何となく、そういう雰囲気になつて……別に」

太一郎は先刻から、懸命に言い訳をしていた。だが、元々頭も口も軽快に回る方ではない。青くなつたり、赤くなつたりしつ……どう考えても、卓巳と宗に遊ばれている感のある太一郎だつた。

ここは藤原本邸のリビングである。アンティークの調度品が揃えられ、部屋全体がクラシカルに纏められていた。太一郎がこの邸に住んでいた頃は、あまり用の無い部屋であつた。

奈那子は太一郎の部屋に通され、専門医の診察を受ける。医者から異常なしと言われホツとしたのだらう、横になつた途端、彼女は眠ってしまった。医者からは、タップリの睡眠と休養を取るよう、と言われ、今はそつとしている。

キスを中断させられ、苛立ちを覚えつつ太一郎が振り返つた時。

車はすでに、藤原邸のエントランスホールに到着していた。卓巳からの連絡で、太一郎が戻ってくる、と万里子をはじめ全員が迎えに出ていたらしい。

だが、当の太一郎は、車が停まつたことすら気付かず、キスを止める気配もない。仕方なく、和田雪音が後部座席の窓をノックしたのだという。

雪音は万里子付きのメイドで、宗の恋人だ。宗曰く「意地っ張りな所が堪らなく可愛らしい」というが、太一郎にはよく判らない。口調も表情もきつく、まともな笑顔も見ることがなかった。

おまけに、

「お帰りなさいませ、太一郎様。でも、続きは部屋でやってくれま

すか？」

赤面する万里子と違い、雪音は平然と言ったのけたのである。

「だから……いや、って言ったのに……」

腕の中の奈那子は涙ぐんでいる。

下半身に凝縮された熱が、一気に冷めて行く太一郎であった。

(333) あいしてる (後書き)

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

なんか…和んでます (苦笑)

こんなことしてる場合か？

というのはともかく、まあ、たまにはね (^^^)

連載、どこまで続くんでしょうねえ… (遠い目)

よろしくお付き合いくださいませ m () m

(34) 二人の女神

甘い香りに奈那子は包まれていた。

随分久しぶりに、広いベッドとふかふかの布団で眠った気がする。もちろん、今の生活に不満はない。人の優しさを知り、太一郎もいて心は満たされている。

だが、代議士令嬢として育った奈那子だ。気付かぬうちに生活の苦労はストレスとなり、彼女の体は疲労困憊であった。しかも、妊娠による負担も大きい。

ドクターからお腹の赤ん坊に問題はないと言われ、奈那子の緊張は一気に緩んだ。少し横になるつもりが……あまりの寝心地の良さに、グッスリと眠り込んでしまったらしい。カーテンの隙間から見える外も真っ暗であった。

奈那子は常夜灯だけの薄暗い室内を見回す。

すると、リビングのテーブル付近に動く影を見つけた。

「あの……太一郎さん？」

奈那子が声を掛けると、その人影は体を起こして振り返る。

「あ、ごめんなさい。起こしてしまって。わたしは藤原卓巳の家内で万里子と言います」

女性の声を聞いた瞬間、奈那子の胸にチクリと痛みが走った。

その名前には聞き覚えがある。悠里に言われた、「あなたって万里子様に似てるわ。だからあの男も興味が湧いたのかもね」その中に出て来た名前だ。太一郎の口から、聞いた記憶はない。だが……。

「起きていらしたらお腹が空いたんじゃないかと思って……ココアとホットケーキを焼いてきたんです。具合は如何ですか？ 電気点けましようか？」

「あ、はい。お願い致します」

奈那子がそう答えた直後、天井の灯りが数回瞬き？万里子様？の上へ降り注いだ。

ソファの近く、電灯用のリモコンを手に立つ女性がいた。落ち着いた笑みを奈那子に向け、楚々として佇む。漆黒より茶色に近い豊かな髪は、蛍光灯の灯りで一層艶めいて見える。彼女の姿はまるで砂漠のオアシスのようだ。そこでは誰も争わず、傷ついた体を癒してくれる。

万里子は不思議なエネルギーに満ち溢れた女性だった。

そして奈那子の視線は、万里子の大きなお腹にも注がれる。

「予定日は十月なの。今九ヶ月目で、もう大変。奈那子さんは？」
奈那子の視線に気付いたらしい。万里子はお腹を下から支える仕事をして、「ヨイショ」と付け足した。

「わたしは十一月半ばと言われています。八ヶ月です」

九ヶ月目が一番大きく見える時期だという。臨月に入ると子供の位置が下がり、頭の向きも固定される為、膨らみも下に移動する。赤ん坊にとってもお腹の中が窮屈になるのか、あまり動けなくなるらしい。

出産に関することは、最初は考えなくなかった。太一郎の子供を

中絶した罪悪感から、次は産もうと心に決めたものの……子供の父親は清二である。それを考えるだけで奈那子は気が重く、逃げ出しそうになる自分を懸命に励ました。

だが今は……夢が叶って、太一郎の妻となった。

この子は太一郎の実子として生まれてくる。それを考えるだけで、奈那子の心は浮き立った。

「合崎悠里さんに会ったんですってね」

万里子の言葉に頷き、奈那子は質問で返した。

「はい。あの、こちらでメイドをされていらした方ですよね？」

「ええ。わたしが嫁ぐ前から、今年の一月までだけね……」

奈那子は、万里子の困ったような眼差しを見つけた。彼女が言葉を濁したのは、どうやら太一郎の過去に関係することらしい。

太一郎自身が言っていた。そして悠里も口にした、太一郎の犯した罪。

「太一郎さんが合崎さんを傷つけたことは聞きました。他にも……たくさんの方を傷つけてきた、と。でも、今のあの人は違うんです！ 太一郎さんは、わたしも騙したって仰いましたけど……。わたしには、騙された覚えはありません！ ですから……すみません。わたしが謝ります。だから」

必死になって太一郎を庇おうとする奈那子の目に、驚く万里子の顔が映った。

奈那子は、太一郎はこの女性も傷つけたのだ、と思ったのだ。だから従兄である卓巳も、太一郎にあれほど厳しいのだろう、と。

「違うの、奈那子さん。そうじゃないのよ。太一郎さんはわたしを傷つけてはいないし、今、この邸内には太一郎さんと　　そういつた関係になつた女性はいないから、安心してね」

万里子はベッドに腰掛け、奈那子の手を握つて言った。

その言葉に奈那子はホツと息を吐く。覚悟はしていても、やはりそついつた女性と顔を合わせるの辛い。申し訳なさと同時に、愛人関係などと言われたら……奈那子の胸にも黒いものが渦巻いてくる。

「卓巳さんがきついことを言つたんでしょ？　気にしないでね。冷たいのは言葉だけだから。本当は、太一郎さんのことが心配で仕方なかつたはずなの。でも、わたしも秘書の宗さんも、太一郎さんの独立心を優先して黙っていたから……」

奈那子はこの時初めて、彼女が入院していた病院で太一郎と万里子が会つたことを聞いた。太一郎が来月から勤める予定になっている千早物産が、万里子の実家であることも。

万里子はお祝いだと言つて、奈那子にマタニティワンピースを持つて来てくれたのだ。下着まで揃つているところを見ると、万里子の気遣いは一目瞭然である。

奈那子は恐縮して、

「すみません。何かから何まで、お世話になつてしまつて」

「卓巳さんと太一郎さんは従兄弟同士だけれど、二人とも一人っ子でしょう？　実際には兄弟のようなものじゃないかしら。わたしも一人っ子なの。だから、妹が出来たみたいで嬉しくつて！」

万里子の親しみ深い笑顔は、奈那子には馴染みのないものであつ

た。

(合崎さんは似てるって言ったけど……この人はわたしとは全然違う)

万里子はきつと愛情豊かな家庭で育った女性だろう。国内最大と言われる藤原コンツェルンの次期総帥に見初められ、花嫁になった。？聖マリアのシンデレラ？そんな文字が、昨年末の週刊誌を賑わせていたことを思い出す。

自分に自信がなく、ぎこちない笑顔しか作れず、太郎の優しさに縋ることしか出来ない。そんな奈那子に、万里子の微笑みは眩しく……ただ、頷くだけだった。

この時の奈那子は何も知らず、そして気付けなかった。万里子の笑顔が、たくさんの苦惱を乗り越えた証だということに。そして太郎にとって、奈那子の精一杯の笑顔が癒しとなり、彼が生まれ変わる為の原動力であることにも……。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊

今朝の奈那子は元気がなかった。

太郎は奈那子のことを考え、ため息を吐いた。

邸宅に気後れしたのかと思ったが、彼女として使用人のいるお屋敷で暮らしていた身だ。ボロアパートに比べれば、より馴染みやすいはずである。

「どうした？　今からビビってたんじゃない話にならんぞ」

リムジンの中で卓巳に話しかけられた。

今、太一郎は卓巳と一緒に藤原家のリムジンに乗っている。車が向かっているのは横浜。それも奈那子の両親が住む家ではなく、同じ山手にある奈那子の祖父の家　桐生老と呼ばれるきりゅうひさよし桐生久義の屋敷であった。

古い鉄製の門を運転手が下りて行き、手で押し開ける。石畳の道を少し行くと、駐車スペースがあった。数台の、どれも運転手付きの車が停まっている。玄関前まで車で行くわけにはいかないようだ。「ここで降りよう。竹川、駐車場に車を停めて待っていてくれ」卓巳の指示に運転手の竹川は「承知致しました」と頷いた。

卓巳はとくに代わり映えのないスーツ姿である。

しかし太一郎は違った。彼が持っているスーツは、今年の正月に取締役会で着た一着のみだ。それを着て行くこうとして卓巳に叱られたのである。

「誰に会いに行くと思ってるんだ？　リクルートスーツなんぞ着込んだ小僧じゃ、門前払いを食うだけだ」

そして卓巳に連れて行かれたのが　。

(35) 一番見込みのない孫

さすがにオーダーメイドとはいかなかった。だが用意されていたのは、これまで太一郎が袖を通したこともない……ジオルジオ・アルマーニの黒ラベル。

濃いグレーのスーツは黒ラベル独特の柔らかい生地だ。ボタン位置が高めで、脚が長く見えるデザインらしい。パンツはノータック。シルクのシャツは淡いグレーで、ネクタイは濃いグレーと黒のストライプ。

短いなりに髪もセットされ、無精ひげの一本も見当たらない。

どこから見ても藤原グループの御曹子、藤原太一郎の姿であった。

御影石が敷き詰められた通路を、太一郎と卓巳は並んで歩く。

母屋の玄関が近づくごとに、太一郎は胃がキリキリ痛んだ。元々プレッシャーには強くない。特に格式ばった席は苦手だ。失敗を恐れるあまり、最初からぶち壊しにするという悪い癖もあった。

しだいに太一郎の歩幅は小さくなり、卓巳から置いて行かれそうになる。

「何をやってる？」

遅れ始めた太一郎を振り返り、卓巳は険しい声を出した。

「誰の為にここまで来たのか、判ってるのか？」

「ああ……でも、俺の話なんか聞いてもらえるかどうか……」

「何を今更。なら、帰るか？ 私はそれでも構わないが」

構うのは太一郎のほうであろう。

放っておけば、太一郎と奈那子の行く先々で邪魔が入るのは目に見えている。桐生老とて、さすがにこの卓巳と正面から事を構えるのは避けるかもしれない。

だが……。

「判ったよ。行くよ。行けばいいんだろう」

「当たり前だ……が、ちよつと待て、太一郎」

卓巳を追い抜きどどん歩き始めたが、不意に呼び止められた。

「何だよ」

「姿勢を正せ、そして、落ち着きなく周囲を見回すな。あと、話をする時は相手の目を見ろ」

卓巳は矢継ぎ早に注文をつける。

太一郎にはどれも難しいものだ。しかし、卓巳は更に注文を追加した。

「桐生老は妖怪並の爺さんだ。目が合ったら食われるかも知れんぞだが、逸らしても終わりだ」

「……それは、励ましてるのか？ 脅してるのか？」

太一郎の質問に卓巳はニヤリと笑った。

「両方だ。骨は拾ってやる。しっかりやれ」

くわくわくわくわく

通されたのは広い和室だった。

太一郎には寺の本堂を想像させる。何十畳あるのか、数えるのが面倒になりそうな広さだ。卓巳に見習い、太一郎も畳の上に直接正

座する。

窓を開け放っているせいか、真夏なのに比較的涼しい。だだっ広いせいもあるだろう。その分、真冬は寒いに違いない。など、太一郎は余計なことを考えていた。

スツと障子が開き、小柄な老人が姿を見せた。

奈那子の祖父と言われたらすぐに頷けそうな、一見、どこにもいる好々爺こうこうやだ。しかも、薄緑のシャツにグレーのズボンを穿き、ズボンは膝まで捲り上げている。まるで、畑仕事でもしてきたかのような身なりであった。

「ご無沙汰しております。しかし……また庭仕事ですか？　いつそ、第二の人生ということで、庭師にでもなられては？」

卓巳のいつもと変わらぬ口調に、太一郎は声もない。

確かに、藤原の先代社長、二人の祖父に比べたら威圧感はまるでなかった。卓巳が言った？　妖怪並？　とはとても思えない。

「相変わらず口の減らん奴め。わしが庭師になったら、真っ先に藤原の木を丸坊主にしてやるっ」

「せっかくですが、うちには腕の良い庭師がおります」

「ああ、例の落とし胤か。しかし高德は、人を見る目がなかったな。一番見込みのない孫を後継ぎにしようとおった。藤原の為には、さっさと死んで正解だ」

一瞬……ほんの一瞬だけ、桐生老の視線が太一郎に移った。その一瞬、まるで祖父の前に立たされた気持ちになる。

？　一番見込みのない孫？　とは間違いなく自分のことであろう。

太一郎は膝の上に置いた手を、力一杯握り締めた。

「そうそう、去年の夏だったか。わしの孫に手を付けて、逃げ出し

おつた臆病者だ。いくら藤原と縁続きになれると言っても……あの男は要らん」

俯きたくなる顔を、太一郎は必死で上げていた。チラツと横を見るが、卓巳は無表情だ。

桐生老は何でもないことのように言いながら、その実、卓巳を威嚇しているのは明らかであった。

「さて……藤原の二代目。この男は誰かな？」

卓巳は口元に笑みを浮かべ、

「桐生先生も人が悪い。その？見込みのない臆病者？ですよ。今は……あなたの義理の孫だ」

そう答えると同時に、太一郎に 何か言え、と促す。

「藤原太一郎です。去年のことは……心からお詫び申し上げます。本当にすみませんでしたっ！」

静かな桐生老と卓巳の語らいとは違い、太一郎はハッキリとした声で答えた。いや、怒鳴った、と言うほうが正しい。

「それから、奈那子……さん、と入籍しました。自分に出来る精一杯のことをして、幸せにしたいと思っています！ どうか、認めて下さい！ よろしく願いますっ！」

腹の探り合いとはほど遠い、無骨だが真つ直ぐな言葉であった。しかし。

「聞こえんかったのか？ お前は要らん。失せる」

桐生老はそれだけ言うと、膝を立て、立ち上がるうとする。

「待つて下さい！ 自分の話を……」

「おい、藤原の。可愛い孫娘は返してもらうぞ。嫁さんを貰って後継ぎも産まれるという時に……いらんことはするな。判ったな」

卓巳は何も答えず、口を閉ざしたままだ。

桐生老は太一郎など歯牙にも掛けず、部屋を出て行くこととする。

「ちよつと……」

太一郎が呼び止めようとした時、桐生老が振り返り、彼を睨んで言ったのだ。

「わしを謀^{たばか}った娘婿は追い出した。泉沢もお終いだ。わしにはもう奈那子しかおらん。奈那子の夫には、わしが桐生に相応しい男を探す。奈那子が戻らんなら 藤原を潰すぞ」

その目には、太一郎の動きを封じる力が籠もっていた。

藤原を盾に取られるのが一番痛い。実際問題、どんな手で来るのか……太一郎には見当もつかないのだ。仮に、冤罪をでっち上げられ、卓巳が取調べを受けたりすれば相当な打撃であろう。これから子供も産まれる。そんな卓巳や万里子をこれ以上巻き込むのは……。不意に、太一郎の胸に弱気の虫が騒ぎ始める。しかし、それらを凌駕する、卓巳の声が耳に響き渡ったのだ。

『 骨は拾ってやる。しっかりやれ』

太一郎は深く息を吸うと、背中を向けた桐生老にもう一度声を掛けたのである。

「待てよ、爺さん」

かなり擦り切れた畳を両足でしっかりと踏み締め、太一郎は立ち上がった。シャツの第一ボタンを外すと、少しだけネクタイを弛める。

「桐生に相応しいってなんだよ。そう言って選んだ娘婿が、一人娘の奈那子を利権漁りの道具にしたんじゃないかねえか！ あいつが俺なんかに惹かれたのは、俺と同じだったからだ。誰もが？お前の為？と言って、結局、自分のことしか考えてないからだよ！」

「だからお前も、奈那子の想いを利用して身体を弄んだ、と。孕ませて捨てた言い訳か？」

「ああ、そうだ！ でも、俺が赦しを請うのは奈那子であって、あんたじゃない。奈那子は俺を信じると言ってくれた。あんたも祖父さんなら、桐生じゃなくて、奈那子の幸せを考えてやれよ。俺は、あんたに『要らん』と言われたくらいで引くわけにはいかねえんだ！」

卓巳のような器用なやり取りは出来ない。

言葉を選び、腹に三つ四つ抱えたような……そんな、知恵もなければ機転も利かない。説得と言えるのかどうかは判らないが、真正面から言葉をぶつける以外に手段のない太一郎である。

その時、桐生老はクルリと振り返った。その形相はまさに？妖怪？の如く、薄い瞳で太一郎を睨みつけ……。

(36) 駆け引き

「怒鳴らんでも、わしの耳は聞こえとる！」

一喝され、太一郎は条件反射のようにシユンとなった。

「まあ、その辺で。桐生先生もそろそろ先のことを考えて、功德くどくを積まれたほうがよろしいのでは？ 不品行の程度なら、私たちの祖父と大差ないと思われませんが」

言いたい放題の卓巳に桐生老はフンと鼻を鳴らした。

「わしは百まで生きるつもりだ。後、四半世紀はある。貴様の葬式にも出てやるからな」

「結構ですね。では先に逝って、後からやって来た桐生先生を顎で使うことにしましょう」

卓巳の人を食った返答に、「ああ言えば、こう言う……」と桐生老はブツブツ口の中で呟いた。

「おい、デカイの。そんなに奈那子の夫になりたいのか？」

「なりたいんじゃないやねえ。もうなつてんだよ。往生際の悪い祖父さんだな」

桐生老は意地悪そうに顔を歪ませながら、

「奈那子と別れたら貴様が欲しいだけの金をやろう。但し、別れんと言ふなら、奈那子には一円も残さんぞ。さあ、どうする？」

太一郎は一瞬、何を言われたのか判らなかつた。

だが気付いた後は、怒りより脱力感のほうが大きい。

「あのな祖父さん。金はない方が幸せになれるんだぜ。ペットポトルのお茶を一本おごって貰うだけで、ありがたいつて思えるんだ。無駄なことに使うより、感謝されることに使えよ。仮にもあんたはさ、この国を動かしてきた一人なんだから？」

「……」

痛い所をつかれたのか、桐生老は黙り込んでしまった。或いは、太一郎ごときに説教されたのが面白くなかったのかも知れない。

直後、今度はとんでもないことを言い始めたのだ。

「随分、立派な口を叩くな。ならば桐生を継いで政界に入れ。貴様の言う、感謝されることに桐生の金を使ってみろ」

「悪いが、俺は？見込みのない男？だからな。これでも二十年以上、無駄に足掻いてきたんだ。自分が人の上に立つ器じゃねえのは判ってるよ。それに、仕事はもう決まってる。奈那子が入院した時に世話になった人だから……俺は俺に出来る仕事をして、家族と一緒に生きて行く。藤原に嫌がらせなんかして、奈那子を泣かせるなよな、祖父さん」

太一郎の言葉と共に、庭の奥から鹿威ししおどしの清んだ音が聞こえた。

それまで微かに聞こえていた音がこの時とばかり桐生の屋敷に響き渡り……。その絶妙のタイミングに、桐生老は息を飲む。

「では、娘婿の源次氏と、泉沢元大臣のご子息の件……後始末はお任せします」

「待て！ 曾孫に男が産まれたら、桐生を継がせると約束しろ！」

卓巳の言葉に、桐生老は初めて動揺を露にする。

「だから桐生がどうかじゃなくて……」

太一郎が苛立ち、再び声を荒げそうになった瞬間、卓巳が彼を押さえ横から口を挟んだのだ。

「それは、男の子が産まれてからの相談と致しましょう。ですが先生 二人の息子さんは、そこそこ見込みがありそうですよ」

卓巳の意味深な微笑と含みのある言葉に、桐生老は表情を消した。二百まで生きそうな妖怪は、無言で引き下がったのである。

くわくわくわくわく

「太一郎さん、素敵です」

アルマーニのスーツ姿のまま、太一郎は藤原邸に戻った。

万事上手くいったと聞き、奈那子は満面の笑顔だ。しかも、これまで見たことのない太一郎の姿に、頬を染めうっとり見つめている。

さらに奈那子は「あのおじい様を説得するなんて！」と手放して太一郎を褒め称えた。

半分以上、卓巳のおかげなのだが……。奈那子にそう言っても、謙遜だと思い込んでいるようだ。

最後に、卓巳が桐生老を黙らせた台詞だが……。

「ああ、実はあの妖怪爺さんも婿養子なんだ。だが外に愛人を作って子供まで産ませている。認知してるのが四人。そのうち娘が三人……」

それでは計算が合わない。卓巳は確か二人の息子と言ったはずだ。太一郎がそこを尋ねると、なんと、妻の妹に手を出し息子を産ませているというのだ。もちろん認知はしていない。妻は三年ほど前に亡くなっており、煩く言う人間は身内にはいないが……。

「問題は、その息子が政界入りしていることだ。バレたらスキャンダルになる。甥っ子の名目で、奴もかなりプッシュしているからな」

そんな隠し玉があるなら最初から使ってくれ、と太一郎は思う。

だが、

「どんな切り札も使うタイミングを誤ると価値を失う。奴がお前を認め始めたから、勝負に出たんだ。それと十割勝とうとするな、七割で後は引け。欲張るとゼロになるぞ」

卓巳に諭され、あらためて従兄の凄さを実感する太一郎であった。

「それと、今日、臯月おばあ様にお会い致しました」

「ああ、悪い。俺も一緒に行くつもりが……心細くなかったか？」

「いいえ。優しいお言葉を掛けていただいて……」

そこで奈那子の表情が曇った。そのまま、少しトーンの低い声で話し続ける。

「でも、子供のことをちゃんと話さなくて良かったんでしょうか？」

おばあ様は太一郎さんの赤ちゃんだと思っていらして」

奈那子のお腹には太一郎の子供がいる。

誰が言った訳でもないのだが、臯月はそう思い込んでいた。昨年の、奈那子との件を知ってるからこそその勘違いであろう。

最初にそれを聞いた時、太一郎はすぐに本当のことを言おうとした。そこを卓巳に止められたのである。

臯月は心臓を患っている。昨年、余命一年と診断されたほど重篤ヘヴィウェイトであった。当時の太一郎はそのことを知らず……。今年の一月、臯月が心筋梗塞で倒れた時、卓巳から聞いたのだった。

臯月は意識を取り戻し、こうして自宅で療養出来るまで回復した。だが、油断は禁物だ。すでに医者の告げたタイムリミットは過ぎており、今度大きな発作があったら……そう言われている。

「祖母上は、お前の子供の顔が見られると喜んでゐる。同じ歳のはところなら、兄弟同然に仲良く育て欲しい。そうなれば、まるで夢のようだと言ってるんだ。がっかりさせる理由も必要もないだろう？」

卓巳の言うことは正しい。

だが、太一郎自身が皐月の血の繋がった孫ではないのだ。なのに、「曾孫の為に……」という色々な気遣いを聞くと、申し訳なさに身が竦む。

「万里子さんの赤ちゃんと同じだけの用意を、と言われて……。わたしの父も母も知らん顔なのに、申し訳なくて」

「お前は気にしなくていい。言っただろ？ 俺は心配や迷惑ばかり掛けてきたんだ。でも、結婚と子供のことを聞いて、本当に嬉しそうだった。ばあさんに喜んでもらえるなら……」

「でも、信託財産までは、わたし」

皐月は、出産前に自分の身に何か起きることまで案じたようだ。

太一郎の子供に、信託財産を残したいと言い始めたのである。

「そ、その件は、とにかく万里子さんにでも話してもらってから、さ。だから」

太一郎の口から万里子の名前が出た瞬間、奈那子の瞳が翳った。

「いい方、ですよ。千早物産を紹介して下さったのも、万里子さんとか」

「ああ、ホント世話になりっ放しだよ、頭が上がるねえ。あの人は、俺にとって特別だからな」

その何気ない一言が、奈那子を傷つけたなど……思いもしない太一郎だった。

(36) 駆け引き (後書き)

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

……悪気はないんです。

でも、無神経な太一郎を叱ってやって下さいorz

ある意味、正直過ぎて……前に「馬鹿」が付きますが(^^)(;

引き続きよろしくお願い致します。

(37) 小さな幸福

電柱の上から雀の鳴き声が降り注ぐ。黄色いランドセルカバーを付けた小学生が数人、前の道を走って行った。

九月末　　今日も残暑の厳しい一日になりそうだ。そんなことを考えながら、奈那子は大きなお腹で、ゴミ袋を手にゴミステーションまで歩く。

「ちよつと待て、奈那子。俺が持って行くって」

そんなことを言いながら、太一郎が玄関から飛び出し、後を追いかけて来た。

「大丈夫ですよ、太一郎さん。ゴミ置き場は目の前なんですから」

微笑む奈那子の横に鉄製の低い門があり、門柱には？千早物産社員寮？の文字が。敷地内には二階建てのコーポが六棟建っている。

全て同じ間取りで二DKの家族寮であった。独身向けには別の場所にワンルームのマンションタイプが用意してあるという。

千早物産は今時珍しいほど福利厚生の手厚い企業であった。

太一郎が入社する時、奈那子も千早社長に挨拶をした。奈那子の知っている企業家は金の亡者がほとんどだ。桐生に集っていた連中とは違い、とても優しくそうな方でびっくりした。妻を第二子妊娠中に亡くしたと聞き、奈那子は万里子が幼い頃に母親と死別したことを知る。

そして「娘は私の命だ」と言う、千早社長のような人を父に持ちたかったと思う奈那子だった。

「無理するなよ。今日も時間通りだからな」

太一郎は千早物産の食品定温・チルド倉庫で働いている。到着商品の仕分けや、出荷商品の搬出作業をしているという。以前に比べると勤務時間も減り、睡眠が充分に取れるようになった。そのおかげで体重も戻り、奈那子もホツとしていた。

「はい。太一郎さんも怪我のないように、気をつけて下さいね。いつてらっしゃいませ」

出勤前に太一郎は必ず奈那子の髪に触れ、頭を撫でるような仕草をする。他にも何かしたそうなのだが、それだけで手を引っ込め、「行って来る」と短く言い、背中を向けるのだ。

実を言えば入籍からひと月経つが、再会以降、二人の関係はプラトニックなままであった。それも奈那子にとっては不安の一つで……。

太一郎が見えなくなるまで、その後ろ姿を見送り、奈那子は部屋に戻る。

玄関脇の表札には、

『藤原太一郎・奈那子』

と書かれていて……。

(本当に、太一郎さんの奥さんになったのね)

その都度、小さな幸せを噛み締める奈那子であった。

くくくくくくくく

「出産予定日まで十日以上あるのに入院されたって聞いて……びっくりして」

万里子に少し相談があり、奈那子は藤原邸に電話を入れた。すると年配のメイドが出て、万里子が入院した、と言われたのである。

奈那子が大病院に駆けつけると、万里子は特別室でベビー用のケープを編んでいた。

「三日程、卓巳さんが日本を離れることになったの。もの凄く心配していて……彼のほうが倒れそうなんですもの。少しでも安心してもらおうと思って、入院することにしたのよ。心配させてごめんなさいね」

万里子は苦笑しつつ卓巳の様子を口にする。

そんな彼女の姿に、奈那子はホッと息を吐いたのだった。

万里子のことは羨ましいと思う。でも嫉ましいとか、嫌いだなんととても思えない。万里子ならきつと、助けを求めればいつでも手を差し伸べてくれるだろう。目が合えば必ず微笑み返してくれる女性なのだ。愛想笑いしか知らない奈那子にとって、万里子の微笑みはとても眩しく惹かれるものがあった。

「奈那子さんは異常なしだった？」

「はい。最近少し体重が増えてきているから、よく歩くようになって言われました」

「わたしもそうなの。家事をすれば運動になるんだらうけど……。お邸じゃすることがないでしょう？　ずっと散歩してただけけど。二人で病院内を探検してみる？」

万里子の言葉に二人は声を揃えて笑った。

「ねえ、奈那子さん。何か聞きたいことがあるって言ってなかった？ わたしで良かったら」

そんな言葉に奈那子はいついつい甘えてしまい、

「あの……万里子さんと卓巳さんはどんな風にされてるのか……もし良ければ教えて頂きたい……」

「どんな風について……何をかしら？」

「あの……ですから……お腹に赤ちゃんがいて、夫婦生活……とか」

これまで一つの病院に通院することも出来ず、マタニティ教室に通うこともなかった。奈那子には、妊娠中の不安を相談出来る友達が一人もいない。いざという時に頼れるはずの母親は、生きていても？いない？と同じだ。

奈那子は真つ赤になりつつ、それでも真剣な眼差しを万里子に向けてる。

一方、万里子も赤面しながら……これも性格だろうか、真面目に答え始めた。

「そ、そうねえ……。五ヶ月めくらいに、安定期に入ったからお医者様に大丈夫って言われて……。でも、週に一回程度だったと思うわ。妊娠後期に入ってからは……ちょっと、ね。八ヶ月めだったかしら、挿入は浅めに、中で射精はしないことって言われたら……卓巳さん神経質だから」

それは奈那子も言われたことだった。

何でも、精液には子宮を収縮させる成分が含まれているという。だが、妊娠の経過そのものに問題がなければ、影響はないらしい。ただ、何かの要素が重なれば早産を引き起こしかねないのも事実であつた。

「ちよつと控え目に　してくれたらいいだけなんだけど……男性には難しいのかしら。太一郎さんは何て言ってるの？」

万里子の問いに奈那子は正直に答えた。
「たまに奈那子を抱きたそうにするのだが、結局、何もしいままに終わるのだ、と。」

「時々、思うんです。本当にこの子を産んでいいのかどうか……。太一郎さんは、一年前に中絶した子供の代わりと思っているみたいで……。こんなことなら、あの時に家を出て、太一郎さんの子供を産んでおけば良かった。そうしたら……。」

奈那子の胸に、消えない罪悪感が付き纏う。

太一郎の為だと説得され、簡単に子供を墮ろしてしまった。手術の後で、どれほど後悔したか知れない。もし、次に母親になれる機会が巡ってきたら、今度こそ必ず産もうと心に決めた。

太一郎に奈那子を迎えに来る意思はないだろう。でも、奇跡を信じて待ち続けたい。それがたとえ一生になっても……。

その願いが叶った時、奈那子のお腹にいるのが太一郎の子供ではないなんて。神様はあまりに厳しい。奈那子は子供を墮ろした罰を与えられているようで……。それに太一郎まで巻き込んでしまったのが辛かった。

「子供が産まれた後について仰って下さるんですけど……。太一郎さんの本音は、他の男性の子供を妊娠したわたしなんて、抱きたくないんじゃないかと思って。」

奈那子は次第に声が小さくなり、涙で視界が歪んだ。

その時、奈那子の手に万里子の手が重なった。奈那子が顔を上げると、彼女の瞳にも大粒の涙が浮かんでいる。

「わたしも……子供を墮ろしたことがあるのよ……」

その万里子の告白は、今の幸福そうな彼女からは想像も出来ないことだった。妊娠の原因や、術後の医者 of 診断。

驚きのあまり、声を失う奈那子に、万里子は言葉を続ける。

「判つてすぐに、冷静な判断なんて下せない。強く説得されたら、誰だつて頷いてしまうと思う。わたしは……自分の中にエイリアンが息づいてるようで怖かった。自分の子供を殺してしまったと思つたのは、手術を受けた後だったわ。だから、わたしも思つたの……もし、母親になることが出来るなら、その原因が何であれ、必ず産もうつて。奈那子さん、赤ちゃんは神様の贈り物よ。決して罰なんかじゃない！ たくさん後悔したから、赤ちゃんがママを許して、戻つて来てくれたのよ。太一郎さんの言う通り、赤ちゃんのパパは太一郎さんだわ！」

奈那子は悪くない。子供を産むことは間違っていない。

万里子の言葉を何度も胸の中で繰り返し、頷く奈那子だった。

(37) 小さな幸福(後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

先週はあまりの忙しさに更新一回飛ばしてしまいました…すみませ
んorz

その代わり?と言うわけじゃないんですが、次回、頑張つてR15
もどきでいってみます(苦笑)

ちよつとくらはラブラブさせてあげないと、太一郎が可哀想かな
あと(^^)(:)

ではでは、引き続きよろしくお願い致します。

(38) 誘惑の意味(前書き)

*少しだけ性的な表現があります。ちょっぴりR15でお願いします。

(38) 誘惑の意味

「お帰りなさいませ、太一郎さん」

エプロンをはめた奈那子がニコニコしながら玄関まで出てくる。

「ああ、ただいま」

そんな言葉を返しつつ、

(俺ってこんな幸せでいいのかな?)

家族の存在に、こそばゆい幸福を感じる太一郎だった。

「太一郎さん、お疲れですか?」

太一郎は風呂に入った後、夕飯を食べて、奈那子の代わりに食器を洗う。

ちよつと手伝つと奈那子は大袈裟に喜んでくれるのだ。「ありがとう」「嬉しい」の言葉欲しさに、彼は何でもしてしまう。

会社の先輩には、「女房に上手くコントロールされてるな」と笑われたが……。

太一郎はそれでも構わないと思っている。それは奈那子に必要とされている証だ。家族から必要とされない孤独に比べたら、皿洗いや風呂掃除など大したことじゃない。

「いや。別に疲れてないぜ。何でも言えよ……してやるから」

十時過ぎ、テレビの前に座った太一郎は、後から声を掛けられ振り返った。

風呂上りのせいだろう。奈那子の頬は赤く染まり、湯気が立って

いる。太一郎は立ち上がると奈那子の傍まで行き、タオルで彼女の髪を拭いた。

「なあ、お前……上のほ気せてないか？ あんまり長湯し過ぎんなよ」「それは大丈夫です。でも……あの……太一郎さん。膝とかふくらはぎが痛くて……少し擦って頂けますか？」

はじめは太一郎の顔を見ていたのだが、しだいに俯き、声も小さくなる。

「ああ、それくらい楽勝だよ。ほら、ベッドに行こうぜ。横になれよ」

「はい！ ありがとうございます」

嬉しそうにはしゃぐ奈那子を、照れ笑いを浮かべながら見つめる太一郎だった。

くくくくくくくく

「……って言ったら、きつと撫でてくれると思うの。それだけで、その気になつてくれたらいいんだけど……太一郎さんは卓巳さんと一緒に鈍いから、無理かも知れないわね」

奈那子の相談に万里子はそう答えた。

自分が楽しみたいとか、欲求不満とかではないのだ。ただ、愛する人に求めて欲しい。そして、彼女の身体で満足して欲しいのである。

奈那子自身はやはりお腹の子供が気になるので、気持ちいいとは

思えないかもしれない。

それでも、

「抱き締めて眠ってくれるだけでいいんです。同じベッドで寝てくれないのも不安で」

太一郎は手や足が当たったら怖い、と言ってダブルベッドに奈那子ひとりで寝かせるのだ。これまではずっと布団だったので仕方なかったけれど、さすがに奈那子も気になる。

「太一郎さんで、意外と消極的な人だったのね。リムジンの中であんなことしてるから、もっと大胆なのかと思ったのに」

「あ、あれは……ああいう時もあるんです。その……突然、キスしてきて……でも、そこから先には全然」

そこまで言つて、万里子が誤解したんじゃないかと思い、奈那子は慌てて付け足した。

「以前はそんなことなかったんですよ。去年は本当に……その、顔さえ見たらすぐに……シャワーも浴びさせてくれなくて。もの凄く力強くて……怖いくらい大きくて」

「やだっ！ もう、奈那子さんたら」

万里子にそう突っ込まれ、自分がとんでもないことを言ってるのに気が付いた。

「そ、そういう意味じゃ。本当に大きいのかどうかは……あ、いえ小さいことはないと思うんですけど」

「卓巴さんもそうだと思うの。だから、きっと家系なのよ！」

「あ……そうなんですか？」

「ええ、たぶん」

後から思えば、夫が聞いたなら卒倒しそうな話題に、妊婦ふたりは

花を咲かせたのだった。

くわくわくわくわく

今夜の奈那子は何かおかしい。

膝を擦った後、ふくらはぎを優しく揉み解す。ところが、奈那子は脚を微妙に交差させるのだ。太一郎の視界に真っ白い太腿が入り、気が散ってどうしようもない。

「これくらいでいいか？ あんまりきつく揉むのはヤバイだろ？」

「あ、あの……太腿の付け根が痛い。多分、お腹が大きくなって、るせいなんだろうけど……」

「付け根、を……撫でるのか？」

ネグリジエの裾を開き、内腿辺りを擦るが……。数ヶ月ご無沙汰の彼にはかなりの拷問である。

「あの、もっと付け根のほうか……」

「……」

奈那子が自分でネグリジエの裾をたくし上げた時、太一郎は気付いたのだ！

「ちょっと待て。お前、なんで下着を穿いてないんだよ！ そんなに痛いのか？ サイズが合っていないんじゃないかねえのか？ 俺が穿かせてやるから……腹を冷やしたらどうすんだよ」

その瞬間、奈那子は体を起こして泣くように言ったのだ。

「違います！ そっじゃないんです。ごめんなさい。もう……大丈夫ですから」

そんな奈那子の様子にビビッたのが太一郎である。

（俺、なんかしたのか？ 下着を買う金も無い、なんてことはないよな）

奈那子の悩みを知らない太一郎には、自分がどれほどトンチンカンなことをしてかしているか……さっぱり判らない。

「なあ、奈那子。怒ってるのか？」

「いえ、違います。本当にごめんなさい……わたし、いえ、いいんです」

「良くないって。言いたいことがあるなら言ってくれよ。自慢じゃないが、女心つてやつは俺にはさっぱり判んねえ。でも、お前を傷つけようなんて欠片も思ってないんだ。だから」

「抱いて……くれませんか？」

「え……」

「本当の夫婦になりたいんです」

思い詰めた奈那子の様子に、太一郎は息を飲んだ。

太一郎とて、本当はやりたい。だが、乱暴なセックスしか知らないという自覚がある。夢中になって、奈那子や子供に何かっては取り返しがつかないのだ。

それにやはり、自分の子供じゃない、という遠慮もあった。

不思議と、愛せなかったらどうしよう、とは思わない。血の繋がりが全てじゃないと、太一郎は人生において学んだ。それは藤原家の庭師・柊つばきが、祖父と千代子の間に出来た子供だと知った時、より強く感じた。

柊は実の父より育ての両親を選んだのだ。あの卓巳ですら「血は水より濃い」が、愛情には敵わない」と言っていた。

奈那子の産む子供を愛する自信はある。

だが、太一郎には愛される自信が心もとない。

太一郎はベッドに座ったままの奈那子の隣に腰掛け、必死で言葉を探した。

「あの、さ。中はちょっと怖いんだ……だから、違う方法でお前の身体を愛していいか？」

「違う……方法？」

大きくなった奈那子の胸に、後ろからそつと触れる。出来る限り優しく丁寧に、壊れ物のように扱う。その時にやっと判ったのだ。奈那子は太一郎を誘いたくて、ネグリジェの下に何も身につけていないということに。

「脱がしていいか？ 寒くねえか？」

「はい……大丈夫です」

「なんで下着なしなのか、聞いてもいいか？」

「だって……妊婦用のはブラもショーツも可愛くなくて……太一郎さんがその気になれないのかも、って思ったんです」

(……んなわけねえだろ)

心の中で反論し、太一郎は奈那子を抱いて横になった。

そのまま、取り出した下半身の猛りを、彼女の内股に背後から押し込む。

「た、いちろう……さん」

「苦しいか？」

「いえ」

「これで動いていいか？」

「は……はい」

この体勢なら、子供に嫌われるんじゃないか、という意味不明の羞恥心からは逃れられる。

「ご、ごめん。ホント、ヤル気は満々なんだ。この通り……。でも挿入は怖いんだ。情けねえけど」

「いいえ、太一郎さんがわたしの身体で感じて下されば、それだけでいいんです。必要とされてる。妻でいていいんだ、って思えるから」

「奈那子……」

太一郎にとって、奈那子に頼られることが存在価値だった。それと同じように、奈那子は女性として求められることで、自分の価値を見出そうとしていたのだ。

それを知った太一郎は、彼女の半乾きの髪に頬を寄せ、包み込むように抱き締めた。

「すっげえ気持ちいい」

「わたしも……温かくて気持ちいいです」

「俺、ベッドに寝ても平気かな？」

「そのほうが、わたしは安心して眠れます」

少しだけベッドが軋み、男の荒い息が終着点を迎える。

「なあ……明日もしていいか？」

「はい」

ふたりで過ごす優しい夜
信じていたのだった。

永遠に続く明日を、
この時の彼らは

(39) 我が子

特別室から、赤ん坊の泣き声が廊下に響く。

予定日当日、万里子は超スピード安産で男の子を出産した。太一郎と奈那子がお祝いに駆けつけたのは、その翌日だった。

「本当に可愛いですね！ 王子様の誕生に、卓巳さんはなんて仰いました？」

奈那子も、卓巳が女の子と信じていたのはよく知っている。まさか文句は言つまいが、がっかりしているのではないかと心配になった。

「ええ、産まれる前はね、色々言つてたけれど……今は嬉しくて仕方がないみたい。母子ともに問題ないって言われて、引き摺られるように仕事に行つたわ。とっても忙しい時期だから」

さすがの万里子も少しやつれていて、それでも待望の息子を抱き、満面の笑顔を見せる。

「万里子さんは……本当に大丈夫ですか？」

「ええ。平気よ」

「あの……痛かったですか？」

「すつごく！ 呼吸法なんてどこかに飛んで行っちゃうくらい」

奈那子の隣で太一郎が「マ、マジか？」と青くなっている。

「でも……泣き声が聞こえた瞬間、世界の色が変わつたわ。辛いことはたくさんあったけれど……生きていて本当に良かった。この子がわたしに、生きる意味を教えてくれたのよ」

化粧もしておらず、髪も無造作に束ねただけだが、万里子は輝いていた。

（わたしも……万里子さんのようになれるかしら？）

その日が近づくごとに、奈那子の不安はどんどん大きくなる。太郎を愛すれば愛するほど……。幸せなら幸せなだけ、幸福に不慣れな奈那子は怖くて堪らない。それでいて、父が家を出て離婚間近だという両親や、一人暮らしの祖父のことも気に掛かるのだ。

そんな奈那子の、心細そうな微笑に気付いたのだろう。

「奈那子さんも、もうすぐよ。男の子だったら友達になれると思う。女の子だったら……この子のお嫁さん！」

万里子の楽しい言葉に、奈那子も笑いが零れる。

一方、太一郎は「笑えねえ。ちっとも笑えねえ」とブツブツ呟いていた。

く*く*く*く*

そろそろ授乳の時間と言われ、太一郎は雪音に追い出された。奈那子は後学の為、その様子を見ていたと言うので、太一郎は独りで病院内をうろつくことになる。

「？パパ？つて柄じゃねえよな。？お父さん？か。息子なら？親父？つて言い出すかもな。でも……女の子なら？パパ？つて呼ばれてみてえかも……」

周囲から笑いが零れ、太一郎は我に返った。

そこはエレベーターの中である。見舞い客らしい人たちが乗り合わせていた。どうやら、太一郎は思ったことを声にしていたようだ。その中の中年女性に「頑張つてね、新米パパさん」そう声を掛けられ……。

「はぁ……どうも」

エレベーターが開いた瞬間、階も見ずに飛び出した太一郎だった。

今日の万里子を見て、改めて女は凄いと思った。

男では陣痛の痛みに耐えられない 何かの本にそう書いてあった気がする。万里子も凄く痛かったと言いなから、次は女の子が欲しい、と笑っていた。昨日の今日だ。普通なら「痛い思いはもういい」「しばらくはごめんだ」と考えるだろう。

だが、母親にとって出産は別らしい。

(男には永遠に判りそうもねえな)

とはいえ、さっきの万里子は、ひと月後の奈那子の姿だ。

ああやって子供を腕に抱き、母乳を飲ませ、頬擦りして喜ぶのだろう。そう言えば、風呂に入れるのは太一郎の役目だと同僚に聞いた。だが、あんな小さな物体を湯に浸けるなんて、とても出来そうにない。

(ダメだ、絶対に壊す！ 不器用だし……馬鹿力だし……)

三十分程ぶらついて、特別室に戻る約束である。

最初は一階の売店に行き、コーヒーでも飲もうと思っていた。しかし、途中でエレベーターを降りてしまい……。やたらにうるついでいては、不審者に間違われるかも知れない。

奈那子が出て来るまで、特別室前の廊下で待っていていよう。太一郎はそう考え、最上階に戻ることにしたのだった。そして彼は、予想外の人物と顔を合わせることになる。

何処かで見たとのことのある中年男がそこに居た。

最上階は特別室のみだ。案の定、警備員が飛んできて中年男を階下に追い払おうとする。

「私は桐生源次だぞ！ここに娘が入って行ったから、会いに来ただけだ！」

その言葉に太一郎も男の正体がようやく判った。奈那子の父だ。昨年、太一郎が会ったのは私設秘書の白石だけである。桐生は卓巳とは会って話をしたはずだが、太一郎のことは相手にもしなかった。

？娘を疵物にした血統書つきの駄犬？桐生が太一郎を指して言った言葉だと聞く。

太一郎は一步踏み出し、何と声を掛けるか悩む。奈那子は両親の離婚が秒読みだと、悲しそうに言っていた。

とりあえず、
「桐生さん。あの、藤原太一郎です。どうして、あなたがここへ？」
そして、真正面から桐生代議士 いや、元代議士の顔を見て驚いたのだ。

無精ひげを伸ばしたまま、頬はこけ、目は窪んでいた。収賄罪が疑惑で済まず、桐生老のバックアップが無くなった途端、議員辞職を余儀なくされたという。

無論、泉沢のほうもズタボロで、清二は残った資産をかき集めて海外に逃げたらしい。出来れば二度と戻って来なければいい。奈那子と子供に関係のない場所で、好きにやって欲しいと思っている。

「貴様が……私の計画をボロボロにしておって！ 私の完璧な人生が……貴様と馬鹿な奈那子のせいでお終いだ！」

その言葉に太一郎はカチンと来る。

娘を誑かしたと罵られるのは構わない。だが、清二のような男を婚約者に決め、奈那子にあてがったのはこの桐生である。

「言うことはそれだけか？ 奈那子はもうすぐ臨月なんだぜ。いたわる言葉もないのかよ！」

「臨月？ だからなんだ。お前の時のように、とっとと墮ろせば良かったものを。そうすれば、知られることはなかったんだ！ それが……お前のようなクズと結婚するとは」

太一郎は、こいつは奈那子の父親なんだ、と懸命に自分を抑える。「俺がクズなのは言われなくても判ってる。でも、奈那子はある娘だろ？ 孫が産まれるんだぞ。あの妖怪祖父さんでも、曾孫がどうか言ってたぜ。それをあんたは……」

次の瞬間、桐生は頬を歪ませ太一郎を馬鹿にするように嗤ったのだ。

「あんな女、娘でも何でも無い。何年経っても、奈那子の下が産まれず……。病院に行ったら、私に子供は作れないと言われたさ。あのクソ女、何年も私を騙し続けたんだ！ 浮気して作った子を堂々と産みやがって……」

桐生の目に浮かぶのは憎しみだけだった。

この病院はどうも藤原家とは相性が微妙だ。太一郎は万一に備えて、桐生を特別室の方向にだけは行かせまいと警戒する。

「その文句なら、テメエの女房に言え。奈那子には関係のないことだ」

「言つてやつたさ。母親が母親なら娘も娘だ。簡単に貴様のようならくでなしに脚を開いて、すぐに孕む。泉沢の次男坊に与えてやつたのは一晩だけだぞ。それを」

次の瞬間、太一郎は桐生を殴り倒していた。

理屈じゃない。腹の底から、煮えたぎるような感情が突き上げてくる。太一郎の握り締めた拳が小刻みに震えていた。

「それを奈那子に言つたら……殺してやる」

掠れた声で太一郎は言う。

しかし……桐生は口元を拭くとニヤツと笑い、一際大きな声を出した。

「他の男の子供を亭主の実子にするなんざ、中々出来ることじゃない。母親に良く似た恥知らずな女だ。恩を仇で返しやがって！ 判つたか、奈那子！ お前は私の娘なんかじゃない！ どこの馬の骨か判らん男のガキなんだ！」

桐生の目は太一郎を素通りし、背後の人物を見ていた。

そこには、変わり果てた父の姿に目を潤ませ、立ち尽くす奈那子がいたのである。

(40) 愛から生まれぬ命

いつの頃からだろう、父の奈那子を見る目が変わったのは……。荒んだ目を娘に向ける桐生源次を見ながら、奈那子は考えていた。

母は、小さい頃から奈那子には冷たい眼差しを向けていた。そもそも、娘に関心がなかったのかも知れない。外に出て注目を浴びることが生きがいのような女性であった。

選挙の時だけ、一家は仲の良い家族になる。母は『内助の功』『良妻賢母』の呼び名欲しさに、人前ではことさら夫を立て、奈那子を可愛がってくれた。

その裏事情を知ったのは、奈那子が成長してからのこと。幼い頃は何も知らず、ピアノやバレエ・絵画と習い、コンクールがあるたびに出場していた。マスコミの視線を引くような場所に立つと、必ず両親が来てくれるからだ。そんな時、両親 とくに優しい母の存在を感じ奈那子は幸せだった。

父と距離を感じ始めたのは……おそらく小学校に上がった頃だろう。

それまでも、男の子ならもつと祖父に喜んでもらえたのに、そんな言葉を耳にしたことはあった。だが、それでも父が奈那子に向けてくれる笑顔は本物だったと思う。

しかし、ある日を境にパツタリと無くなった。

だからこそ、小学生の奈那子は自分を責め、両親にとって自慢の娘であろうと懸命だった。余計なこととは言わず、いつも笑顔を浮かべ、両親の命令には全て「はい」と答え続け。

そんな奈那子にとって、人生で唯一、羽目を外したのは太一郎との交際だろう。

最初、太一郎の激しさと乱暴さが、奈那子の目には力強く映ったのである。臆病で弱虫な自分を変えて、？桐生？という柵しがらみから彼女を連れ出してくれるような、頼もしい男性。

もちろん今は、太一郎が見た目と違って繊細なことは承知の上だ。それでもあの祖父と掛け合い、奈那子との結婚にお許しを貰ってくれたのは凄いと思っている。

父は祖父、桐生久義の顔色ばかり窺っていた。

奈那子にはよく判らないが、祖父は政治家としての影響力をいまだに持っているらしい。三年前に亡くなった祖母は……母と同じ冷たい瞳をしていた。奈那子は祖母の視線を感じるだけで、背中が冷たくなるほど汗を掻いたものである。

それに引き替え、祖父は奈那子に優しくかった。でも母が祖父とは疎遠だった為、頻繁には会いに行けなかったのだ。

母は自分に似ていない奈那子を、父にそっくりだと責めた。些細な失敗や、人と劣る点はすべて、父の血だと言い続けてきたのに……。

（わたしは……いつたい、誰なの？）

自分の中に流れる血は、一体誰から受け継いだものなのか。自分はこの世の中に、産まれてきて良かった命なのか。そして、命のバトンを繋ぐ資格が、果たして自分にはあるのだろうか。

ふいに足元が砂のように崩れ始め……奈那子は眩暈を覚えていた。

くくくくくくくく

「この私を無一文で叩き出そうとしたから、お前のことをバラすと言つてやつたんだ！ さすがの美代子も、自分の不始末は親に黙つてたからな。それが、あのクソ爺め！」

美代子は極端に、桐生老に知られることを嫌がった。父娘の確執おやこというものだろう。それには彼も都合が良かった。種無しだと知られたら？ 桐生？ を放り出される。それでは出世の道が断たれてしまふからだ。

その為、二人は長年仮面夫婦を演じてきた。

だが桐生老は夫婦の秘密すら知っていたのである。奈那子の出生を口にしない、という条件で桐生老は源次に金額を提示してきた。

「これ以上マスコミに桐生の名前が出るのは好ましくない、だと？ 刑務所にブチ込まれなくては、はした金で政界から去れと言いやがった！ 秘書の頃から、三十年以上も桐生に尽くしたこの私を、お前の祖父さんは虚仮こぼにしたんだ！ それも、四十にもならん甥っ子に、桐生の地盤を継がせるとぬかしやがって！」

太一郎は奈那子の前に立った。少しでも彼女を庇いたかったからだ。しかし、彼女は太一郎の横をすり抜け、桐生の横にしゃがみ込む。

「お……とうさま。もう、止めて下さい。わたしからお祖父様にお願ひして参ります。ですから」

奈那子は蚊の鳴くような声で囁き、父の手を取った。

だが、そんな娘の思いやりを桐生は振り払う。

「いらん！ 刑務所なんぞ真つ平御免だ。貰えるだけ貰って来たが……。お前にだけは教えてやろうと思つてな。お上品な仮面を被つたお前の母親は、ただのメス豚だ！ お前の父親が誰かも判らんそつだ。いいか、腹のガキに、間違つても私が祖父だなんて言つんじやないぞ！」

警備員たちは、桐生の名前と太一郎たちの様子に、追い払うかどうか態度を決めかねている。だが太一郎は、小刻みに震える奈那子をこれ以上見ていられなかった。

無言のまま桐生の襟首を掴み、馬鹿力を発揮してエレベーターまで引き摺って行く。

「娘じゃないと……産まれる前に判つてたら……お前なんか殺してたんだ！」

エレベーターが開く寸前、桐生はそう叫んだ。

太一郎はそんな桐生をエレベーターの中に叩き込む！

「俺は貴様の首を絞めてやりてえ……奈那子と子供がいなけりや、絶対に殺^やつてる」

操作盤の横を拳で殴りながら、太一郎は唸^{うな}った。

そんな太一郎の背後から、二人の警備員が走り寄る。彼らは慌ててエレベーターに乗り込み、桐生を両側から挟むように押さえ込んだ。

「こいつを外に叩き出せ！ 病院内立ち入り禁止だ。卓巳が出したブラックリストのトップに、この男の名前を載せるんだ！」

太一郎は警備員を怒鳴りつけた。どうにも、怒りのやり場がない。

閉まりかける扉の隙間から、狂ったような笑い声が聞こえた。誰に言いたいのか、「ざまあみる！」と叫び続ける桐生だった。

最上階フロアに静寂が戻る。

太一郎は息を吐きつつ、奈那子を振り返った。思った通り、彼女は壁にもたれ掛かるように、座り込んだままだ。

(やっと……ここまで来たのに)

間もなく二十五歳になる太一郎と二十二歳になったばかりの奈那子。

決して子供ではないが、まだまだ一人前の大人とも言えないだろう。しかも、太一郎は人を気遣う草草や優しい言葉が苦手で、奈那子は人に甘えたりねだったりすることが難しい。

そんな二人が、自分たちの力で生きる糧を得て、ようやく新しい人生を歩き始めたのである。

奈那子が？良い娘？になろうとした努力は、桐生の言葉で粉々に砕かれた。深く傷ついたであろう妻に、どんな言葉を掛けてやればいいのか。

奈那子を見つめたまま、太一郎はゆっくりと歩きながら考える。

その時 太一郎は微妙な違和感を覚えた。何かがおかしい。トクン、と心臓が高鳴る。

「……奈那子……？」

奈那子は今日、淡いブルーのマトニティワンピースを着ていたはずだ。それが

(なんで……スカートが赤いんだよ)

太一郎の心臓は、みるみるうちに早鐘を打ち始めた。最悪の予感に膝が震える。口の中で「奈那子、奈那子」と繰り返すが……。

次の瞬間、奈那子の体がグラツと傾いた！

「ななこーっ！っ！！」

(41) 産声

奈那子の上半身が床に倒れ込む寸前、太一郎は彼女を抱き留めた。

「奈那子!? 奈那子っ!」

馬鹿の一つ覚えと言われても、それ以外の言葉が出て来ないのだ。奈那子は眉根を寄せ、歯を食い縛っている。額にはびっしりと汗が浮かび……。まるつきり意識がないのではなく、とても返事が出来る状態ではないようだ。

すぐに医者を呼んで来なくては 太一郎が床に手をついた瞬間、ヌルツとした物が指先に触れた。

生温かい、真紅の液体が奈那子から流れ出ている。陣痛より先に破水が起こるケースは太一郎も勉強した。だが、これほどの出血が起こることは想定外だ。尋常ではない事態に、太一郎の指は震えていた。

「……………奈那子……………誰か、助けてくれ……………だれか」

立ち上がりたのに、腰から砕け落ちそうになる。大声を出すつもりが、喉から空気が漏れるような声しか出てくれないのだ。

その時、太一郎の耳にガラスを劈くつんような悲鳴が聞こえた。

声の主は雪音だった。

廊下の異変に、最初は奈那子のこと引き止めたのだ。しかし、奈那子は桐生の声を聞き、病室から飛び出してしまった。だが雪音には、万里子と産まれたばかりの赤ん坊を危険から遠ざける義務が

ある。彼女はドアを硬く閉め、侵入者から守るつもりで身構えていたのだった。

「奈那子さんっ！ 太一郎様、どうしてこんなっ！？」
「……医者を……頼む、早く医者を」

奥から万里子がナースコールをして医者を呼ぶ声が聞こえ……。

く*く*く*く*

卓巳がその連絡を受けたのは会議中であつた。

前日にとんぼ返りした北海道での案件について、報告を聞いていた時に、秘書の中澤朝美が病院からの電話を告げたのだ。

(やはり、病院を離れるべきではなかつた！)

瞬時に、万里子か息子に何かあつたのだと思い、卓巳は後悔した。しかし、電話の相手が万里子だと知り、少しホツとする。

ところが……半ばパニックの万里子から聞き出した言葉に、卓巳は戦慄を覚えた。

わずか三十分後、病院の入り口で卓巳を出迎えてたのは雪音だつた。彼女を万里子の元に戻らせ、卓巳は一人で手術室に向かう。

手術室 分娩室でないことが最悪の事態を意味する。忙しく動き回る医療関係者の中にあつて、太一郎は廊下のベンチに放心状態で座っていた。

その姿は……まるで人を殺して逃亡中の犯人さながら、血塗れだ。

「太一郎。桐生老はすぐに来るそうだ。母親は、マスコミを避けて海外にいる。連絡はついたが……」

葬儀なら予定を繰り上げて戻るけど……。

そんな言葉を、卓巳はとて太一郎に伝えることは出来なかった。

？ 常位胎盤早期剥離？
じょういたいはんそくきはくり

卓巳が病院側と連絡を取り、確認した診断名だ。

当初、出血量から前置胎盤が予想された。だが、つい先日の診察で胎盤の位置は正常と確認されたはずなのだ。精査の結果、胎盤の剥離が確認される。外出血の多さは剥離が子宮口に近い場所だったことが原因と判った。

倒れた場所が病院であったこと。それも、救急体制が整ったICUのある大学病院であったのが不幸中の幸いとなる。奈那子は緊急帝王切開が決まり、つい先ほど手術室に運ばれたのだ。

「太一郎、とにかく着替えて来い。その格好じゃ、女房子供と対面出来んぞ」

卓巳はそう言うと、病院の売店に用意されているジャージを差し出した。

だが、太一郎は力なく首を振る。

「太一郎っ！」

「奈那子が……奈那子が言ったんだ」

卓巳に襟首を掴まれた途端、太一郎が掠れる声で話し始めた。

「帝王切開って言われて、ストレッチャーに乗せられて……奈那子は言った。……もし自分が死んでも、この子を恨まないで欲しい。この子にだけは産まれて来なければ良かったとは、言わないで……って」

そう言うと、太一郎は力なく床に崩れ落ちた。

自分より大柄な従弟が、小さな子供のように床に突っ伏して泣き始める。この一日前、無事父親になった卓巳には、これ以上今の太一郎に掛ける言葉が見つからない。

常位胎盤早期剥離の原因は不明とされている。幾つかの可能性はあるらしいが、前置胎盤と違うのは定期検診では判らない点だろう。万里子の母は前置胎盤で母子とも亡くなっている。今から二十年近く前は、まだ超音波でそこまでの判断が出来なかった。現在なら、定期検診で防げたかも知れないアクシデントだ。

だが現在においても、胎盤の早期剥離は突発的に起こる。事前の予測がつかず、転倒など外的要因でも起こるといふ。

今回の場合、父親の言葉による心理的な要因が大きいと思えるが……。それを証明する手段はなかった。

「俺の……せいだ。あんな野郎に好き放題言わせて、黙らせることの出来なかった、俺の」

「太一郎、それは違う」

「全部俺のせいなんだ！ 奈那子は俺の本性を知ってるから……あの男と同じように、俺が子供を傷つけると思って……」

「しつかりしろっ！ 誰もそんなことは言っていない！」

「金がなくて、ちゃんと病院に行かせてやれなかったから。いや、俺が中絶させたことが原因なのかも知れない。俺のせいで……俺が

「奈那子を死な」

その不吉な言葉を、卓巳は力尽くで黙らせる。

次の瞬間 手術室から小さな声が聞こえた。

初めは聞き違いかと思うほど、あまりに微かで……。二人はそのままの姿勢で息を止め、聴覚に全神経を集中させる。卓巳は心の中で手を合わせ、滅多に祈ることのない神に二日連続で祈りを捧げた。

約一分、男たちの緊張の糸が切れそうなほど張り詰めた、その時。

そこに確かな命が誕生したのだ。

人々の鼓膜を震わせ、産声が響き渡ったのである。

くくくくくくくく

「産まれた？ 本当に……無事に産まれたんですね？」

万里子は病室前の血だまりを見た時、倒れそうなほどショックを覚えた。

医者が駆けつけ、奈那子を運んで行く所だったのだが……。彼女自身の母親の例もある。万里子はすぐさま卓巳に連絡を取ったのだ。

「ああ、大丈夫だ。太一郎なら絶対に息子だと思ったんだが……」。

まあ、娘だとしても、母親に似れば美人になるだろう」

卓巳は少し機嫌悪そうに、それでいて憮然としている。

その理由が、太一郎に娘が産まれたことであるならいいのだが…

「あの……奈那子さんは？ 母子ともに問題ないんですね？」

「心配は要らない。緊急帝王切開になり、出血が多くて輸血した為にすぐには動けないが……。太一郎も彼女を案じて、ずっと傍にいる。君の体調が安定して、向こうも落ち着いたら見舞ってやるといい」

卓巳はそう言うと、何もなかったかのように息子に歩み寄った。

「結人、パパだよ。今日は逢えないかと思ったが、ラッキーだったな」

ニコニコ笑いながら息子の頬に触れる。

「ゆうつ？」

「人は独りでも生きていけるが、幸福になれない。同じだけ苦しみや悲しみ、別れも経験するかも知れない。だが、人には人が必要なんだ。この子には人と人を結ぶ架け橋になって欲しい。だから……結人と名付けた。駄目かな？」

お姫様を唱えながら、おそらく、数ヶ月は悩んで決めた名前だろう。万里子はそれを口にせず「駄目じゃないわ。とっても素敵」そう小さく呟いた。

「皆を幸福の糸で結んでくれる。わたしはそう信じています」

卓巳の嘘に気付きながら、精一杯の微笑みを返す万里子だった。

(42) 命の灯

産声を耳にした瞬間、太一郎は卓巳と手を取り合っていた。

卓巳の存在を知った時、太一郎の胸に嫉妬と羨望を纏った悪魔が棲み付いた。万里子を欲しいと思った後は、彼自身が悪魔と化していたように思う。

そして藤原家から離れ、太一郎の中に自尊心が芽生えたのだ。今度はその為に、素直に頼ることが出来なくなっていた。

だが、太一郎の窮地に卓巳は駆けつけてくれた。そして今も……あまりの感動に声も出ない太一郎の肩を抱き、卓巳は一緒に喜んでくれている。

いつか もし、いつの日か、卓巳や彼の息子が困った時は、何をおいても必ず駆けつけよう。太一郎はそんな想いを胸に刻み込む。

そして手術室の扉が開いた時、喜びと安堵は脆くも崩れ去る。

く*く*く*く*

「それは……一体、どういうことか……よく」

産まれたのは女の子と教えてもらい、おめでとつございます、と言われた直後のこと。太一郎が口を挟む間もなく、医者は緊迫した表情で言葉を繋げた。

「母子ともに危険な状態が続いています。お子さんはどうにか取り出しましたが……新生児仮死状態でした」

奈那子の症状は非常に重いものであった。

子宮はカチカチになり、胎盤の剥離面は三割以上に及んでいたという。もしこれが自宅で起こり、救急車で運ばれて来たなら……おそらく子供はすでに死亡していただろう、と医者は告げた。

子供は三十五週目で二千グラムに少し足りない。取り出した直後は自発呼吸が出来ず、気道を吸引して呼吸を補助した。それで産声を上げることが出来たのだ。しかし、その後も弱く不規則な呼吸が続き……。娘は保育器に入れられ、すぐさまNICU 新生児特定集中治療室 に運ばれたのだった。

一方、奈那子は……。

「現在経過をみている段階です。このまま出血が止まればよいのですが……。止まらない場合は、奥様の安全を第一に考え、子宮の全摘出という可能性もあります」

その言葉に、太一郎は愕然とするだけだった。

ガラス越しに横たわる小さな娘の姿を確認した後、太一郎はIC

U 集中治療室 に移された奈那子の傍に行く。

卓巳は万里子に事情を話してくると言っていた。

「万里子には母子ともに無事だと伝える。私は嘘つきになる気はない。二人とも必ず助かる。たとえ何があっても、お前だけは絶対に諦めるな！」

卓巳の言葉を何度も思い出すが……。

医者は、今回のケースだと子供の二人に一人は亡くなる、と言っ

た。まだまだ予断を許さない。容態が急変したら連絡します、と院内で使える携帯電話を持たされた。

ICUには専用のガウンとキャップを着用しなければ入れない。指の一本一本まで丁寧^{ていねい}に洗い、履物も替えて入室する。

そしてベッドに横たわる奈那子は、今にも消えそうな顔色をしていた。

太一郎の胸に、喜びより後悔が湧き上がる。何もかもが、桐生の愚行すら自分の責任に思えてならない。

そもそもの始まりは、奈那子に対する愛情ではなかった。その想いが、何より太一郎を苛^{さいな}んだ。

どれくらい、無言で見つめていただろう。

「た、いちろう、さん」

奈那子の瞼が微かに動き、掠れた声で夫の名を呼んだ。

「奈那子……目が覚めたか？ 気分は悪くないか？」

「わたしの……赤ちゃん……」

全身麻酔で産声も聞けなかったのだろう。奈那子は真つ先に子供の心配をする。

「女の子だよ。小さいけど、ちゃんと産声を上げたんだ！ きっと、すっげえ美人になる」

太一郎は懸命に明るい声を出した。

「……抱っこ、出来ない？」

「それは……」

「早産だったでしょう？ 小さめの赤ちゃんは保育器に入れて、様子を見ることになってるのよ。お母さんが早く元気になって、母乳を飲ませに行かないとね」

口籠もる太一郎の横から、看護師が答えてくれた。

すぐに数人の医者がやって来る。彼らは奈那子の体に繋がれた、たくさんのモニターをチエックした。極めて機械的ではあるものの、その表情から緊張が消えることはない。

そして、

「藤原さん。先ほど申し上げました通り、経過が思わしくありません。手遅れにならないうちに、子宮の全摘出が望ましいと思われます。奥さんも、よろしいですね？」

そう告げたのだった。

奈那子の命には替えられない。太一郎が頷こうとした時、

「なんとか……残せんせんか？ わたし、どうしてももう一人産みたいんです……お願いします」

奈那子は、思いのほかしつかりした声でそう言った。

「奈那子！ お前、そんなこと言ってる場合じゃ」

「だって……太一郎さんの子供、産みたいの。この子も大事よ……でも、あなたの子供を産めないなら、妻ではいられない……」

それは、後継者が必要な家に生まれた者の習性かも知れない。後継ぎが、と言われ続けた太一郎にもよく判る。太一郎の妻でいる為には、彼の子供を産まなくてはならない。奈那子がそう思い込んで無理はない。

そして彼女は、父親の言葉にも深く傷ついていた。

『他の男の子供を亭主の実子にする……母親に良く似た恥知らずな

女だ』

理屈ではなく。太一郎の子供を産んでこそ、自分たちは本当の家族になれる。……奈那子は切々とした眼差しで太一郎を見つめた。

太一郎はグツと息を飲み込んだ。そして奈那子の手を優しく握り、二カツと笑ってみせる。

「子供の名前だけど……うちのばあさんから一字貰って？美月^{みつき}？つてどうかな？ 藤原家の曾孫だし、名前貰ったって言ったら、喜んでくれると思うんだ」

「太一郎……さん？」

「俺には姉妹もないから……女の子のことはよく判んねえ。それに、本当にちっこいんだぜ。触ったら壊しそうだし……俺には母乳なんてやれないし……」

笑っているつもりが……太一郎の開いた瞳から、ハラハラと涙が流れ落ちる。

それは止め処なく溢れ出て、彼女の手を濡らして行く。

「頼む。頼むから、俺たちのために……諦めてくれよ。三人で生きようぜ。俺はお前の親父とは違う。お前だって、お袋さんとは違うだろ？ 俺と……美月のために」

奈那子の頬がふわっと綻び、こめかみに一筋の涙が伝った。彼女はゆっくりと頷き、そのまま静かに目を閉じた

刹那。

容態の急変を告げる警告音がICUに鳴り響いた。

くくくくくくくく

廊下にいたのは奈那子の祖父、桐生久義だ。

「話は聞いた。あの源次め……ただでは済まさんぞ」

腹の底から唸るような声を出す。

だが、今の太一郎には呪いの言葉すら苦痛であった。

ただ、やり直したかっただけなのだ。

自分の犯してきた罪を悔い改め、償いの道を選んだつもりだった。もしこれが太一郎の悪行に下された罰であるなら、神様は間違っている。太一郎自身の腕や足を持って行けばいい。諸悪の根源である男性自身を切り落しても構わない。なのに、奈那子を苦しませ、絶望に追い込み、尚且つ命まで奪おうなんて……無情にもほどがある。

太一郎は真剣に願っていた。可能なら、自分に残された命全てを、奈那子に差し出したい。娘の……美月のためにも。

名前を付けることに遠慮と躊躇いを感じていた。だが、そんな太一郎の思いが、奈那子に疑惑を抱かせたのかも知れない。そう思った太一郎は、あえて皐月から名前を貰ったのだ。自分の子供だ、と思いを籠めた？ 美月^{なまえ}？ であった。

その時、彼が手にした携帯から着信音が流れた。

(42) 命の灯 (後書き)

御堂です。

ご覧頂きありがとうございます。

次回で最終話となります。

よろしくお願ひ致します m ()
m

(43) ありがとう

生まれてから一週間、太一郎はほぼ病院に泊まり込んだ。

美月のいるNICUに三度呼び出され、一度は危篤とまで言われたが……。

くくくくくくくく

「紙おむつは買った。おしりふきも買った。後は、粉ミルク……」

太一郎は独り言を呟きながら、ドラッグストアで買い物をしていった。

一見して判る仕事帰り……。

離乳食の棚の前で少し立ち止まる。美月は間もなく生後五ヶ月、だが丸一ヶ月早く生まれたので、修正月齢は四ヶ月。一ヶ月以上入院して、十一月の終わりにやっと退院した。体重は五キロを少し超えたくらい、首もやっとすわりかけてきた程度だ。

育児書には五ヶ月くらいから離乳食を始めましょう、とある。

(俺が焦ってもしょうがねーか)

太一郎は手にしたパッケージを棚に戻し、小さくため息をついた。比べたくはない。それが如何に愚かで馬鹿げているか、彼自身が一番判っている。ただ、不安なだけだ。一日早く生まれた結人は正月を過ぎた頃には首がすわっていた。今はもう左右に寝返りもする。泣き声も笑い声も大きい。

だが美月は……どちらかと言えば泣かない良い子だ。独りで面倒を見ている父親を気遣っているのか、と思えるほど。太一郎はそれが心配でならなかった。

退院の時、出産直前の酸欠状態は脳の発達に障害を残す可能性がある、と言われた。すぐに判断は出来ない、しばらく様子を見ましよう……それは親にとって、かなりの精神的負担であった。

年明けまでは、父子で藤原邸に住まわせて貰っていた。

さすがに、新生児の面倒を見ながら仕事には行けない。万里子の父・千早社長は育児休暇をくれると言った。だが、入社間もない太一郎にとって、度を過ぎた特別扱いは彼自身が働き辛くなるだけである。

今は、出勤前に美月を万里子に預け、仕事が終わるとその足で迎えに行く。あんなに心配していた入浴も、太一郎は独りで出来るようになっていた。

卓巳や万里子にはもう充分世話になっている。親として、可能な限り頑張りたいと太一郎は思っていた。

「ほうら、美月ちゃん、パパのお迎えよ！」

藤原邸にいる時の美月は、衣装をとっかえひっかえのお姫様扱いである。

万里子や雪音は、卓巳が揃えたベビー服が無駄にならずに良かったと笑う。だがその雪音も、先月妊娠が判明した。今月末には宗の勤務する北海道で結婚生活を始めるという。

「卓巳さんは、これを機に資格をもったナニーを雇うと言い出したんだけど……」

卓巳は乳母ナニと看護師、保育士など複数雇い入れようと計画したらしい。だが、子供は自分の手で育てると万里子に一蹴され、断念したと聞く。

その代わり、子育て経験のある女性や体力のある若い女性を、数名メイドとして雇い入れることに決まった。

「茜さんは……何でも色々あつて、ご実家のお店を手伝うことになったんですって。残念ですけど、お母様と一緒に断わりに来られたのよ」

万里子は茜の一件に、太一郎が関わっていることは知らないままだ。

本当に母親の傍から離れられなくなったのか。もしくは、太一郎の正式な結婚と子供が産まれたことを聞き、会いたくなかったのか。どちらにせよ、二人の歩く道は僅かに掠っただけ……重なる運命ではなかったのだ。

「でも、太一郎さん。明日は大事な日なんだから……今日くらい休んでも良かったんじゃない？」

「そうは行くかよ。慶弔休暇は明日から一週間取ってるんだ。俺がきっちり働いて、生活基盤を安定させないと……奈那子が安心出来ないだろ？」

真面目に働き始めて一年が過ぎた。

どうやら太一郎は、何事も中途半端には出来ない性格らしい。期待に心えられない苛立ちから、放蕩の限りを尽くしたのも、何事も深刻に考える性質たちゆえだろう。

仕事の覚えは決して早いほうではない。だが、彼の真摯な姿勢と無骨さが、仕事仲間には受け入れられて来ている。千早社長も、将来的には営業や企画も覚えて行けばいい、と言う。

当初、出世を目指すつもりなど全くなかった。

でも今は、それが家族のためになるなら頑張ってみようと思いつめていて。それも藤原で自動的に貰える肩書きではなく、自分の力で何かを手に出れたなら……。

『どうせ、俺なんか』

……長年、彼を煩わせ続けた劣等感が、少しずつ消え始めている。

「美月！ 明日はメチャクチャ可愛いカッコしような。ママが待ってんだから……いつも以上に笑えよ」

美月は判ってるのか、「ママ」の単語を聞くとニコツと微笑むのだった。

くくくくくくくく

奈那子は子宮を摘出したものの、合併症を併発した。

生存確率がどんどん下がる中、太一郎の顔を見るたびに美月の様子を尋ねる。

「美月ちゃんは大丈夫かしら？ ちゃんとミルクを飲んでる？」

自らが苦しい中、奈那子は美月に初乳を与えるため、必死で搾乳していた。

会わせてやりたい。

太一郎は何度そう思ったか知れない。だがその美月は生死の境を

彷徨っている。呼吸器を外すことも出来ず、小さな体に隙間なく電極を貼られている姿など、写真に撮って見せることすら出来ない。

「全然問題ないよ。ただ、小さいから外に出すことが出来ないだけなんだ。早く元気になって一緒に行こうぜ」

その前夜、娘の危篤を告げられ、太一郎は一睡もしていなかった。峠は越したものの、まだ安心は出来ないとわれ……病院の廊下で独り、泣きながら夜を明かした。

奈那子が始めて娘を腕に抱いたのは、出産から一ヶ月のこと。

そして季節が冬に向かうと同時に、奈那子の体は弱まって行き……。

くくくくくくくく

太一郎は美月を抱き、白く長い廊下を歩いていった。

鉄製の扉があり、開くと中庭に出る。その瞬間、春一番が少し伸びた太一郎の髪をふわっと撫でた。ひと月前の身を切るような木枯らしが嘘のようだ。

冬の次は必ず春が来る　ただそれだけのことが、太一郎の胸をじんわりと温かくする。

中庭には細長い赤いカーペットが敷かれていた。左右に白を基調としたパステルカラーの花が飾られ、カーペットの終点にあるのは祭壇だ。

「遅かったな」

太一郎に声を掛けたのは卓巳である。

黒のデイレクターズスーツを着て、ウエストコートとタイはシルバーグレイ。何を着せても嫌になるほど絵になる男だ。

「美月は家から着せて来たんだけど……。俺は来るなりコレだよ。なあ……。こんなに派手にしていいのか？ 仮にも病院だろ？」

「別にドンチャン騒ぎをやるうって訳じゃない。入院患者も嬉しそうに窓から見てる」

卓巳が指差した先には大勢の？見物客？がいた。

「俺は別に見世物になりたいわけじゃ……」

「お前の希望は二の次だ。今日は……。頑張った花嫁のために、願いを叶えてやる日だろう？」

そう言つて卓巳は太一郎の背後に視線を移す。

そこには 車椅子に乗ったウェディングドレス姿の奈那子がい
た。

合併症に苦しみながらも、奈那子は危険な状態を乗り越えたのだ。美月を思い切り抱き締めたい。もう一度、太一郎と一緒に暮らしたい。その一念だった。もちろん、まだ完全に良くなった訳ではない。そんな奈那子は、太一郎に一つの願い事をする。

「将来、美月に見せるために、結婚式の写真を撮りたいの」

退院してからでも……。太一郎はそう思ったが、
「いいぜ。じゃあ、せめて外に出られるくらい元気になったら、病院で写真を撮らせて貰えるように頼んでやるよ」
奈那子の気持ちがあ上向くなら、と笑って応じたのが一ヶ月前のことだった。

純白のドレスは奈那子のイメージそのものだ。どんな色にも染まるように見えて、その主張を失わない。清楚で儂い色であった。

太一郎と美月を見るなり、花嫁は蕩けるような微笑を浮かべる。

「太一郎さん……とつても素敵です」

「そ、そうか？　なんかペンギンみたいに見えないか？」

一生着ることはない、と思っていたフロックコートだ。初めて巻いたアスコットタイが、かなり恥ずかしい。

「いいえ。ねえ、美月ちゃん、パパはとつてもカッコいいわよね」

奈那子は手を伸ばし、美月を一度膝の上に乗せてから抱き締めた。滅多に会えなくても、母子の絆はワイヤーロープで繋がれたように頑丈だ。多分そこに、無償の愛があるせいだろう。

「美月ちゃんも、ママとお揃いね。とつても可愛いわ」

美月のほうは淡いピンクで、ティアラの代わりにヘッドドレスを付けている。

「だろ？　めちゃくちゃ可愛いんだよ、美月は。この歳でこんなにドレスが似合うなんて、ありえねえ」

脇に立った卓巳が「親馬鹿全開だな」とボソツと言う。

そこを万里子は肘で突付きつつ、

「ねえ、太一郎さん。美月ちゃんが可愛いのは判るんだけど……」

万里子が口をギョツと結び、少し不機嫌そうに太一郎を睨んでいる。

最初は何のことが判らず……万里子の横で小さく首を動かす卓巳を見て、ハッとする。

「も、もちろん、美月より奈那子のほうが可愛いつて言うか……綺麗だ。ホント、俺には勿体ないくらい」

「ありがとう……太一郎さん」

頬を染めた奈那子は神々しいまでの美しさだった。

この日、太一郎の両親は結婚式に合わせて帰国した。

両親に美月の出生については話していない。話す機会がなかったせいもある。頑なだった母・尚子も、北京では穏やかな暮らしをしているという。

尚子は多くの言葉は口にせず、ただ、孫のためにとプレゼントを差し出した。それは、赤ん坊が口に入れても構わない、柔らかいウサギのおもちやであった。

「……ありがとう」

太一郎はその言葉を初めて母に伝える。

それは第一歩であった。

その一方で 奈那子の父はあれ以来、消息不明である。どうやら、桐生老の報復を恐れて姿を消したらしい。

そして母・美代子は娘が本当に死に掛けていることを知り、慌てて帰国したのであった。

奈那子の父は地方出身の大学生だった。桐生の選挙事務所でアルバイトをしていて、結婚間もない美代子と出会う。妊娠した時、美代子は本当に夫の子供だと思ったのだ。ところが、予定日から二週間も遅れて奈那子は産まれ……。その時はじめて、美代子は真実を知った。

「あの人は、わたくしに逃げようと言って下さいました。でも、夫の子供がお腹にいるのに……あなたのために諦めた人なのに。あまりにも皮肉で……父も夫も、そしてあなたまで憎んでしまった。……ごめんなさい」

彼は奈那子の存在を知らぬまま、風の噂では十年ほど前に結婚したと聞く。

ところが源次は、自分を桐生家から追い出せば、相手の男を調べ上げて破滅に追い込むと言ったのだ。美代子は、心当たりは複数で誰だか判らないと答えざるを得なかった。

拳式直前、美代子は花嫁姿の娘の手を取ると……。

「若いけれど、誠実な方でした。穏やかで、温かくて、あなたは……本当にそっくりだわ」

美代子は最後まで？愛？という言葉は使わなかった。それが彼女なりの誠意なのか、それとも愛情なのか、鈍い太一郎には判るはずもない。

「じゃあ美月が太一郎さんに似たら……照れ屋さんでちょっと不器用で、でも責任感の強い優しい子になりますね」

奈那子の言葉に太一郎は目が熱くなる。

「そ、そんな……俺は……俺なんか似たら……」

「最悪だろう」

絶妙のタイミングで突っ込む卓巳に、結婚間近の雪音が涙ぐみながらフォローする。

「そんなことありませんわ、旦那様！ 見た目が母親似でしたら……性格は太一郎様に似ても」

「ゆ、雪音さん、それはちよつと」

万里子が止めに入り、皆で勝手なことを言っている。

いよいよ式が始まると聞き、皐月も車椅子で表に出て来た。朽ち掛けた器に、曾孫たちは命の泣き声を注ぎ込む。そのおかげだろうか、皐月は目覚しい回復ぶりであった。

三月の陽射しを受け、中庭の木々が少しだけ煌いた。芝も真冬とは色合いが違う。全てが命の証だ。

生きていて良かった。どうせ償える罪ではないから、と諦めなくて良かった。そんな想いが込み上げ、車椅子を押す手が微かに震える。

「太一郎さん……わたしと美月を、助けてくれてありがとう」

太一郎はこの日？本物のヒーロー？になった。

n
}

}
f
i

(43) ありがとう(後書き)

御堂です。

最後までご覧いただきありがとうございました。

番外編にも関わらず、12万字を突破してしまいました(^^;) しかも…ちよつと待て、これがロマンスか?という展開:orz うーん、何と言いますか「太一郎・更生ストーリー」に改題したほうがいいかも知れません。

太一郎の未来はちよつと時間を空けて、書きたいと思います。

最後に、たくさんの作品の中から拙作をご覧下さいまして、本当にありがとうございました。

みなさまに心よりお礼申し上げます(平伏)

御堂志生(2010/12/21)

番外編「ある女の末路」

(たった三ヶ月が……なんて長いのかしらっ)

三ヶ月はおろか一ヶ月を過ぎたばかりの九月末。

ジリジリ続く残暑と同様に、名村郁美は苛々しながら毎日を送っていた。

八月末、太一郎は名村クリーンサービスを正式に退職し、あのアパートも引越して行った。一緒に住んでいた女と入籍したと聞くお腹の子供の父親は、マスコミで騒がれていた何とかという大臣の息子。週刊誌にネタは売れたかったが……。

(まずは、この小切手をお金に替えなきゃね)

都内は厳しいが、地方に行けばマンションくらい楽に購入出来る。新しい車も買って……。残ったお金で商売も始められる計算だ。

名村の財産も惜しいが、全部合わせてもこの金額の半分にもいかないだろう。しかも、妻の取り分はその半分。等を上手く焚き付ければ、もう少しは増えるかも知れない。でもそれは、平均寿命を考えたら十年以上先なのだ。

(冗談でしょ。そんなに待ってたら、五十近くになっちゃうじゃない)

今度は水商売じゃなくブティックでも始めよう。郁美はこれまでの不行状を棚に上げ、薔薇色の未来を想像していた。

くくくくくくくく

「郁美、これは何だ！」

そう言って突きつけられたのは一枚の写真。先週末、等とラブホテルに行った時のものだ。

「ご、合成よ。いやあね。誰かしら、こんな悪ふざけ……」

郁美は名村を落とした時の手管を思い出しつつ、息を止めて涙を浮かべた。

「あたしにはあなたしかいないの。水商売の借金地獄から救ってくれたのはあなただもの。誰とは言わないけど、会社の男性に誘われることはあったわ。それを断わったから……だからこんな酷い中傷を」

名村の膝に手を置き、甘えるような仕草で見上げた。

(ここで涙の一つもこぼせば……)

そう思った郁美の頬が僅かに引き攣る。なぜなら、名村の瞳には少しも同情めいた色が浮かんでいないのだ。可哀想な女、その芝居が通じないとなると。

「郁美……じゃあ、こっちも合成と言うのか？」

写真は一枚だけではなかった。あちこちで色んな男にしな垂れかかる郁美の痴態。最悪なのは、夫の仕事中に自宅に男を連れ込んだ写真。スリルを楽しみたくて、二階のバルコニーで立ったまま楽しんだのは不味かった。周辺のビルから望遠で撮影したのだろう。郁

美の悶える顔までクツキリ写っている。

「そう……そうよ。合成よ。あたし、こんなことしてないもの。お願い信じて……ね、あなた」

直後、扉が開いた。

「ゴメンね、郁美ちゃん。オレたちもうお終いにしたいんだ。だから、オヤジに話しちゃったんだよ」

ヘラヘラ笑いながら入ってきたのは等である。

「実はさ、オヤジの会社の子と付き合ってたんだ。二十二歳で可愛くて、オレが初めてとか言ってたさ。そしたら、出来ちゃって……だから郁美ちゃんとは結婚出来ないから。ホント、ゴメンねえ」

等は薄くなつた髪をかき上げながら、誤解の極みとも言つべき発言をする。

元々、この等は金づる以外の何者でもない。名村産業の事務員が社長の馬鹿息子を引つ掛けようとしていたのは知っている。あの娘なら、初めてどころかヤリマンもいいところだ。妊娠が事実でも、父親が誰か判つたものではない。

それを……郁美が、さも等に夢中だった口ぶりに、

「馬鹿言つてんじゃないよっ！ あんたに満足したことなんて一度だつてないんだよ！ この、皮のかぶつた短小早漏野郎が！ こっちは我慢して相手を」

ハツとするが後の祭りだ。等はその内容に、ピクピク小刻みに痙攣していた。

「あ……違つもの。あの」

何とか言い訳しようとした郁美の前に、名村は数字がコピーされた紙を差し出した。

毛の生えた郁美の心臓も、さすがにドキンとする。彼女は夫に内緒で大量のカードを作り、現金借入やブランド品の購入など、一千万円近くのローンを抱えていた。

「わしの名前を勝手に使つて……実印まで……不動産担保のローンにも申し込んでいたらしいな」

「た、試しに、申し込んでみただけよ。審査だけでもって言われたから」

「会社に連絡があつた。……断わつたがな」

(なんて使えない会社なのっ！)

連絡は自宅に、と郁美はしつこく言ったのだ。

「郁美……わしは人を見る目を失くしたようだ。残念だよ。借金はわしが払つておこつ。その代わり、この離婚届にサインをしなさい」
「い、いいわよ。ただし、慰謝料はちゃんとお払ってくれるんでしようねっ!? 若いあたしが、あんたみたいな年寄りに抱かれてやつたんだから。こんなもんで済むと思つたら大間違いよ!」

「弁護士さんに相談した。お前が黙つて離婚届にサインしないなら、コレを持って警察に告訴する。文書の偽造とか、色々罪になるんだぞうだ。わしはそこまですたくない。だが、これ以上は無理だ。会社まで潰したら、一緒に苦労してくれた女房にあの世で合わせる顔がない」

どうやら名村は本気らしい。

郁美はこれ以上ねばって警察沙汰になるよりは、と思つた。

「サインね。じゃ、これで成立ね。ロードスターはあたしの名義なのよ、乗って行きますから！ ああ、それと、靴もバッグも宝石も……あたしにくれたものは全部持って出ますから」
「女房が持っていた指輪は置いて行ってくれ。あれは……」
「おあいにく様！ あなたの今の女房はこのあたしなのっ！」

当座の現金ならへソクリがある。あと、日付の入ってない小切手も。郁美は名村の懇願も振り切り、持てる物は根こそぎ抱え、名村家を後にした。

くくくくくくくく

（偉そうなことを言って、所詮は金持ちのボンボン社長ね！）

郁美は名村家を出た翌日、小切手に書かれた銀行に出向いた。VIPルームに通され、現れた支店長は面白いくらい頭を下げる。出て来た紅茶はトワイニングのオールグレイ。パックの紅茶でないのが素晴らしい。

迂闊に人を信用するもんじゃないわ。

この分なら、大臣の息子の一件や、藤原の社長が大立ち回りをやらかしたことなど、週刊誌に売ったら幾らになるか……。

郁美はあまりの可笑しさに頬が自然と緩んでくる。

その時だ。いきなり扉が開き、十数人のスーツ姿の男がズカズカと入って来た。

「ちよつと……何なの、あんたたち！」

「白川郁美だな。この小切手は盗難届が出ている。これが、裁判所の逮捕状だ。一緒に来てもらうぞ」

郁美は旧姓で呼ばれ、真っ青になった。

「違つわ！ これはあたしが藤原社長から貰ったものよ。嘘じゃないの！ 本当よ！ あたしは盗んでないのよおーっ」

くわくわくわくわく

「全く、こういつた仕事は手際のいい奴だな」

藤原本社ビルの最上階、社長室の机に腰掛け卓巳は言った。

「お褒めに預かり光栄です。今回は上等な餌を撒いていただいたので、仕上げは楽でした」

そう言つてニツコリ笑つたのは、一旦、卓巳の個人秘書を辞めることに決まつた宗である。

郁美の不貞の証拠を集め、借金の額まで調べ上げた。更には、不動産担保の件を会社に通報し、審査の本人確認を徹底させたのも彼である。

「それで、起訴されそうか？」

「名村社長の温情まで踏み躪りましたからね。少しは反省の必要があるかも知れません」

「あの女を見ると永瀬あずさを思い出す。今からでも叩き込んでやりたいくらいだ」

だが、あずさを追い込み過ぎては、万里子の過去を言いふらしかねない。とはいえ、今度同じ真似をした時は……。

「社長 行方不明者は年間一万人も出ている、なんてことは考えておられませんよね？」

「馬鹿を言うな。私は間もなく父親になるんだぞ。そんな不見識なことを考えるものか！」

考えたのは少しだけだ、とは言えない卓巳だった。

後日、名村社長は郁美が指輪を返して来たから、と卓巳に告訴取り下げを頼みに来た。盗難事件はなかったことになり、二度と、郁美が太一郎の前に現れることはなかったのである。

｝ f i n ｝

番外編「ある女の末路」(後書き)

御堂です。

最終話のお祝いメッセージありがとうございますm(_____)m

いや……この女のことだけは書いておかないと、と思ひまして(苦笑)

ちよつど37話の辺りですね。

裏で宗が色々頑張ってくれてました。

宗はこの後、北海道に行き、年末年始に雪音を連れて実家へ…

(そこでの子作り(違う?)はムーンかサイトでお楽しみ下さいw)

彼は太一郎編ではひたすらイイ奴でした(苦笑)

ではでは、またどこかの番外編で…

皆様のお越しをお待ちしております!

どうもありがとうございます(平伏)

(1) 再会

(……寒い……)

彼女は突風から腕に抱いた赤ん坊を隠すように抱きしめた。

都心からかなり離れた場所にある寺。彼女は石段を一段一段踏みしめるように上がる。上がりきったところには、彼女の父親が眠っていた。去年が十三回忌。でも、親不孝をして法要はおろか、墓参りすらできなかった。

(バチがあたったのかも……違うか、お父さんはそんなことしないよね)

今の自分が窮地にあるのは父親のせいじゃない。彼女自身のせいだ。そう思いなおし、キュツと唇を噛みしめた。

十年前、彼女は母親の過ちでひどい目に遭いかけた。でも、責任の多くは母親を騙した男にあるだろう。母親が立ち直るのにしばらくの間がかかったが、そのおかげで彼女はひとつの悲しみを乗り越えることができたのだ。

それは、彼女にとって初恋だった。

思春期に父親を亡くした彼女が、助けてあげたいと思った七歳も年上の男性。どん底まで落ちてても、人生はやり直せると、身をもつて教えてくれた人。でも彼には、すでに命がけで守りたい女性と子供がいた。

彼女の恋は始まると同時に終わりを告げたのだった。

ひゅっつう……と音を立て、風が足もとを駆け抜ける。春先だというのに、高台にあるせいだろうか、風は強くて冷たかった。コートは子供を包むために使っている。春用のブラウスにスカートスーツ、足もとが薄いストッキング一枚ではいささか寒い。

ゾクゾクする感覚が足から上半身まで伝わり、

(やだ、風邪でもひきそう。……もう、関係ないか……)

そのとき、風に乗って子供の笑い声が聞こえた気がした。もう、春休みに入っている。時刻は夕方、帰宅の早い父親を囲み、一家団欒を楽しむ時間なのかもしれない。

それは彼女にとって懐かしい光景だ。十四年も昔に失った理想の家族の姿。ただ、そこがとても近くに民家のあるような場所ではないのだが、このときの彼女に気づく余裕はなかった。

今の彼女は、帰る家も行くあてもなく、ポケットに小銭しかない状態で、お腹を空かせて墓地に佇んでいる。

(この子を連れて行くのは間違ってる気がする。でも、置いていくのは……)

年末に生まれて、生後三カ月。誰にも祝福されず……いや、彼女だけが望んでこの世に生まれ落ちた命。

せめて子供を預けて働きに出られるまで、と彼女は母親に頭を下げ実家に戻るが……。そこに彼女の居場所はなかった。

「お父さん、ずっと来れなくてごめんね。私、なんか疲れちゃった。そっち……行ってもいいかな？」

“佐伯家之墓” 彼女がみつめる墓石にはそう刻まれている。

十年の月日が女子高生を二十七歳の女性へと変えた。そして、人は簡単に取り返しのつかない過ちを犯せるのだ、と。間違いを正すことの困難さを、佐伯茜^{さいきあかね}は知ったのである。

くろくろくろくろくろく

『今日はパパとママの結婚記念日ですよ。私は留守番しているから……。ママとゆっくり話してきて』

出がけにひとり娘、美月みつきに言われた言葉を思い出し、藤原太一郎ふじやうたいいちろうはハンドルを握りながら苦笑した。

彼が妻の奈那子と入籍したのは八月。でも、結婚式を挙げた三月のほづが、思い出深い。それで数えるなら、今日はちょうど九回目の結婚記念日だった。

だが、その日を夫婦で祝えたのはわずか二回。三回目を心待ちにしながら、クリスマスを三日ほど過ぎた夜、奈那子は静かに眠りについた。

彼女が命がけで産んだ最愛の娘は、そのとき三歳の誕生日を迎えたばかりで……。母の死に、『ママはとおくのびょういんにいつちやうの?』と太一郎に尋ねた。

戸籍上は実子だが、血の繋がっていない太一郎に娘を預けて逝くのは、どれほど心残りだっただろう。そんな奈那子を安心させたくて太一郎は懸命に働き、美月を育ててきた。

ただ一度、一年間だけ離れて暮らしたことはあったが……。

美月が小学校に上がる年、太一郎は地方への転勤が決まる。栄転で初めて営業主任という肩書きをもらった。慣れるまでは帰宅も遅くなる。いくら社宅とはいえ、六歳の娘を見知らぬ土地でひとりにはできないと思ひ、卓巳・万里子夫婦に預けて単身赴任することに決めたのだ。

ところがその年の終わり、美月はたったひとりで九州の父親の家までやって来た。

『ご飯も作れるし、ひとりで学校にも行ける。勉強もちゃんとするからパパと一緒にいたいのだ!』

翌春、美月が二年に進級すると同時に転校し、父娘は再びふたり暮らしをはじめたのだった。

それから二年が経ち、太一郎は本社の営業課長に昇進して戻ってきた。

千早物産に入社十年目、三十四歳にしては早い出世だろう。もしあのまま藤原グループに入社していたら、おそらく子会社の取締役といった肩書きはとうの昔についていたかもしれない。だが、その価値に石ころとダイヤモンドくらいの差があることを、今の太一郎は知っていた。

奈那子の眠る場所は東京都とは名ばかりの隅っこのほうだ。

藤原家代々の墓ではなく、彼女の実家、桐生家の墓でもない。太一郎が決めた見晴らしのいい高台。そこから、どこにでも飛んで行けそうな自由な場所を彼は奈那子のために選んだ。

やれ後継者だの血筋だの、家に縛られ続けた奈那子の一生だった。尽くし続けた父親にも、血が繋がっていないという理由で二十二年間の献身を否定されたのだ。今の彼女は何にも縛られていない。彼女の行きたい場所に行き、やりたいことをしているだろう。

（ま、奈那子のことだから、俺や美月が心配でいつも傍にいるんだろっけどな……）

車を駐車場に止め、事務所に挨拶をして墓所に向かう。

石段を上りながら、彼は亡き妻のことを考えつつ、

『心配なのはパパだけよ！ 私はなんでもできるんだもの』

美月ならそう言うだろう、と思ひ、頬が緩んでくる。

早産、しかも仮死状態で生まれ、たびたび危篤といわれた美月。

脳に酸素がいかなかった時間もあり、障害が残るとも言われたが…

…。

神様は奈那子から色んなものを奪った代わりに、美月にはあらゆるものを与えてくれた。

一四〇を超えるIQ、優れた運動能力、小三で小六の平均を超える体格と健康。しかも奈那子を上回る美少女ぶりだ。

最後のは、たまに親馬鹿と言われることもあるが……事実なのだ

から仕方がない。

石段を上りきったとき、風に煽られそうになる。

太一郎は、手にしたチューリップとスイートピー、かすみ草の淡い色でまとめられた花束を一旦下ろし、濃紺のスプリングコートを羽織った。

人がぶつからずにすれ違える程度の通路を進むと、ひとりの女性が墓石に向かって手を合わせていた。

彼岸を少し過ぎたばかりのこの時期、墓石はどれも綺麗に磨かれ、供えてある花も真新しいものが多い。だが、平日の昼間ということもあり、人影は彼女だけのようだ。

チラツと目をやった墓石に彫られた家名。

それは彼の琴線に触れるものだったが……軽く、過去に追い払おうとする。

その女性はエアコンの効いた事務所で働いている女性社員と同じような服装だ。春とはいえ、とくにこんな場所では寒くないのだから、とお節介なことを考えてみる。

通り過ぎたあと、太一郎はどうにも気に掛かり、振り返った。

「佐伯？ ひよっとして佐伯茜か？」

十年前、わずかに掠めただけで離れてしまったふたりの道。

運命の輪はふたたび回り始める。

(1) 再会(後書き)

御堂です。

迷っておりましたが、タイムリーなメッセージをいただきましたので連載開始することにしました(^^) /

第一章の結婚式から丸九年経ちました。

太郎と茜が最後に会ったのがその前年の夏なので、ふたりは十年ぶりの再会です。

自力で這い上がってきた太郎…

一方、茜は…どん底です(<>)

『愛のかたちはひとつじゃない』

『人生は繰り返し返すように見えても、決して同じ場所にとどまってい
るわけではない』

それがこの輪廻のテーマです。

個人的には…34歳になった太郎、かつこよすぎ(〃〃)
パパの前ではいい子ぶりっ子の美月ちゃんも登場します。

ちなみに、現在進行中の「仲良きことは美しきかな」では、太郎
は単身赴任中なので、美月ちゃんのみ登場する予定です。

よかつたらお付き合ってくださいませ。

(2) 流転

パツと見たとき、茜にはそれが誰かわからなかった。

それほど、太一郎はこの十年で変わっていたのだ。

粗野に思えた顔つきが、荒々しいながら角が取れ、若いころに比べるとスッキリした感じだ。体型も自堕落に緩んだ印象はなく、逆にやせ細ってもおらず、年齢相応の風格を備えている。何より違なのは、ステンカラーのコートを上品に着こなし、その下のスーツが様になっているところだろう。

茜の知っている太一郎は、まともな職にも就けず、パートの主婦に混じって清掃員として働く姿だった。

(きつと、藤原に戻ったんだ……奥さんと幸せにやっってるんだ……) 胸にチクチクと針が刺さるようだ。

(こんなところで会いたくなかった。こんな姿を見られたくなかった。こんな……こんな……)

十年前と立場が逆転したようで、茜はたまらなく惨めな気持ちになる。

「あの、自分は藤原太一郎といいますが……佐伯茜さんではありませんか？」

太一郎は人違いと思ったのか、言葉を変えて聞きなおした。

茜は知らん顔をしようかとも思ったが、深呼吸して口を開く。

「ええ、そうです。ご無沙汰しております。その節は大変お世話になりました」

できる限り丁寧に答える。

「ああ、やっぱり！ 九年……十年ぶりか？ 女子高生の頃しか知らないから、人違いかと思ったぞ」

「それは私も同じです。随分、変わられましたね。一瞬、わかりませんでした」

「なんだよ、それ。俺がおっさんになったって言いたいわけか？」
相好をくずした太一郎は昔と同じだった。

その笑顔が眩しくて、茜は目を伏せる。

「この墓は……そうか、中学のときにお父さんが亡くなったんだよな」

「そうです。色々あって……この間のお彼岸に来られなかったから……太一郎……いえ、藤原さんはどちらへ？」

言ったあとで茜は気がついた。

太一郎が手にした花束が、あまりにも墓石に供えるにはふさわしくないものだということに。

「ああ、女房の墓参り。でも今日は結婚記念日だから……この日は、式のブーケと同じ花束を持ってくることにしてるんだ」

「あ……ごめんなさい、私」

「気にすんな。三カ月前に七回忌をやったくらいだから、もうそんなに堪えてないよ」

風が音を立て、ふたりの距離を教えるように吹き抜ける。

そのとき、茜の腕に抱かれた赤ん坊が、墓地の静寂を打ち破るような泣き声をあげた。

「佐伯の子供か？ 男？ 女？」

「え？ ええ、私の子よ。男の子なの……今、三カ月」

その瞬間、太一郎はなんともいえない顔をして見せた。だが、すぐに笑顔に変わる。

「そう、だよなあ。二十七……八だっけ？ 結婚くらいしてても不思議じゃないよなあ。あ、そうか……だから、佐伯って呼んでもピンと来なかったんだ」

茜は悪気のない太一郎の言葉に息を飲む。

（結婚……したかった。太一郎より幸せになつて、どこかで再会したとき『もつと素敵な人と出会つたのよ』って自慢したかった。でも……）

現実の厳しさに茜は萎えそうになる心を必死で励まし、太一郎に笑顔を向ける。

「結婚したの……今は、大原つて言うのよ。小さいけど和菓子屋のチェーン店をして……」

「……」

太一郎は何も言わず聞いていた。

言い始めると茜は止まらず、

「年は少し離れてるんだけど……でも、大切にしてくれて、とっても幸せよ。実家は弟が結婚してお嫁さんと一緒にやってるわ。母とはいろいろあるみたいだけど……。ああ、私は姑がないから、そんな揉め事もなくて、気楽なものよ」

「そうか……ご主人はなんて言うんだ？」

「大原……英介よ。今年、三十六になるの……あなたより少し上かしら」

「この、小さい王子様の名前は？」

「それは……」

茜は言いよどんだ。

でも、ひとつくらい、嘘は言いたくない。

「小太郎……小太郎というの。私が見つけたの。ちょっとレトロだけど……」

「確かに。まるで、俺の息子みたいだな」

その言葉は茜の心を激しく揺さぶった。

太一郎はニコニコ笑いながら、小太郎の頬に指先で触れる。

「よお坊主、太一郎つてんだ、よろしくな」

その声に小太郎はピタリと泣き止み、目の前で動く指をつかもう

と手を伸ばす。

「ところで……。ここまでタクシーで来たのか？」

「え？ え、ええ、まあ」

本当は近くまでバスで来て、そこから一時間近く歩いた。でも、そんなこと太一郎に言えるはずがない。

「だったら待つてもらえばいいのに……。こんな不便なところ、事務所で呼んでもらっても、かなり待つ羽目になるぞ」

「いいのよ、別に。急いでないし」

「なに言ってるんだ。お前が急いでなくても、子供が可哀想だろうに父親らしいセリフに茜は涙がこぼれそうになる。

それをグツと堪えて、

「へえ……。パパらしくなつたじゃない。子供さんはおひとり？」

「ああ、あのときに生まれた娘がひとり、もう九歳だ。俺に似て超美人なんだぜ。今度会わせてやるよ」

「それは……。奥さんが超人だったってことね。良かったわね、太一郎に似なくて……。あ、ごめん」

思わず昔を思い出し、茜は彼を呼び捨てにしてしまつて慌てて謝つた。

太一郎はあの藤原家の人間なのだ。茜とは住む世界が違つてしまつている。

「ちよつと待つてる。奈那子に挨拶してくるから。この、一番奥なんだ」

「……。え？」

太一郎は茜の返事を待たず、コートを脱ぐと茜の肩にかけた。

「子供を優先にするのはわかるけど、それじゃお前が風邪ひくぞ。

十分くらいで戻ってくるから、車で都内まで送つてやるよ」

「いいわよ、そんなっ！ せっかく奥さんに会いに来たのに」

「とりあえずここに墓があるっただけで、アイツはたぶん俺や美月の傍にいるだろうから……。とにかく、待つてるよ」

「でも、私」

太一郎は踵を返すと、通路を走るように行ってしまった。

こんなつもりはなかったのだ。

都内まで送られても、茜に帰る場所などない。バス停からこの寺までの道中、少し道を逸れたら深い森はいくらでもあった。そこでなら、首をくくっても誰にも迷惑はかからないだろう。そんなふう
に思っていたのに。

ただ、小太郎をどうするか……。

父の墓の前に置き去りにすることも考えた。でも、茜の息子だとわかると、実家に預けられるだろう。母も弟夫婦も迷惑極まりない顔をしていた。面倒をみてもらえたとしても、邪険にされるのは目に見えている。

もし置いていくなら、身元がわからないようにして施設に引き取ってもらえない。叶うなら、子供のいない家庭にもらわれて、実子同然に育ててもらえたら……。

そのとき、茜はとんでもないことを思いつく。

この場に小太郎を置いていけばどうなるだろう。太一郎なら、少なくとも連れて帰り、茜を探そうとするのではないか。調べられたら、茜の嘘はすべてバレるだろうが、小太郎の身の振り方を考えてくれるかもしれない。

せめて、小太郎だけでも。

太一郎のコートを掴み、茜は彼の走り去った方向をジッとみつめた。

(3) 嘘の中の真実

三十分後。

茜は小太郎を抱き、太一郎の車に乗っていた。

藤原家の人たちは、ほとんどが運転手つきのリムジンを利用していた気がする。卓巳だけ自分で運転するBMWを所有していたが……。屋敷にいたときの太一郎はまったく運転していなかった。そんな彼がハイブリッドカーの代表ともいえるプリウスに乗っていることに茜は驚きだ。

約束の十分を二分ほど過ぎて、彼は茜のもとに戻ってきた。

何度か子供を置いて逃げようと考え、結局、できずに立ち尽くしたままだった。

『昔のことがあるから警戒するのはわかるけど、子供の前で人妻に襲い掛かったりしないから……心配すんな』

コートを脱いで返そうとした茜の手を押し止め、太一郎はそう言った。

そんな警戒などしていない。今の洗練された太一郎の目に、自分はいくらびれた女にしか映らないだろう。

「おい、聞いてるか？」

「え？ あの……なに？」

「時間あるって言うてたる？ どこかでメシでも食っていこうぜ」

「あ、私は別に……」

茜が慌てて断ろうとしたとき、彼女のお腹はそれを遮る音を出した。茜は恥ずかしさに顔を伏せる。

(……今から死のうっていうのに……)

食べるだけ無駄だと考えつつ、丸二日もまともに食べていないこ

とを思い出す。

「お前はともかく、小太郎はどうなんだ？ 腹が空いてる頃だろう。
ミルクか？」

母乳だが、茜自身の栄養状態が悪いせいで、あまり出ないようだ。
「あ……母乳、飲ませたいんだけど……」
「わかった」

太一郎は短く言うと国道沿いにあるドライブインをみつけ、そのまま車を駐車場に停める。

「トイレに行ってくるから、その間に飲ませてやれよ。あとで俺らもメシにしよう」

茜が困惑しているうちに、太一郎はどんどん決めていく。
以前なら、どうしようか……と考え込んだまま三十分は立ち止まっていただろう。逆に茜のほうがテキパキと決めて太一郎を振り回していた。

「なんか……知らない人みたいだね」

茜は小太郎を見てポツリとつぶやいた。

く*く*く*く*

茜は嘘をついている。

太一郎にそれがわかったのには理由があった。彼はトイレの裏手に回り車の死角に入る。携帯を取り出すと、お目当ての人間を電話帳から選び出し、通話ボタンを押した。

「あ、ご無沙汰しております。商品管理課にいました藤原です。はい、その藤原です。所長には大変お世話になりました……」

太一郎が勤める千早物産は主に業務用食品を取り扱っている。そ

の中には和菓子用の食材も含まれていた。天然の素材や、厳選された材料を求める店もあるが、チェーン店はコストダウンのため業務用の食品を使う店も多い。

そして、千早物産の取引先の中に“株式会社大原”という和菓子の製造・卸・小売りのチェーン店があった。

大原の社は金沢市にある。太一郎が初めて営業に入ったところ、担当の中に大原の東京支店があった。社長は六十代の女性だったが、東京支店長の名前が太一郎の記憶に違いがなければ……大原英介。英介は太一郎と年齢もそう変わらず、人当たりのいい男性だったように思う。

ただし 英介には三歳年上の妻がいた。というより、英介自身が大原家の入り婿だと聞いた気がする。結婚も早く、六、七年前に小学生の子供がいたはずだ。今なら中学生になっているだろう。

太一郎はそのことを確認したくて、個人的に大原の社長と懇意にしていたの営業所の所長に連絡を取ったのである。

所長は、

『大原？ ああ、和菓子の。いや、とくに代替わりしたって話は聞いてないが……。東京の責任者は変わったかな』

『それって大原英介氏ですよ？ 何かあつたんですか？』

『あー。お前、今度から営業課長だっけかな？』

所長は途端に声をひそめる。

『はい。二課なので大原には入れてませんが……。その、大原氏に関してあまりよくない噂を聞いたもので』

二課は主に冷凍食品を扱う。取引先はレストランやスーパーがメインだった。

太一郎のハツタリを信用したのか所長は話し始めた。

『一昨年の夏だったかな……。あの婿殿がバイトの女の子に手を出したらしくて、それも妊娠させたとかどうとか……。大原社長から離婚させたいんだけどって相談されたんだよ。でも、雅美ちゃんはどうしても亭主と別れたくないようだな……。』

雅美は英介の妻の名前だ。ふたりは大学で知り合い交際をはじめた。英介の大学在学中に妊娠がわかり、すぐに結婚したという。大原社長は三十代で夫を亡くし、女手ひとつで娘を三人育てた人物。雅美は長女で英介は後継者になるらしいが、今ひとつ頼りないと思っていたそうだ。

太一郎が出入りしていたときは、東京に英介と雅美夫婦は一家で住んでいた。その後、妻の雅美が息子を連れて金沢に戻ったという。ひとり東京に残った英介は、小売り店舗で雇ったバイトの女性と深い関係になり……。

結果、一昨年の年末には英介も金沢に呼び戻されることになった。

『その……バイトの女性というのは？』

『いや、そこまではわからないが。雅美ちゃんが怒って店先で揉めたらしくてな……相手が倒れて救急車を呼んだとかで、大騒ぎだったらしいぞ』

それ以上は聞いてもわからないだろうと思い、太一郎は礼を言っ
て電話を切った。

太一郎は携帯を内ポケットにしまった後、考え込む。

妻が乗り込み騒ぎになったのが一昨年の夏。

騒ぎが去年の夏ならピツタリ一致するのだが、小太郎は生後三カ
月といていた。

(つてことは……大原氏の子供じゃないってことか？ いや、それ
じゃ)

もし無関係なら、『英介と結婚した』などと言うはずがない。何
か関係があるのだ。

茜に子供がいると知ったとき、太一郎は自分でも信じられないく
らい動揺を覚えていた。

理由はわからない。茜のことは時間とともに懐かしい思い出とな
り、奈那子が亡くなった直後は思いつくことすらなかった。子育て

と仕事に夢中で、まっとうな人間になることだけが贖罪になると信じてきたからだ。

それでも、事情を知らない会社関係者からは、何度となく再婚を勧められたが……。

奈那子を亡くして六年あまり、女性と付き合ったことなど一度もない。

（いや、だからって別に、茜に会いたいとか、会ったら何か言おうとか……考えてたわけじゃないし）

茜が幸せならそれでいい。

だが、幸せだと口にする彼女はどこか痛々しくて……。そして、左手の薬指に指輪がないのを見たとき、嫌な予感が頭をよぎった。

（妊娠中は指がむくんで、結婚指輪は外す女性も多いって聞くし……）

そう思いつつ目をやるが、指輪の跡すら見当たらないのだ。

悪い想像をはじめたらきりがない。駐車場に車がなかったことも、見知らぬ他人の指を掴み、しゃぶろうとする赤ん坊の仕草にも疑問を持った。ひよっとして、お腹を空かせているのではないかと。

（ひとりで考えててもラチが開かないな）

太一郎は茜に直接尋ねようと決めた。

ふと気づくと、小雨がパラパラと振り出している。どつりで寒いはずだ、太一郎はそんなことを思いつつ、車に向かって歩き出した。

(4) 光と影

(ごめん……ごめんね、小太郎……。太一郎も、いきなり巻き込んでごめんなさいっ)

やっぱり連れて逝くことはできない。

首を吊るなら、先に小太郎の首を自分の手で絞めなくてはならない。それができなければ……。茜の脳裏に、自分の死体の横で少しずつ弱りながら餓死する息子の姿が浮かんだ。

今となれば、茜の人生で最も信頼できるのは太一郎しかいない。失恋した相手に、こんな惨めな姿を見せたくなかった。だがこれは、せめてもの神の情けだろう。いや、孫を死なせたくないと思っただけの計らいかもしれない。

『太一郎さま。勝手なお願いをして申し訳ありません。小太郎をお願いします。必ず迎えに行きますので、佐伯と大原の家には連絡しないでください。一生のお願いです。もし、警察に届けられる場合は私の名前を言わず、捨て子を捨てただけお伝えください。どうか、お願いいたします。茜』

茜はまた嘘をついた。

十年前も嘘をついて太一郎を呼び出したことを思い出す。でも、これが最後になる。

車のダッシュボードにあった定期点検の紙の裏に、走り書きのようにメッセージを残してきた。

太一郎なら茜が戻るのを待ち、小太郎の面倒をみてくれるかもしれない。藤原のお屋敷は大きかった。どこか片隅にでも置いてもらえたら……。小太郎は死なずに済む。

怒って警察や佐伯の家に乗り込むかもしれない。それでも、森の中で朽ち果てるより、あの子には百倍ましな人生があるはずだ、と信じたい。

自分はやり直すことはできなかったが、あの子は違う。

小太郎はなんの罪も犯してはいないのだから、あの子には幸せになる権利があるはずだ。

車を飛び出したときはほんの小雨だった。

太一郎に見つかからないようにと、コソコソとドライブインを抜け、道路に出る。その頃には、息苦しくなるほど冷たく重い雨に変わっていた。

次の瞬間、シルバーグレーのプリウスが茜の行く手を阻むように横付けされた。

運転席のドアがはじけるように開き、太一郎が降りてくる。

「……大事なものをお忘れですよ、お母さん……」

予想はしていたが、嘘がバレたときと同じように、その声は怒りに満ちていた。

茜は何も言えず立ち尽くすことしかできない。

「話を聞くから、とにかく乗れ」

「……わたし、は、もう」

「いいから、乗れ」

ブンブンと首を横にふった。

すると太一郎が車の前を回り、茜に近づいてくる。茜は怖くなり、咄嗟に逃げ出そうとした。

「おいっ、茜！」

「お願い、私はいいいから、小太郎のことをお願い！ 警察に届けてもいいから、私のことだけは言わないで！ 佐伯の家じゃ、きつと

可哀想なことになる。大原の家でも……。お願い……。頼る人がいないの。最後のお願いよ、私にこの子は殺せない。だから」

雨音に混じり、茜の耳元でパシンと水をはじく音がした。

腕をつかまれ、振り向かされたと同時に、茜は太一郎に頬を叩かれていた。

「それは何の意地だ？ 女のプライドか？ だったらそんなもん捨てちまえ！」

「違うわ、私は……」

「違うわ。もし、そうじゃないなら俺に頼ったはずだ」

「だから……。今、頼って……」

「茜！ 俺に頭を下げるのは死ぬより悔しいか？ 自分の子供を捨てるほうを選ぶのかっ！？」

太一郎の言うとおりであった。

悔しかった……。何もない自分が。十年前に比べて、何もかも失ってしまった自分が哀れでならない。太一郎の前から消し去ってしまったいくらいに。

「そう……。よ。最低でしょう？ 私は子供を殺そうと思ってたの。最低の母親なのよ。結婚なんて全部ウソ……。不倫して……。望まれもしないのに子供を産んで……。育てられなくなったから死のうと思っただの！」

茜は太一郎から離れて彼を見上げた。

頬を伝い顎から滴り落ちる雫は、雨か涙か、茜にもわからなくなる。

「ミルクもオムツも買えない。戻る家もないのよ、私たちには。……笑えば？ 馬鹿な女だって。自業自得だって。それとも……。お金でも恵んでくれる？」

茜は自分がイヤになった。

小太郎のために土下座してでも助けて欲しいというべきなのに……。そんな勇気すら、今の茜には残っていない。

はるか昔、太一郎に言われた言葉が茜の胸に浮かぶ。

信じてくれたこと、感謝してる。きっと将来は万里子様のようになれるさ。

(なれると思ってた。なりたいて………思ってたのに。どこで私は、こんなふうになっちゃったんだろう?)

彼女の未来は真つ暗だった。

そのまま目を閉じかけた茜に、太一郎はポツリと口にする。

「俺には笑えない」

「……」

「今のお前は十年前の俺だ。お前や万里子さんを襲って、卓巳にぶちのめされたときの……」

茜の目の前に太一郎の手が差し伸べられる。

「人は変わる」　なあ、茜。俺はお前を信じる」

それは遠い昔、茜が太一郎に言った言葉。

言葉は光となり、時を経て、自らの心に灯る明かりとなった。

くわくわくわくわく

『大丈夫よ、パパ。今、結人くんの家に着いたとこ。今夜は泊めてもらうから、心配しないで』

携帯電話の向こうで父、太一郎が申し訳なさそうな声を出す。

『ホントにごめんな。車の調子が悪くなって……明日、なるべく早く帰るから』

『慌てて事故でも起こしたらどうするの？ お仕事は来月の一日からなんでしよう？ だったら、気にしないで』

父はしつこいくらい謝り続ける。

点検が終わったばかりの車が故障するとは思えない。そして……

父は嘘が下手だった。

『ねえ……パパが戻ってくるのは私のところよね？ ママみたいに、私を置いて急にいなくなったりしないでしよう？』

『当たり前じゃないか！ 美月はパパの命だ』

『だったらいいの。私もそうよ。パパが好き……私にはパパしかないの。だから、ゼツタイに迎えに来てね』

『もちろんだ』

その後も、父は三回も『ごめん』と口にして電話を切ったのだった。

藤原美月 来月から小学校四年生になる。

身長は一五〇センチちょっと。同じ歳の又従兄にあたる結人より十五センチは高い。初潮はまだだが、すでにふっくらと女性的な体型に変わりつつあった。

制服を着ると中学生に見られることも多く、美月自身はそのことを喜んでいた。

母が亡くなる前、三歳前後の記憶なので多少曖昧なところはあるが、それ以前から父子家庭同然だった気がする。美月の覚えている母の姿は、病院の入院着ばかりだった。ベッドに座ったままか、車椅子に乗っていた。移動するときは母が美月を抱き、その母を父が抱き上げた。

『カメさんみたい〜』

絵本で見たカメが段々に重なる姿を思い浮かべ、美月は無邪気に笑っていた。

母が亡くなり数年が経ち、美月が幼稚園の頃のこと。近所のお節介な人に『遅くまで幼児をひとりにして、虐待じゃないか』などと児童相談所に連絡されたことがあった。結局、父の帰宅まで家政婦に来てもらうことになり……。

早く大きくなりたい。それだけが美月の願いだ。

お正月は神社の神様に、七夕は織姫と彦星に、クリスマスはサンタクロースに、そのことをだけを頼み続けた。

（ママの代わりに私がパパの世話をするのよ。誰にも邪魔させない！）

美月は携帯を握り締め、父に嘘をつかせた“誰か”を睨みつける。

「みつつきちやーん！ 僕らと一緒にフロ入るーよ」

同じ歳とは思えない結人が歩き始めたばかりの一番下の弟、和哉^{かずや}を背負い廊下を走ってくる。

「入るわけないでしょ！ 子供じゃないんだから」

結人の脳天気な声に、“パパ専用ボイス”のスイッチをオフにして答える美月であった。

(4) 光と影(後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

奈那子を応援してくださった皆様、ホントーにごめんなさい。
それでも、いい作品だったと思っただけのように書き上げたい
と思います。

よかったです、お付き合い下さいませ。

こちらの作品は今年最後の投稿となります。

来年もよろしくお願ひ致します。> () <

(5) 幸せの意味

ビジネスホテルの廊下に立ち、窓越しに夜空を見上げた。

雨は嘘のように止んでいる。雨上がりの透き通った星空を見上げ、太一郎は奈那子のことを思い出していた。

八年前の今日、初めての結婚記念日を迎えたときのことを。

小康状態を保ち、正月から丸三カ月、奈那子は自宅で過ごしていた。ところが、再検査で四月から入院することが決まり……太一郎は奈那子をドライブに連れ出したのだ。

今のプリウスとは違い、平社員の太一郎によやく買った中古車しかも軽四。文句も言わずに付き合ってくれたのは、今日訪れた寺に向かう途中の峠だった。

峠を上りきった場所に小さな展望台つきの広場がある。太一郎は奈那子と一歳半の美月を連れてその場所に行き、三人で降るような満点の星空を仰いだ。

『来年も来ような。再来年も、その次も……じいさんとばあさんになっても、結婚記念日にはふたりで来るんだ』

太一郎の言葉に奈那子は幸せそうにうなずいていた。

そのときのことを一度だけ美月に尋ねた。だが、何も覚えていないと言う。一歳半なら当然かもしれない。それに、車に乗っている間中、美月はベビーシートの上でスヤスヤ眠っていた気もする。

ただ、あの数え切れないほどの流れ星を美月が覚えていてくれたなら……。

太一郎は思い出すたびに考えるのだ。ひよつとしたら、あの出来事は幻で現実のことではなかったのかもしれない、と。奈那子に少

しでも家族の思い出を作つてやりたいと願つた太一郎の夢。

思いは枷となり、太一郎は他の誰にも話すことができない。そして、あの展望台にも行けずにいる。

おそらく、一生行くことができないだろう。

(ごめんな……美月。……奈那子)

携帯を握り締め、胸の中でつぶやいた。そして、太一郎は九年半はめつづけた結婚指輪をはずし、携帯と一緒に内ポケットにしまった。

くくくくくくくく

「鍵はかけるな。返事がなかったら、ドアをぶち破つて問答無用で入るぞ」

茜にバスルームを使うよう勧めながら、太一郎はそんなことを口にした。

途中のコンビニでスティックタイプの粉ミルクを買い、ホテルに入るなり、彼は小太郎に飲ませてくれた。

ミルクの温度を腕の内側に垂らして確認したり、生後三ヶ月の赤ん坊を横抱きにして哺乳瓶から飲ませる仕草も、実に手慣れたものだ。逆に、これまであまり粉ミルクを飲ませたことのない茜のほうがぎこちない。

生まれてからずっと母乳だった。このまま母乳だけで育てるつもりが、ストレスと栄養状態が悪いせいか母乳の出が悪くなったのだ。小太郎の飲む量も増え、やむなく併用することに。それも、茜にすれば様々な意味で負担だった。

(奥さん……きっと幸せだったよね。娘さんも……。私はいつたい何をやってるんだろう……)

茜はバスタブの中で身体を丸め、力いっぱい自分を抱きしめた。パシャン、と顔をお湯に浸け、溢れそうな涙を閉じ込める。泣いても泣いても涙が尽きない。どれだけ泣いたら心が空っぽになるのだろう。空っぽになったらもう一度、その場所に夢や勇気を詰め込むことができるだろうか？

そのとき、茜は腕をぐいっと引つ張られた。

「バカやろう！　なんで返事をしないっ!？」

「た、た、太一郎……」

お湯に浸けていたのは顔だけで、耳は聞こえていたはずなのに。どうやら、茜はノックの音も太一郎の問いかけも聞き逃していたらしい。

「風呂場で溺死なんて、カンベンしてくれ!」

「ご、ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったの。……ぼんやりしてて、聞こえなくて」

必死で言い訳していたとき、太一郎がスッと視線をそらしたことに気がついた。

茜はハツとして胸元を押さえる。

「小太郎はグッスリ寝てる。お前もいい加減上がれ」

太一郎は茜から手を離すと、背中を向けて言った。

「……はい……」

震える声で返事をする茜だった。

国道沿いのビジネスホテル、太一郎が取ったのはシングルベッドが二つ並んだツインルーム。壁際の灯りを落とすほうに小太郎が眠っていた。太一郎は窓際のソファセットに腰かけている。

テーブルの上にはスポーツ飲料のペットボトルが一本。同じものを太一郎は手にしている。てっきり、ビールでも飲んでいるのだろうと思っていたので驚きだった。

「やっと出てきたな。三十分くらい入ってたぞ。喉が渴いただろう……ほら」

そう言うと、テーブルに置かれたペットボトルをつかみ、茜に差し出す。

彼女はそれを受け取りながら、頬が火照るのを感じていた。不可抗力とはいえ、明るい中で裸を見られたのだ。何か言われるのでは、と羞恥心を覚えていたが、太一郎にとっては大したことはなかったらしい。

(オンナじゃないんだもんね。当たり前か……)
ホッとする反面、少し切なかった。

「ありがと。あの……ここの宿泊代も、さっきのルームサービスやコンビニで使った分も必ず返しますから……仕事さえ決まったら、本当に」

「わかった、わかった。好きにすればいい」

太一郎は茜の言葉を遮り、ため息まじりに言う。

「気まずい数秒間が流れたあと、太一郎が口にしたのは、

「それで、さっき言った“不倫”の相手が大原英介氏か？」

それは雨の中、茜の叫んだ言葉だった。

だが、太一郎の口ぶりに違和感を覚えた茜は尋ねる。

「……ひよつとして、英介さんのことを知ってるの？」

「金沢に本社のある大原と、以前取引があった。彼は入り婿で、中学生くらいの息子がいるはずだ。人違いか？」

太一郎の言葉に茜は首を左右に振った。

「小太郎はそいつの息子か？」

もう隠し立ては無意味だ。観念して、今度は縦に振る。すると、

太一郎はこれまでとは違い、苛立たしげに茜に問いかけた。

「なぜだ？　なんでそんな男と！？　どうしてだ……答える、茜！」

十年前、茜の母は結婚詐欺の男に騙された。

男は酔った拳げ句、茜にまで手を出そうとして反撃に遭い、犯罪が明るみに出たのである。そのときに茜は太一郎と彼の知人である宗行臣の世話になった。

宗は警察や法律関係の面倒をすべて解決してくれ、茜と母は宗に礼を言い、太一郎にも直接お礼を言いたいと頼んだ。しかし、

『太一郎様ご自身が、佐伯様ご一家には二度と関わらない、と言われておいでです。これは、ご迷惑をかけた“お詫び”とのこと』
大学生だった太一郎が十七歳だった茜を殴り、犯そうとしたことがある。無理やり唇を奪われ、怖くて憎くて訴えてやりたいとも思っていた。ところが、再会した太一郎は信じられないほど真面目になっただけ……。』

虚勢を張って周囲を威嚇していた太一郎の本質に触れ、茜は惹かれた。

思春期に父を亡くした茜にとって、家族を守ることは自分自身の存在価値だった。誰かを守らねばならない、という強い思い。あのときの太一郎は、それを満たしてくれる人だったのだ。

だが、彼に近づいたことで茜も面倒に巻き込まれ……。
そうだったすべての“お詫び”なのだ、と茜は思った。

『卓巳様もお認めになり、正式に入籍されました。お子様もお生まれになって、お幸せに暮らしておいでですよ』

宗自身が仕事で東京を離れるので、後処理は知人の弁護士に委ねたい、と言って来たとき、茜は太一郎が正式に結婚したことを聞かされた。

『太一郎様から……茜さんも幸せになってください、と』

幸せになろう。幸せになりたい。その思いはやがて、幸せにならなければいけない、に変わっていき……。』

そして七年後、茜はやっと自分を幸福にしてくれる男性に出会えたのである。

(5) 幸せの意味(後書き)

御堂です。

こちらは新年、初更新となります。

太一郎と奈那子の回想シーンですが…

実は、拙作をこよなく愛してくださる羽衣石さまの作品の1シーンからイメージをいただきました!!

(太一郎と奈那子がゲスト出演している作品はこちら 「北天女神譚異聞」奪いし者、奪われし者」<http://ncode.syosetu.com/n9812t/>)

同じシーンを「輪廻」のほうでも出したいとお願いしたら、快くご了承いただきました。

羽衣石さま、どうもありがとうございました。

では、本年もよろしくお付き合いくださいませ。> () <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9618n/>

愛を教えて 輪廻

2012年1月6日20時23分発行